常用日田行遺跡

福岡県筑後市大字常用所在の遺跡
筑後市文化財調査報告書
第 107 集

2013

筑後市教育委員会

常用日田行遺跡第６次調査

2013

筑後市教育委員会

序

今回報告する常用日田行遺跡は筑後市の南西部、常用地区にあります。市の南西部は、矢部川や山ノ井川、花宗川、沖端川などから得られる豊富な水源や灌漑用クリークが発達した肥沃な台地に田園風景が広がる筑紫平野有数の穀倉地帯です。

この地で弥生時代前期から始まる集落や水利施設の痕跡は、現在の私たちの源となる貴重な文化財です。

私たちの祖先が自然と共存し、生活技術を進化させ、累々と築き培ってきた歴史の一端が今回の調査で明らかとなりました。

これまで常用地区で行われてきた発掘調査で明らかとなった歴史は、私たち筑後市民の未来を創造するための先人からのメッセージです。

本報告を学術研究や地域教育、生涯学習の資料として活用いただき、「地域を知る」「地域文化を守る」「地域に誇りをもつ」「過去から学び将来を見据える」一助になれば幸いです。

本報告にあたり、地権者並びに関係各位に文化財へのご理解、ご協力を賜ったことを深く感謝申し上げます。

平成 25 年 3 月

筑後市教育委員会
教育長　高巣　一規

例言

1. 本書は平成 23 年度に筑後市教育委員会が行った常用日田行遺跡第 6 次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行った。出土遺物、図面、写真等は筑後市教育委員会で収蔵、保管している。発掘調査及び整理作業の関係者は第Ⅰ章に記す。

3. 遺構実測図及び遺構写真撮影は吉村由美子、上村英士が行い、出土遺物の洗浄は辻美穂、接合・復元は辻、宮崎彩香、実測は丸山裕美子、遺構及び遺物のデジタルトレースは西田富美が行った。

4. 今回の調査に用いた測量座標は世界測地系を基準としている。

5. 本書に使用した遺構の表示は以下の略号による（筑後市における埋蔵文化財の取り扱いについて：2008 に準拠する）。
SD：溝　SK：土壙　SP：ピット　SE：井戸　SX：性格不明遺構

6. 本書の執筆上村が行い、デジタル化に伴う編集は西田協力のもと上村が行った。

目次

Ⅰ. 調査経過と組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ. 位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅲ. 調査成果
（1）はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
（2）検出遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
（3）出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

Ⅳ. 考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46

写真図版

抄録

Ⅰ.調査経過と組織

常用日田行遺跡第6次調査は筑後市大字常用字日田行613番地外に所在する。平成19年10月4日に開発原因者である株式会社市丸技研から筑後市教育委員会に「試掘・確認調査依頼書」（現「予備調査依頼書」）が提出され、確認調査を行った。確認調査の結果、当該地で遺構が確認され、平成23年8月8日に原因者から工事計画に伴う文化財保護法第93条が提出され、平成23年9月4日に筑後市教育委員会に「発掘調査依頼書」の提出を受けた。協議の結果、平成23年10月4日に「埋蔵文化財発掘調査受託契約」を締結し、担当課である社会教育課社会教育係による現地での本調査を実施した。当該地の約1237.9㎡について平成23年10月7日から現地での本調査を実施し、平成23年12月12日に現地調査を終了した。平成24年度に整理作業及び報告書作成作業を行い、平成25年3月31日に受託事業の全てを完了した。

発掘調査に関わる調査組織は以下のとおりである。

1）平成23年度

教育長　高巣　一規
社会教育課長　高井良清美
文化スポーツ担当係長　村上　一彦
（文化財専門職）　小林　勇作（事前審査担当）
（文化財専門職）　上村　英士
（文化財学芸員）　吉村由美子（調査担当）
文化財整理室
（整理作業員）　辻　美穂

2）平成24年度

教育長　高巣　一規
社会教育課長　高井良清美
文化スポーツ担当係長　村上　一彦
（文化財専門職）　小林　勇作
（文化財専門職）　上村　英士（報告担当）
（文化財調査員）　立石　真二
文化財整理室
（整理補助員）　丸山　裕見子　西田　富美
（整理作業員）　辻　美穂　宮崎　彩香
発掘調査現場
（発掘作業員）　今山三咲子　植田勝子　河添幸子　城崎マスヨ　田島ヤス子　堤義弘　中村富男　堀田武利　三瀬美樹子　田島英樹　井上むつ子　加々良一美　加藤礼子　隈本干城　角里子　中村三男　原秋子　渡辺泰子

Ⅱ. 位置と環境

・地理的環境

筑後市は福岡県の南西部、筑紫平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市南西部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、潅漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は国道に沿って市の中心部に形成されている。

・周辺遺跡から見る常用遺跡群

今回報告する常用日田行遺跡第6次調査周辺では、平成8年度から県営担い手育成基盤整備事業（以下：圃場整備事業）により発掘調査が行われてきた。常用地区ではFig.1にあるように8遺跡の調査事例があり、特に今次調査に近接する「常用長田遺跡」「常用日田行遺跡」では大規模な面的調査を行い、弥生時代前期以降の大集落や墓地が展開していたことが明らかとなっている。既に昭和40年代後半には「常用遺跡」が小田富士雄氏により指摘されており、後に「常用遺跡」として周知の埋蔵文化財包蔵地が設定されたが、平成8年以降の圃場整備事業において、常用遺跡群の範囲を超えた部分で遺構が展開していることも確認され、今後は周知の埋蔵文化財包蔵地について再検討しなければならない。

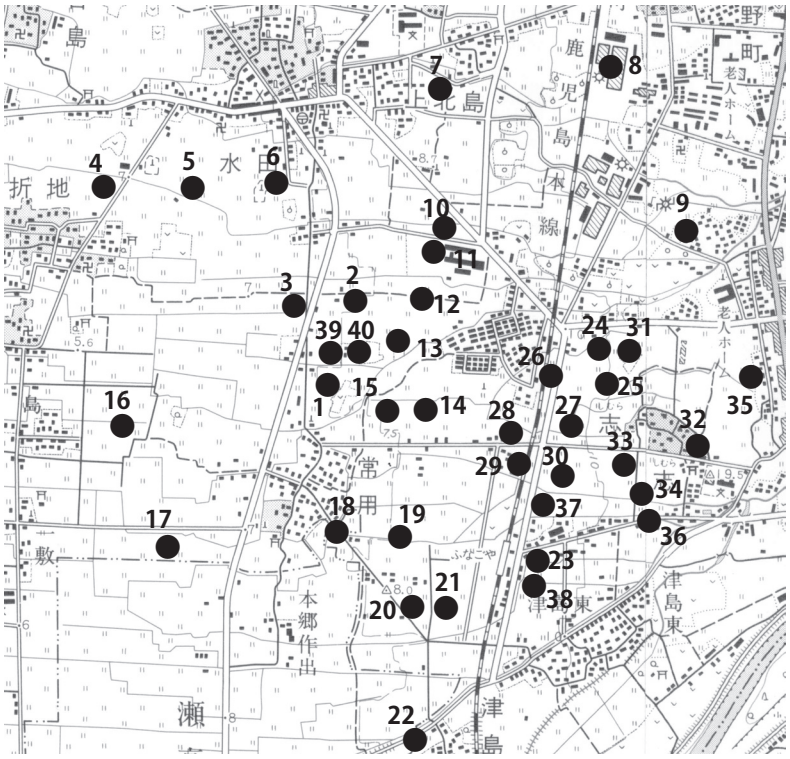


Fig.1　調査地周辺遺跡位置図（1/25000）

Ⅲ. 調査成果

(1) はじめに

調査地の地番は筑後市大字常用字日田行 613 番地である。工事は工場建設と県道接続部分の道路拡張が計画されており、まず道路拡張部分での掘削を行った。しかし、遺跡が存在しなかった為、写真撮影を行い直ちに埋め戻しを行っている。したがって、本発掘調査は工場建設部分の約 1000㎡である。遺構の掘削は表土から遺構面までを（有）徳光建設（代表　橋爪徳光）に委託し、遺構面からは発掘作業員による手作業の掘削を行い、担当職員による測量・実測・写真撮影等を行い、空中写真撮影を（有）空中写真企画（代表　諌山広宣）に委託し記録保存の措置を講じた。現地での調査は吉村由美子が担当し、上村英士が補助的に担当した。

Fig.2　調査地点位置図（1/2500）

(2) 層位

調査地は試掘・確認調査以前は水田であり、試掘・確認調査後に地権者による盛土造成が行われている。現況は約 60cm の盛土下に暗灰黒色粘質土（床土）を調査区西側においてのみ約 5cm 確認し、床土を除去した茶色粘土の地山に遺構が切り込む。地山面の標高は約 6.8 m、地山は粘土質で水はけが非常に悪く、雨天時は幾度となく調査区が水没し排水に苦労することとなった。

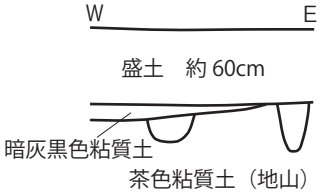


Fig.3　調査区内層位

「Ⅱ. 位置と環境」で記したが、常用地区では昭和 40 年代の小田富士雄氏の踏査で（『狐塚遺跡』1970　筑後市教育委員会　前頁 Fig.1-NO.40 地点）、報告書には地下げ工事に伴った遺構検出の様子が写真に残る。この踏査で確認された遺物は耕作土直下（約 20cm ～ 80cm）の黒色土で確認されており、今回の調査地点も地下げや土取り等の影響で土地が削平された結果、茶色粘土の地山面での遺構検出に留まったことが考えられる。

（3）検出遺構

土壙

6SK001（Fig.4　Pla.2・3）

調査区北東で検出した楕円形に近い土壙である。東側にテラスを設け、検出長軸約 1.47 m、短軸約 1.20 m、最大深さ約 0.38 mを測る。埋土は粘土質系であり、遺物は弥生土器甕、壷、黒曜石剥片、サヌカイト石鏃、石斧を出土している。

6SK005（Fig.4　）

調査区北東隅で検出した不定形の遺構である。検出長軸約 1.03 m、短軸最大約 0.81 m、最大深さ約 0.20 mを測る。埋土は粘土質系であり、遺物は弥生土器甕、底部穿孔の甕を出土している。

6SK010（Fig.4　Pla.3）

SK001 南に近接する隅丸方形に近い土壙である。検出長軸約 1.30 m、短軸約 0.97 m、最大深さ約 0.20 mを測る。長軸に対して両端にテラス状にピットが接続し、短軸にも一部見られる。底部はほぼフラットであり、埋土は粘質土系である。遺物は弥生土器甕、サヌカイト石鏃、黒曜石剥片、土製投弾を出土している。

6SK015（Fig.5　Pla.3・4）

調査区北西隅で検出した不定形な土壙若しくは流路の底部である。北側は調査区外に延びると考えられ検出長約 7.20 m、最大幅約 2.4 mを測り、底部は凹凸が見られ、一部は土壙状を呈する部分も

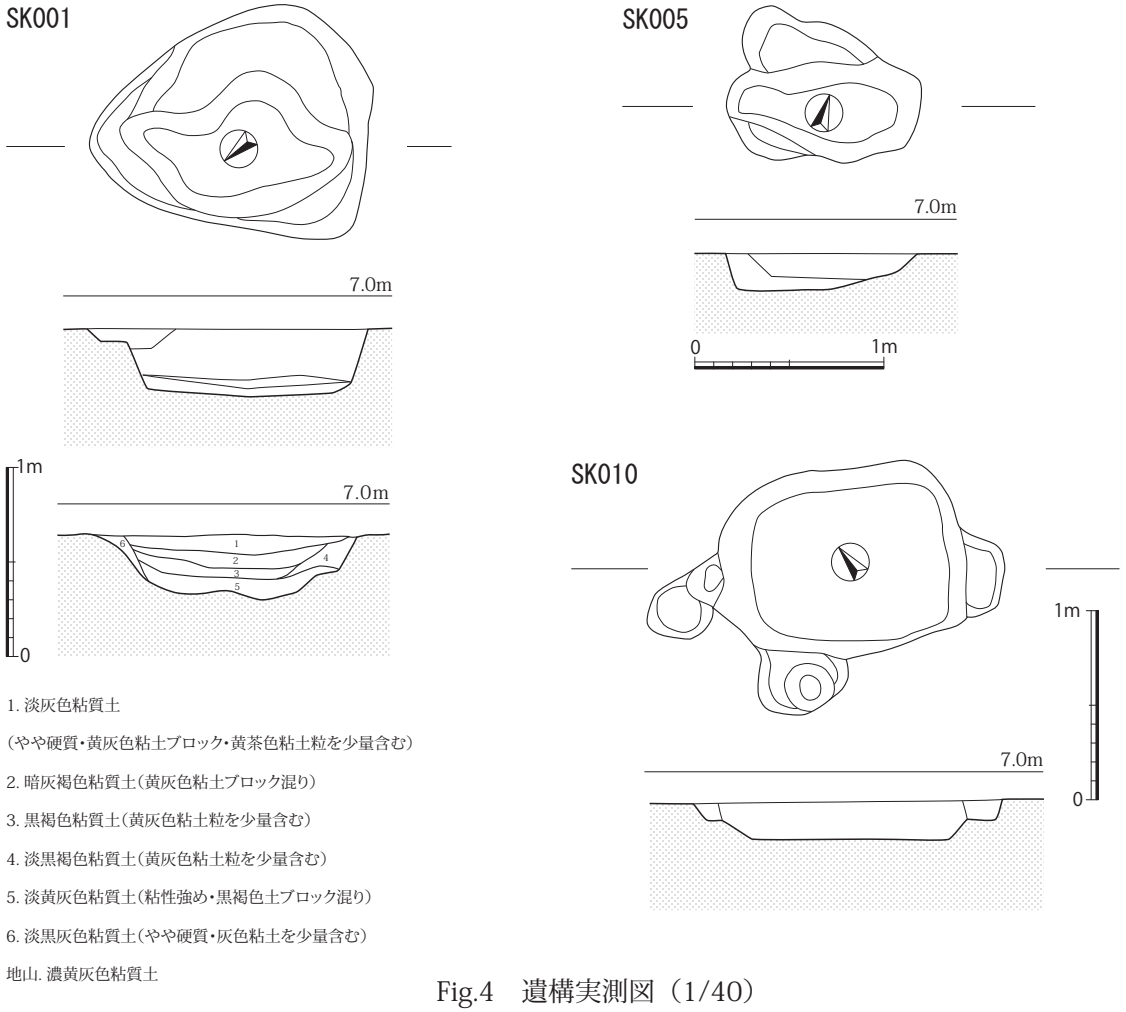
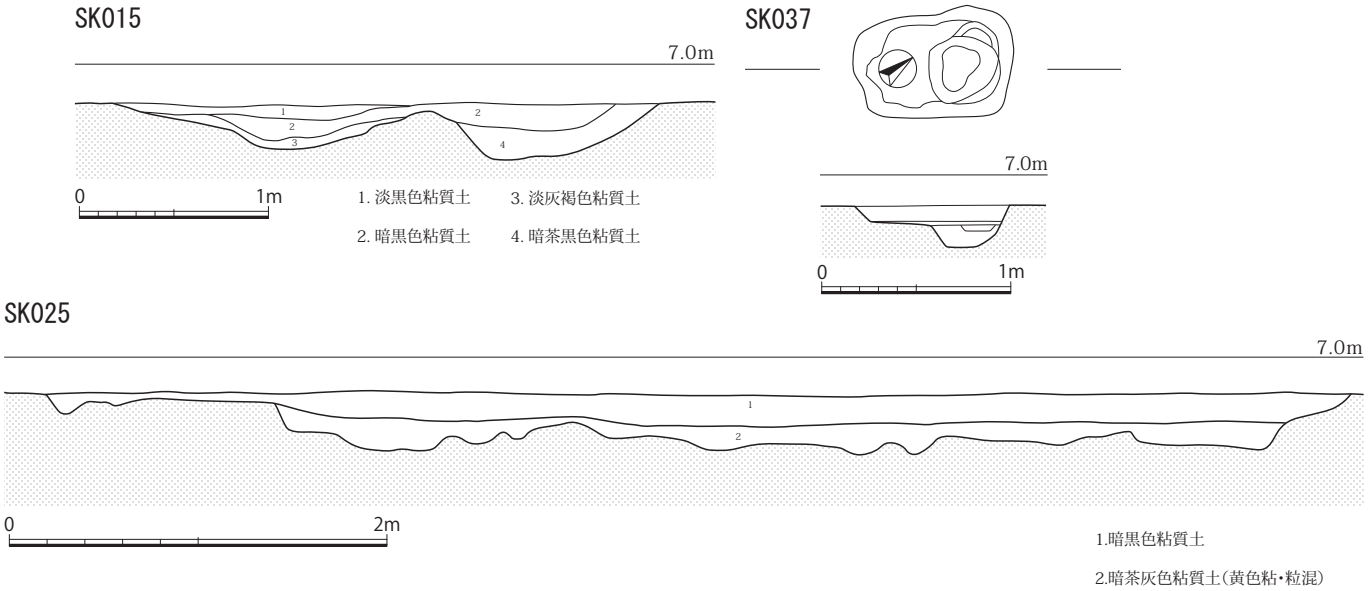


Fig.4　遺構実測図（1/40）



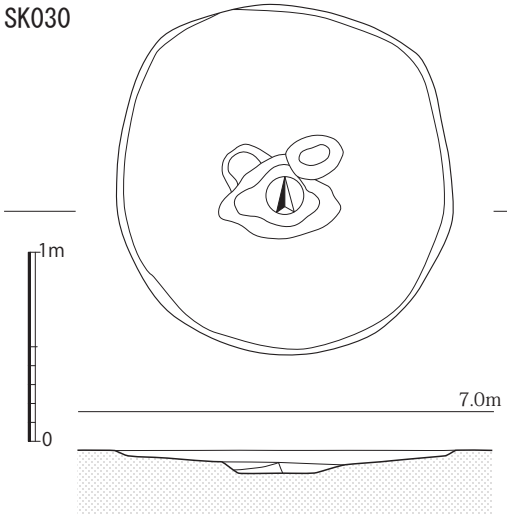


Fig.5　遺構実測図（1/40）

あり、北側へ下がる。埋土は粘質土系で遺物は弥生土器甕、サヌカイト石鏃及び剥片、黒曜石剥片、石包丁、粘土塊を出土している。

6SK020（Fig.14）

6SK015 南に近接する不定形土壙で 6SK025 に切られる。検出長約 3.00 m、最大幅約 2.90 mを測り、底部は凹凸が見られる。埋土は粘質土系で遺物は弥生土器甕、サヌカイト石鏃及び剥片、黒曜石石鏃及び剥片を出土している。

6SK025（Fig.5　Pla.4 ～ 6）

6SK020 を切る楕円形の土壙である。検出長約 7.00 m、最大幅約 3.30 mを測り、底部は凹凸が激しい。遺構端部には複数の小ピット状のものが穿たれ遺構壁面より奥へ掘り込まれている。、埋土は黒色系の粘質土下に灰色系の粘質土がフラットに入る。遺物は弥生土器壷、甕、器台、サヌカイト石鏃及び剥片、石鉋、すり石、土玉、土製紡錘車を出土している。

6SK030（Fig.5）

調査区中央に位置する円形の土壙である検出長軸約 1.85 m、短軸約 1.78 m、土壙中央に小ピット状のものが掘られる。最大深さ約 0.13 mを測る。遺物は弥生土器甕が出土している。

6SK037（Fig.5）

調査区中央東側で検出した南側にテラスを設けた隅円方形の土壙である。検出長軸約 0.84 m、短軸約 0.58 m、テラス深さ約 0.11 m、最大深さ約 0.25 mを測る、遺物は弥生土器甕、不明石製品を出土している。

6SK045（Fig.6　Pla.6）

調査区北西隅で検出した南側にテラスを設けた土壙で調査区外へ延びる。検出長軸約 1.85 m、短軸約 1.30 m、底部は北側へ下がり、最大深さ約 0.23 mを測る。遺物は弥生土器甕、壷、ミニュチュア土器を出土している。

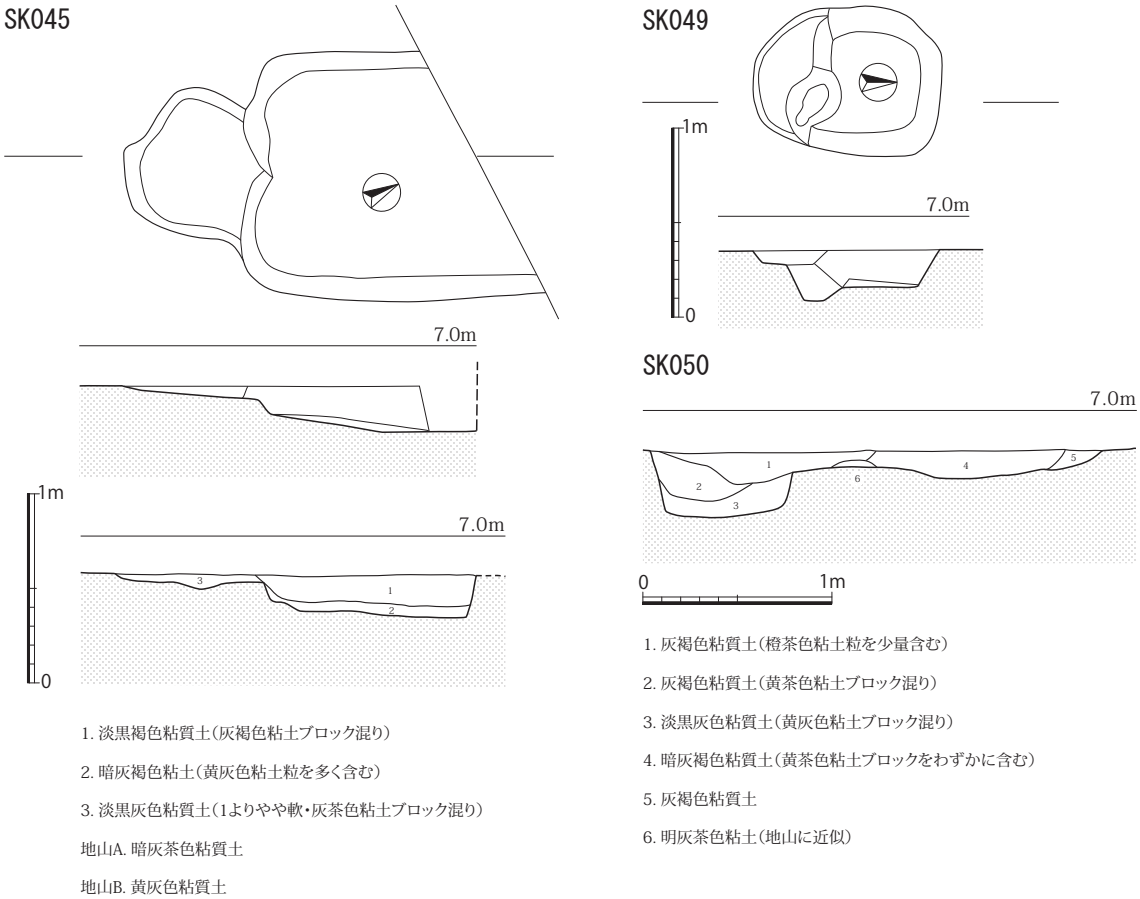


Fig.6　遺構実測図（1/40）

6SK049（Fig.6）

調査区中央で検出した円形に近似する土壙である。南側にテラスを設け、検出長軸約 1.00 m、短軸約 0.79 m、テラス深さ約 0.07 m、最大深さ約 0.19 mを測る、遺物は弥生土器甕、壷、不明石製品を出土している。

6SK050（Fig.6　Pla.7・8）

調査区北西端で検出した流路状の遺構である。検出長軸約 8.70 mを測り、底部は凹凸が激しく、長軸に平行して端部に方形土壙(S-39)等が連結するよう配置されている。埋土は6SK015に近似する。遺物は弥生土器甕、壷、器台、蓋、サヌカイト石鏃及び剥片、黒曜石石鏃及び剥片、石斧、砥石を出土している。

6SK053（Fig.7　Pla.8）

調査区南東で検出した長方形の土壙で、6SD041 に切られる。検出長軸約 2.83 m、短軸約 0.87 m、北側が下がり、最大深さ約 0.32 mを測る。遺物は弥生土器甕、サヌカイト剥片を出土している。

6SK055（Fig.7　Pla.8・9）

調査区北西で検出した土壙である。北側両端にテラスを設け、検出長軸約 2.24 m、短軸約 1.50 mを測り、底部は緩やかなフラット上を呈し、最大深さ約 0.24 mを測る。埋土はすり鉢状に堆積し、検出面中央に灰色粘土が見られる。遺物は弥生土器甕、壷、石包丁を出土している。

6SK061（Fig.7）

調査区中央西寄りで検出した方形の土壙で南側にテラスを設ける。検出長軸約 1.40 m、短軸約 0.74 m、テラス深さ約 0.12 m、最大深さ約 0.24 mを測る。遺物は弥生土器甕、サヌカイト剥片を出土

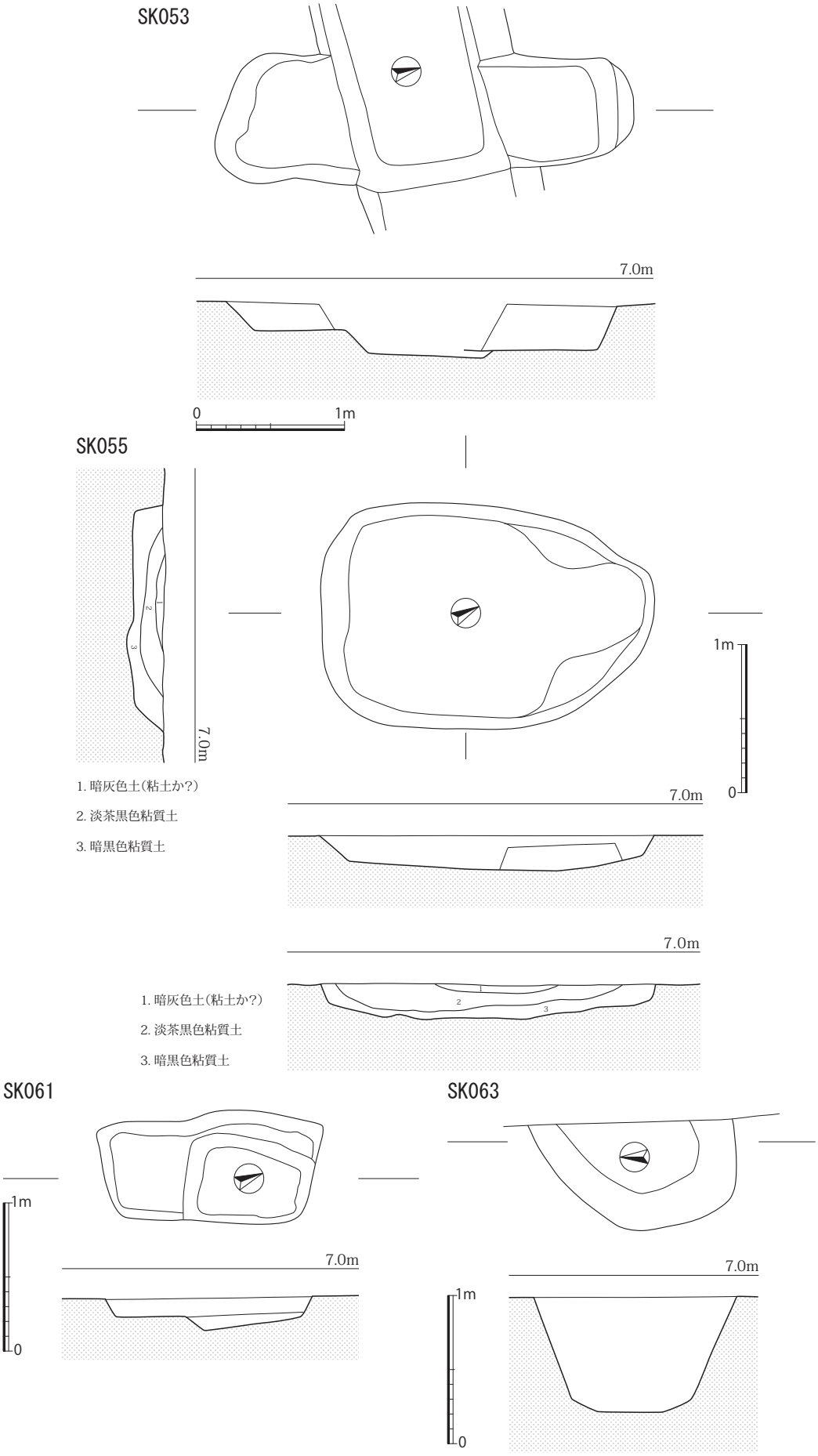


Fig.7　遺構実測図（1/40）

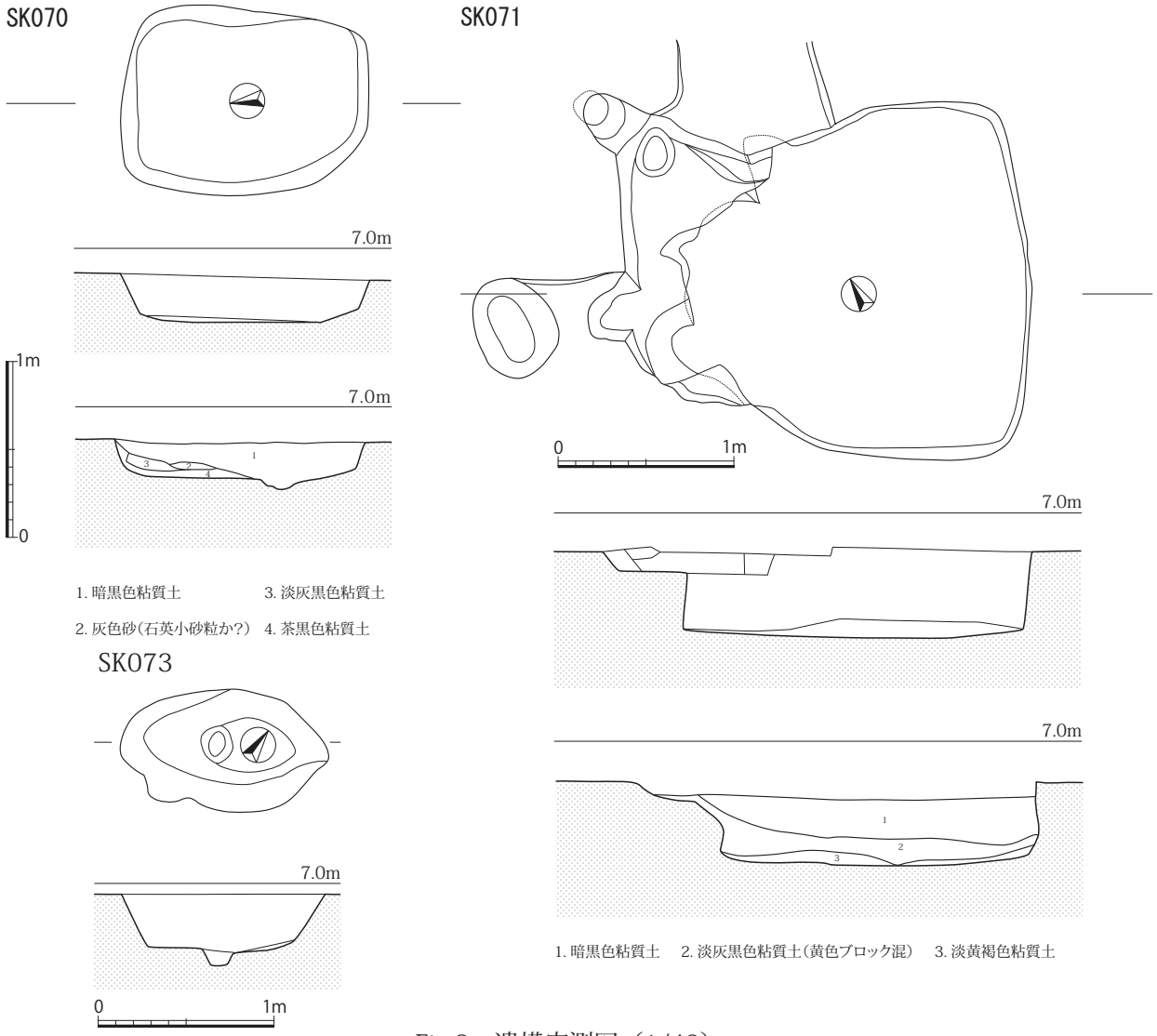


Fig.8　遺構実測図（1/40）

している。

6SK063（Fig.7）

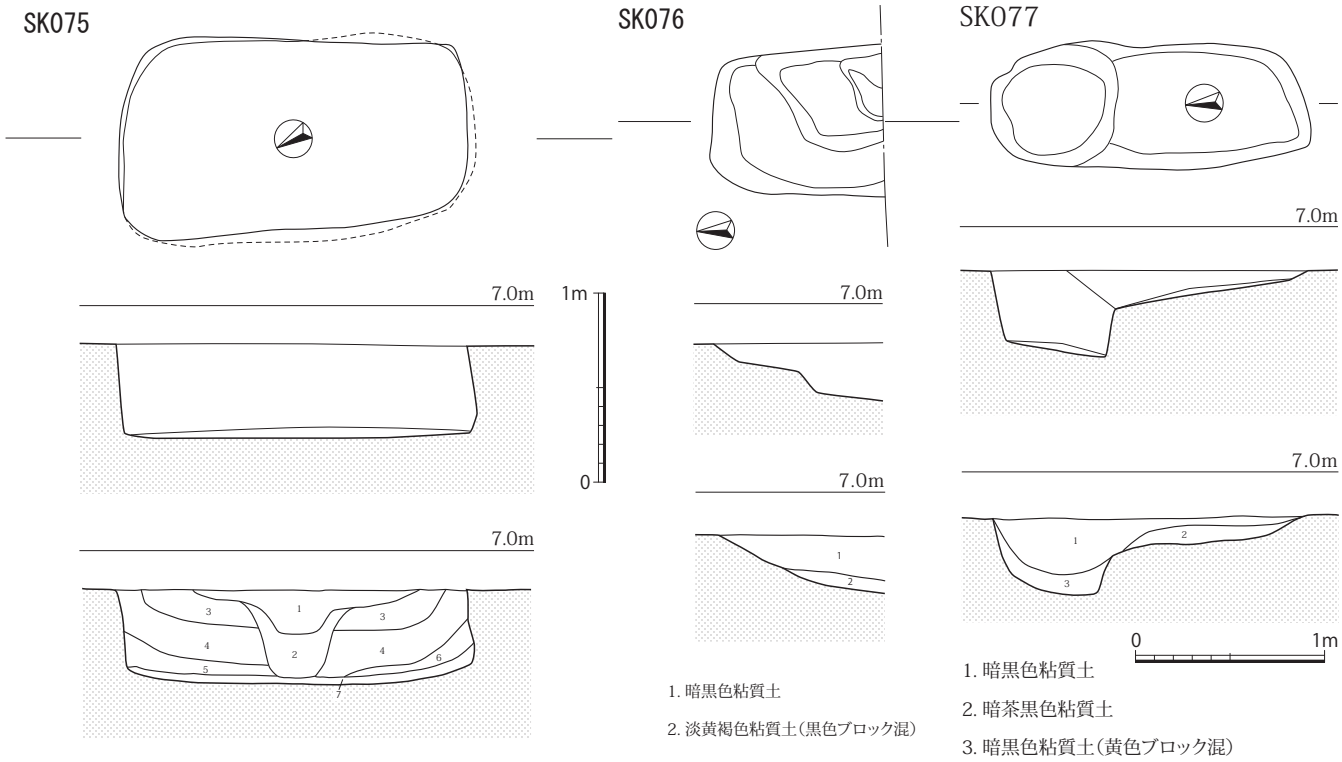
調査区中央東端で検出した円形と考えられる土壙で調査区外へ延びる。検出幅約 1.39 m、最大深さ約 0.76 mを測る。遺物は弥生土器甕、染付碗、青磁碗、須恵質すり鉢を出土している。

6SK070（Fig.8）

調査区中央東側で検出した隅円方形の土壙である。検出長軸約 1.40 m、短軸約 1.06 m、底部は緩やかなフラットで最大深さ約 0.23 mを測る。埋土は概ね粘質土系であるが、一部に石英等の小砂粒を多量に含む層を確認している。遺物は弥生土器甕、壷、鉢、サヌカイト剥片を出土している。

6SK071（Fig.8　Pla.9・10）

調査区中央西端で検出した方形に近似する土壙である。遺構西側のみ乱れており、東側は方形を保つ。検出長軸約 2.43 m、短軸約 2.03 m、底部の方形部分はフラットで最大深さ約 0.52 mを測る。埋土は黒色系の粘質土で、遺構西側の乱れた部分は壁から奥に掘り込まれており、調査時は湧水を伴っている。遺物は弥生土器甕、壷、蓋、鉢、サヌカイト石鏃及び剥片、黒曜石剥片、石包丁、すり石×砥石、石皿、土玉、粘土塊を出土している。



1. 淡灰褐色粘質土(黄白色粘土ブロック・黄茶色粘土粒を少量含む)
2. 暗褐色粘質土(黄茶色・黄白色粘土ブロックを多く含む)
3. 黄白色粘土(淡灰褐色粘質土混り)
4. 暗褐色粘質土(黄白色粘土・褐色粘土混り)
5. 暗褐色粘質土
6. 黄茶色粘土(灰白色粘土・暗灰褐色粘質土混り)
7. 黒褐色粘質土
地山. 明黄白色粘土

Fig.9　遺構実測図（1/40）

6SK073（Fig.8　Pla.10）

調査区南東端で検出した楕円形の土壙で中央が小ピット状に下がる。検出長軸約 1.17 m、短軸約 0.69 m、最大深さ約 0.40 mを測る。遺物は弥生土器甕、サヌカイト石鏃を出土している。

6SK075（Fig.9　Pla.11）

調査区中央で検出した隅円長方形の土壙である。東西南面の底部が壁から奥へ掘り込まれる。検出長軸約 1.84 m、短軸約 1.01 m、底部はフラットで最大深さ約 0.51 mを測る。遺物は弥生土器甕、鉢、ミニュチュア土器蓋、砥石を出土している。

6SK076（Fig.9　Pla.12）

調査区南端で検出した長方形の土壙で調査区外へ延びる。検出長軸約 0.90 m、短軸約 0.76 m、底部はテラス状に段差を設け、最大深さ約 0.33 mを測る。遺物は弥生土器甕、壷、黒曜石石鏃及び剥片、サヌカイト剥片を出土している。

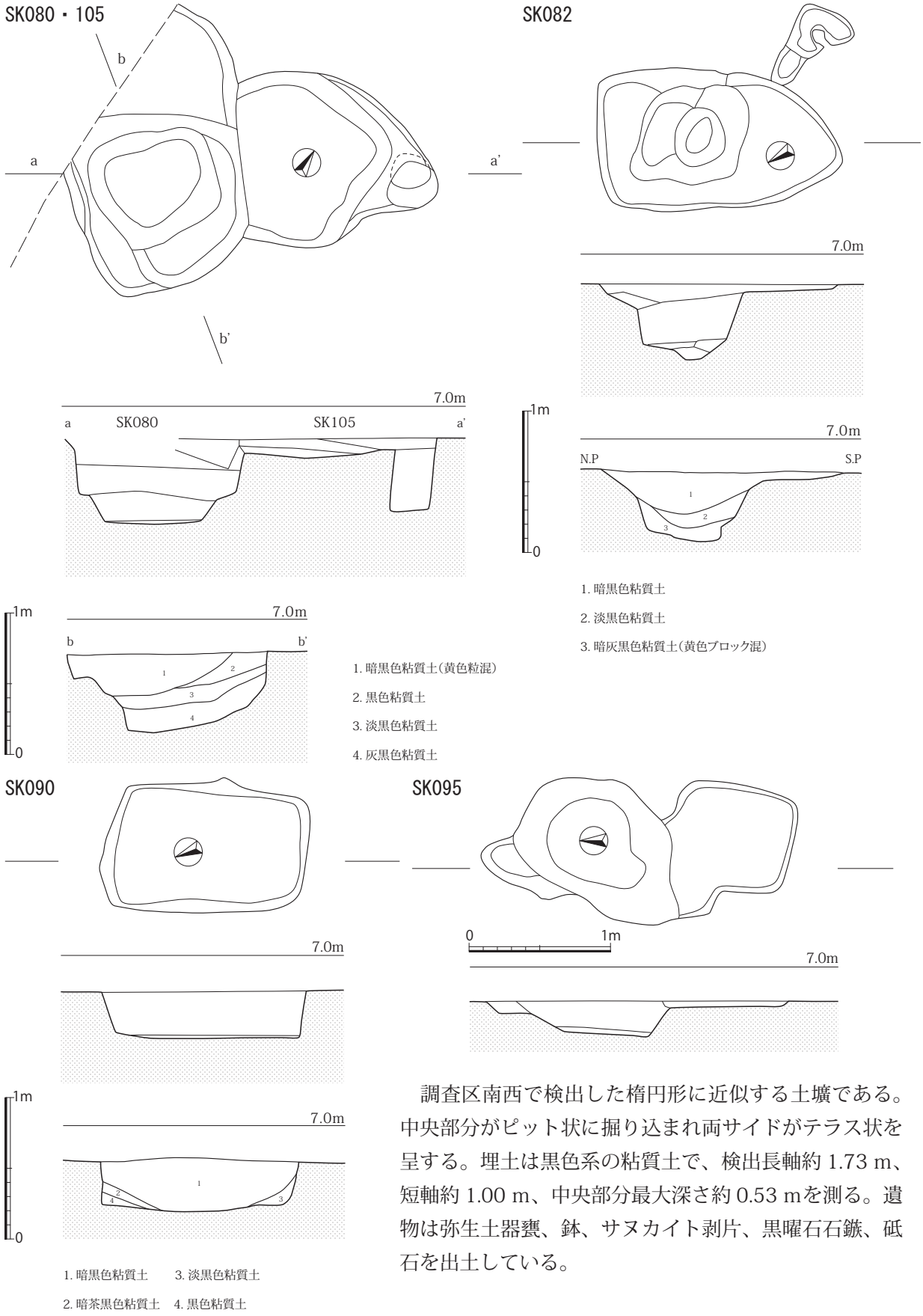
6SK077（Fig.9　Pla.12・13）

調査区南側で検出した隅円長方形の土壙で北側がピット状に掘り込まれ南側はテラス状を呈する。検出長軸約 1.66 m、短軸約 0.66 m、テラス深さ約 0.07 m～ 0.22 mを測る。遺物は弥生土器甕、鉢、蓋、黒曜石剥片を出土している。

6SK080（Fig.10　Pla.13・14）

調査区西端で検出した円形に近似した土壙である。一部は調査区外へ延び、6SK105 を切る。テラスを設けた段掘りで、埋土は黒色系の粘質土である。検出長軸約 1.27 m、短軸約 1.20 m、最大深さ約 0.61 mを測る。遺物は弥生土器甕、壷、黒曜石石鏃、サヌカイト石鏃を出土している。

6SK082（Fig.10　Pla.14）



調査区南西で検出した楕円形に近似する土壙である。中央部分がピット状に掘り込まれ両サイドがテラス状を呈する。埋土は黒色系の粘質土で、検出長軸約 1.73 m、短軸約 1.00 m、中央部分最大深さ約 0.53 mを測る。遺物は弥生土器甕、鉢、サヌカイト剥片、黒曜石石鏃、砥石を出土している。

Fig.10　遺構実測図（1/40）

6SK090（Fig.10　Pla.15）

調査区南端で検出した長方形の土壙である。埋土は黒色系の粘質土で検出長軸約 1.45 m、短軸約 0.90 m、底部はほぼフラットで最大深さ約 0.37 mを測る。遺物は弥生土器甕、壷、高坏、黒曜石剥片、サヌカイト剥片を出土している。

6SK095（Fig.10）

調査区南西端で検出した不定形土壙である。南側が浅いテラス状を呈し、北側は円形に近い土壙となる。検出長軸約 2.18 mw測り、テラス状深さ約 0.04 m、最大深さ約 0.23 mを測る。遺物は弥生土器甕、壷、鉢、石斧を出土している。

6SK099（Fig.11　Pla.15・16）

調査区南端で検出した楕円形に近い土壙である。検出長軸約 2.00 m、最大短軸約 0.94 m、底部は緩やかなすり鉢状を呈し、埋土は黒色系粘質土である。遺物は弥生土器甕、壷、鉢、サヌカイト剥片、黒曜石剥片、砥石を出土している。

6SK100（Fig.11　Pla.16）

調査区南西で検出した細長い不定形な土壙で、掘削後、中央部分が円形の土壙となる。検出長軸約 4.10 m、円形部分径約 1.08 m、深さ約 0.64 mを測る。埋土は黒色系粘質土で底部から若干の湧水が認められる。遺物は弥生土器甕、壷、蓋、サヌカイト剥片、黒曜石剥片、粘土塊、土製紡錘車を出土している。

6SK102（Fig.12　Pla.16）

調査区南西で検出した不定形土壙であったが、掘削後に東西に分かれる土壙となる。円形に近い土壙で底部は凹凸が見られる検出長軸約 1.10 m、短軸約 0.84 m、深さ約 0.14 mを測る。遺物は弥生土器甕、壷、鉢、サヌカイト片、土製紡錘車を出土している。

6SK103（Fig.12　Pla.17）

6SK102 隣で検出した円形に近似した土壙で北側がテラス状を呈する。土壙中央に小ピットが掘り込まれる。検出長軸約 2.05 m、短軸約 1.15 m、最大深さ約 0.51 mを測る。遺物は弥生土器甕、壷、鉢、サヌカイト剥片、砥石を出土している。

6SK105（Fig.10　Pla.13）

6SK080 に切られる円形に近い土壙でテラス状を呈する部分にピットを設ける。検出長軸 1.35 m、短軸約 1.23 m、底部はフラットで深さ約 0.13 m、ピット状部分は側面から北側奥へ掘り込んでいる。遺物は弥生土器甕、壷、サヌカイト剥片を出土している。

井戸

6SE065（Fig.12　Pla.18）

調査区北西で検出した円形の井戸と考えられる。最大径約 2.20 m、深さ約 1.32 mを測り、調査時にも湧水がある。弥生土器甕、壷、砥石、すり石、木製品を出土している。

溝

6SD041（Fig.12　Pla.17）

調査区東側で検出した東西に走る溝で、調査区内で途切れ、東側は調査区外へ延びる。検出長約 6.70 m、幅約 1.30 m、深さ約 0.47 mを測る。断面は緩やかな U 字状を呈し、埋土は灰色系粘質土である。

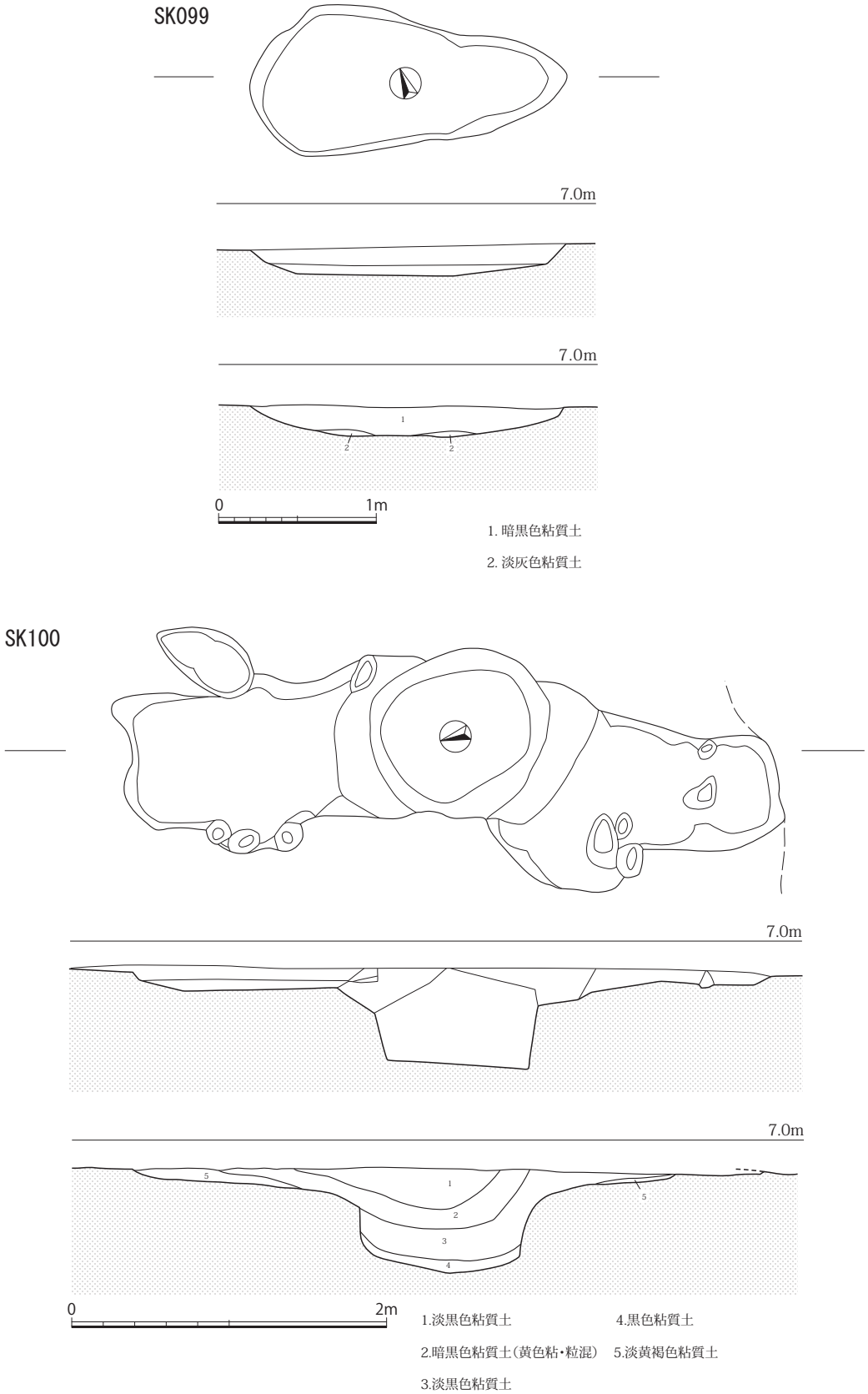


Fig.11　遺構実測図（1/40）

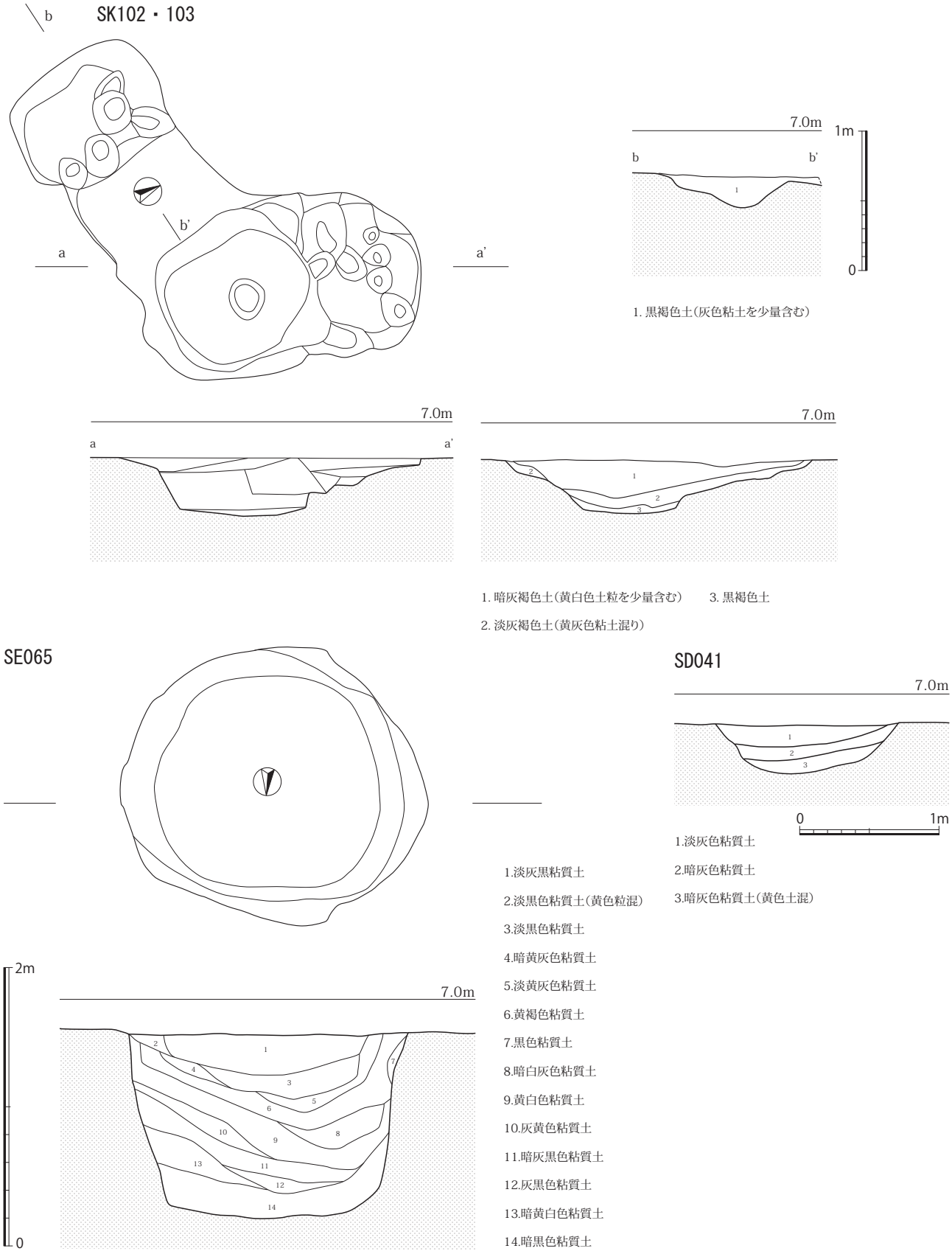


Fig.12　遺構実測図（1/40）

S-番号	遺構番号	内容：旧→新	地区
1	SK001	土壙	F2
2		ピット	G3
3		ピット	G3
4		ピット	G3
5	SK005	土壙	B2
6		ピット	B2
7		ピット	G3
8		土壙？	G3
9		ピット	G3
10	SK010	土壙	G2
11		ピット	C4
12		土壙	E4
13		ピット	E3
14		土壙：22→14	F4
15	SK015	土壙×流路	D5
16			
17		ピット	B6
18		ピット	C7
19		土壙	E4
20	SK020	土壙×流路：20→25	F6
21		土壙	E4
22		土壙：22→14	F3
23		土壙	E5
24		土壙	D5
25	SK025	土壙：20→25	H6
26		土壙：10下層	G2
27		ピット	D7
28		土壙	D6
29		ピット	F8
30	SK030	土壙	H5
31		ピット	G5
32		土壙	H5
33		ピット	D7
34		土壙	C8
35		土壙	F7
36		土壙	H3
37	SK037	土壙	I2
38		ピット	H3
39		土壙：50下層	D9
40		土壙	G7
41	SD041	溝：53→41	J1
42		ピット	I6
43		ピット	H7
44		ピット	K8
45	SK045	土壙	C7
46		ピット	I7
47		ピット	J9
48		ピット	K8
49	SK049	土壙	J6
50	SK050	土壙×流路	E9
51		土壙	J6
52		土壙	K8
53	SK053	土壙：53→41	K2
54		ピット	K6
55	SK055	土壙	F8
56		土壙	I8
57		ピット：71→57	I8
58		土壙	I7
59		土壙	J8

S-番号	遺構番号	内容：旧→新	地区
60		土壙	E9
61	SK061	土壙	J7
62		土壙：100→62	K6
63	SK063	土壙	K1
64	SP064	ピット	K1
65	SE065	井戸	G8
66		ピット	K1
67		ピット	K3
68		ピット	L3
69		土壙	M3
70	SK070	土壙	J3
71	SK071	土壙：71→57	J7
72		ピット	N3
73	SK073	土壙	O1
74		土壙：74→87	O2
75	SK075	土壙	I4
76	SK076	土壙	O5
77	SK077	土壙	N4
78		土壙	K5
79		土壙	L5
80	SK080	土壙：105→80	J9
81		ピット	L5
82	SK082	土壙	L7
83		ピット	L4
84		土壙	L4
85		土壙	M8
86		ピット	K4
87		土壙×溝：74→87	O2
88		ピット：87下層	N2
89		ピット	N0
90	SK090	土壙	O6
91		ピット	N1
92	SK092	ピット	O3
93		ピット	K6
94		ピット	N7
95	SK095	土壙	O8
96		ピット	L8
97		ピット	K7
98		土壙	O8
99	SK099	土壙	N6
100	SK100	土壙	L6
101		ピット：82→101	L7
102	SK102	土壙	M8
103	SK103	土壙	M7
104		土壙	L9
105	SK105	土壙	L9
106		土壙	L10
107		ピット	L11

Tab.1　遺構番号台帳

Fig.13　遺構略測図（1/200）

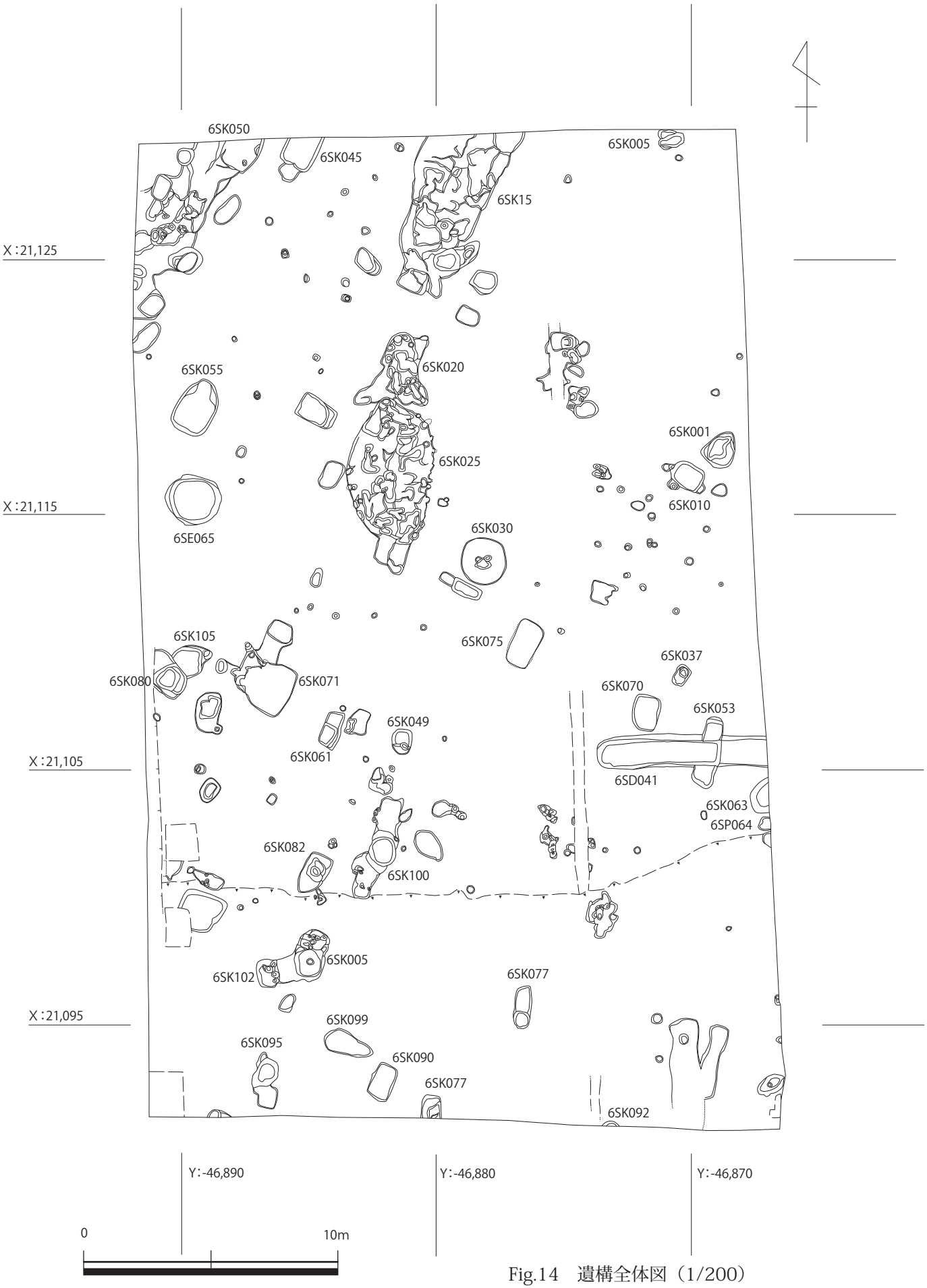


Fig.14　遺構全体図（1/200）

（4）出土遺物（法量は遺物観察表参照）
土壙
6SK001（Fig.15　Pla.19）
弥生土器（1 ～ 4）1 は壷で頸部外面に二条の沈線を施し、外面はハケ目、内面は不定方向のナデ。2 は甕×壷の底部片で外面に縦方向のミガキを施す。3 は甕片で口縁端部に緩い断面三角形の突帯を貼る。4 は甕底部片で底部外面調整の指頭痕が残り、内面には工具痕が残る。
石製品（5・6）5 は砂岩製の太型蛤刃石斧片で基部は欠損。6 はサヌカイト製の有茎石鏃。
6SK005（Fig.15　Pla.19）
弥生土器（7･8）7 は甕底部片で中央に焼成後の穿孔、調整はナデ。8 は甕口縁片で外面にキザミ目。
6SK010（Fig.15　Pla.19）
弥生土器（9・10）9 は甕片で口縁下に突帯を貼り付け、内面に指頭痕が残る。10 は底部片で内面は工具によるナデ。
土製品（11）投弾で全面ナデ調整。胎土が精良である。
石製品（12）サヌカイト製の石鏃で抉りは浅い。
6SK015（Fig.16　Pla.19・20）
弥生土器（13 ～ 18）13 は甕片で断面三角形の口縁下に二条の潰れた突帯を貼り付ける。口縁及び突帯にはキザミ目を施す。14 は甕口縁部にキザミ目、内外面は斜方向のハケ目を施す。15 は甕底部片で若干の上げ底。16 は甕×壷底部片で一部指頭痕が残るが磨耗が激しく調整不明。17 は甕底部片で上げ底で中央に焼成前の穿孔。18 はミニュチュアの蓋片で残存で二ヶ所に穿孔が見られ、完形であれば四個と推定される。
石製品（19 ～ 22）20 は石創状の石器でサヌカイト製。21、22 はサヌカイト製の石鏃。
6SK020（Fig.16　Pla.20）
弥生土器（23 ～ 26）23 は甕片で口縁部に細いキザミ目を施す。内面に指頭痕、不定方向のナデ。24 は甕片で垂れ下がり気味の断面台形の突帯を貼り付ける。25 は甕片で断面三角形の口縁部を撥ね上げ気味に貼り付け、一条の潰れた突帯が付く。26 は底部片で上げ底、磨耗が著しい。
6SK025（Fig.17・18　Pla.21・22）
弥生土器（29 ～ 39）29 は壷片で二条沈線が頸部と胴部二ヶ所に施される。30 は壷底部片で磨耗が著しく調整不明。31・32 は甕片で断面三角形の突帯下に潰れた断面三角形の突帯を貼る。突帯にはキザミ目を施す。33 ～ 35 は甕口縁片で口縁に断面三角形の突帯を貼る。36 は壷口縁片で頸部に潰れた突帯を貼る。37 ～ 39 は甕底部片で 38 には焼成後の穿孔が見られる。40 は器台で磨耗が著しく一部に指頭痕が残るが調整不明。41 は不明製品、両端部に面取りを施し、キザミ目が見られる。
土製品（42・43）42 は淡赤褐色を呈する土玉。43 は暗茶褐色を呈する紡錘車片。
石製品（44 ～ 51）44 は石包丁片。45 は砂岩製で円形のすり痕が残り、砥石の可能性あり。46 はサヌカイト製の石刃で下部が欠損。47 ～ 50 はサヌカイト製石鏃。51 は安山岩製の砥石。
6SK030（Fig.19　Pla.22）
弥生土器（52 ～ 54）52 は甕片で屈曲した口縁部、口唇部にキザミ目を施す。53 は甕片で口縁部に断面三角形の突帯を貼りキザミ目を施す。54 は底部片で底部外面ナデ調整。
6SK037（Fig.19　Pla.22）
弥生土器(55･56)55 は甕底部片で外面に横方向のミガキを施す。56 は甕片で横方向のミガキを施す。
6SK045（Fig.19　Pla.22・23）

弥生土器（57 ～ 62）57 は甕片で屈曲した口縁をもち、口唇部にキザミ目を施す。58 は甕片で断面三角形の突帯を貼り、突帯下に貼り付け時の指痕跡が残る。59 は甕×鉢の口縁部片で外面に横方向のミガキを施す。60 は甕底部片で内外面に指頭痕が残る。61・62 はミニュチュアの甕片で共にナデ調整、61 は上げ底を呈する。

6SK049（Fig.19　Pla.23）

弥生土器（63 ～ 65）63 は甕口縁部片で断面三角形の突帯にキザミ目、体部外面は横方向のミガキ、内面は指頭痕が残る。64・65 は甕口縁部片で 64 は内面、65 は内外面に横方向のミガキを施す。

石製品（66）赤褐色を呈する不明製品で全体が研磨されている。

6SK050（Fig.20・21　Pla.23 ～ 25）

弥生土器（67 ～ 84）67 ～ 74 は甕口縁部片で断面三角形の突帯若しくは屈曲する口縁をもち、突帯にはキザミ目を施す。71 のみ口縁下に沈線が巡る。75 ～ 80 は甕底部片で 75 は上げ底、78 は中央に焼成後の穿孔をもつ。他は平底を呈する。81 は壷体部片で外面に数条の沈線で文様を描く。82 は小壷片。83 は蓋片で天井部が凹む。84 は甕口縁部片と考えられ、一部に鍔状の突帯が付く。

石製品（85 ～ 94）85 ～ 87 はサヌカイト製石鏃、88 ～ 90 は黒曜石製石鏃。91 は扁平片刃石斧の一部か。92 は安山岩製の太型蛤刃石斧。93 は砂岩製の砥石。94 は安山岩製の石斧か。

6SK053（Fig.22　Pla.25）

弥生土器（95 ～ 100）95 ～ 98 は甕片で 95 は断面三角形の突帯、他はく字状に屈曲する口縁で口唇部にキザミ目を施す。99 は屈曲する頸部下に突帯を貼りキザミ目を施す。100 は甕底部片で内外面共にナデ調整。

6SK055（Fig.22　Pla.25・26）

弥生土器（101 ～ 106）101 ～ 103 は甕口縁片で断面三角形の突帯にキザミ目を施す。104 ～ 106 は壷片で 105・106 は内面に横方向のミガキを施す。

石製品（107）片岩製の石包丁片で刃部の作りが荒い。

6SK061（Fig.22　Pla.26）

弥生土器（108・109）108 は甕片で断面三角形の突帯下に一条の突帯が貼り付けられる。109 は底部片で焼成後の穿孔が見られる。

6SK063（Fig.22　Pla.26）

磁器（110・111）110 は竜泉窯系青磁碗片で内外面に文様を描き、緑灰色の釉を施す。111 は染付碗片で内外面に呉須で文様を描く。

6SK064（Fig.22　Pla.26）

弥生土器（112）夜臼系の甕片で断面三角形の突帯にキザミ目を施す。

6SK070（Fig.23　Pla.26・27）

弥生土器（113 ～ 120）113 ～ 116 は甕口縁部片で内外面に横方向にミガキを施す。117 は甕×鉢で断面三角形の突帯にキザミ目を施す。118 は壷片で内面にハケ目が残る。119 は壷底部片で焼成不良で調整不明。120 は甕片で内面は横方向、外面は斜方向のナデが残る。

6SK071（Fig.23 ～ 25　Pla.27・28）

弥生土器（121 ～ 137）121 は壷片で外面は縦方向のミガキ後、頸部下に二条の沈線を巡らす。122 は壷胴部片で二条の文様を描く。123 ～ 125 は甕片で 125 は断面三角形の突帯下に二条の突帯を貼りキザミ目を施す。外面調整ハケ目。126 ～ 130 は甕口縁部片で突帯を貼り付け、127・129 はキザミ目を施す。131 ～ 134 は甕底部片で 131 は焼成後の穿孔。132 は外面縦方向のミガキ。134 は

外面縦方向のハケ目。135・136 は鉢片で 135 は内面に横方向のミガキ。136 は若干歪みがあり、焼成不良で調整不明。137 は蓋片で外面縦方向のハケ目、天井部は凹む。
土製品（138）土玉で全面ナデ調整。
石製品（140 ～ 143）140･141 はサヌカイト製石鏃。142 は片岩製の石包丁。143 は砂岩製の石皿。
6SK073（Fig.25　Pla.28）
石製品（144）サヌカイト製の石鏃。
6SK075（Fig.26　Pla.28・29）
弥生土器（145 ～ 153）145 ～ 151 は甕片で 145 ～ 147 は外面に縦ないしは斜方向にハケ目を施し、断面三角形の突帯を貼る。148 は口縁部内面にキザミ目を施す。150 は内外面に不定方向にミガキを施す。151 は口唇部にキザミ目を施す。152 は鉢片で外面に縦方向のハケ目を施す。153 はミニュチュアの蓋片で手づくねの指頭痕が残る。
石製品（154・155）154 は安山岩製の砥石。155 は石錘か。
6SK076（Fig.26　Pla.29）
弥生土器（156 ～ 161）156 は甕片で断面三角形の突帯を貼り、キザミ目を施し、内面には指頭痕が残る。157・158 は甕口縁部片で 158 は口唇部にキザミ目を施す。159・160 は甕底部片で内外面に工具痕が残る。161 は蓋端部片で調整は横方向のナデ、端部は粘土のズレを生じている。
石製品（162）黒曜石製の石鏃で一部欠損。
6SK077（Fig.27　Pla.29・30）
弥生土器（163 ～ 165）163 は蓋端部で内外面に横方向のミガキを施す。164 は鉢片で口縁外面にキザミ目を施し、胎土は精良。165 は甕片で口唇部にキザミ目を施す。
6SK080（Fig.27　Pla.30）
弥生土器（166 ～ 171）166・167 は壷片で内外面に横方向のミガキを施す。168 は壷胴部片で外面に線刻で文様を描き、内面はミガキを施す。169・170 は甕片で 170 は口唇部にキザミ目を施す。171 は甕底部片で外面に縦方向のミガキを施す。
石製品（172・173）172 はサヌカイト製石鏃。173 は黒曜石製石鏃。
6SK082（Fig.27　Pla.30・31）
弥生土器（174 ～ 178）甕片で 174 は断面三角形の突帯にキザミ目を施す。175 は口縁端部がやや両サイドに張り出す。176 は口唇部にキザミ目。177 は口縁端部であるが横方向にミガキを施す。178 は底部片で外面に縦方向のハケ目。
石製品（179・180）179 は安山岩製の砥石。180 は黒曜石製の石鏃。
6SK090（Fig.28　Pla.31）
弥生土器（181 ～ 183）181 は壷片で外面に線刻で文様、内面は不定方向にミガキを施す。182 は甕口縁端部片で口唇部にキザミ目を施す。183 は蓋×高坏の端部片で調整はナデ。
6SK092（Fig.28　Pla.31）
弥生土器（184）壷片で外面に横方向のミガキ後に線刻で文様を描く。
6SK095（Fig.28　Pla.31）
弥生土器（185 ～ 190）185 は壷片で頸部は縦方向のミガキ、頸部下に沈線を施し胴部にミガキを施す。186 ～ 190 は甕片で口縁端部にキザミ目を施す。187 は内面調整に斜方向のハケ目を施す。
石製品（191）安山岩製の石斧。
6SK099（Fig.29　Pla.31・32）

弥生土器（192 ～ 199）192・193 は壷片で内外面に密にミガキを施し、193 は肩部に沈線が巡る。194 甕片で口唇部にキザミ目、体部に横方向と斜方向にミガキを施す。195 ～ 199 は甕片で口縁部突帯にキザミ目、199 は底部片で若干上げ底を呈する。
石製品（200・201）200 は砂岩製の砥石。201 はサヌカイト製石鏃。
6SK100（Fig.29・30　Pla.32・33）
弥生土器（202 ～ 212）202 は壷片で外面は細かいミガキを全面に施した後、頸部下に沈線を施し、輪状に貝殻文を施す。内面は横方向のナデ。203 ～ 209 は甕片、204 ～ 206 の口縁突帯にはキザミ目、208 の如意口縁には口唇部にキザミ目を施す。210 ～ 212 は甕底部片で 212 は底部外面に籾痕を確認できる。
土製品（213）紡錘車で磨耗が著しく調整不明。
6SK102（Fig.30　Pla.33）
弥生土器（214 ～ 220）214 は甕片で断面三角形の突帯にキザミ目を施す。215・216 は鉢片で調整はナデ。217 は夜臼系の甕片で口縁及び屈曲部に断面三角形の突帯にキザミ目を施す。内面は指頭痕が残る。218 は甕片で内面にハケ目の工具痕が残る。219 は甕底部片で内面斜方向のハケ目、外面は縦方向にハケ目を施す。220 は小型の鉢で内外面に細かい横方向のミガキを施し、底部外面には指頭痕が残る。
6SK103（Fig.31　Pla.33・34）
弥生土器（221 ～ 225）221 は甕片で断面三角形の突帯下に潰れた突帯を貼り付けキザミ目を施す。外面調整は縦方向のハケ目、内面はナデ。222 は鉢片で外面にはキザミ目、端部内面の粘土が内側へ若干突出する。調整は横方向のナデ。223 ～ 225 は甕底部片で 223 は外面縦方向のハケ目、224 は内面に工具痕が残る。225 は若干上げ底。
石製品（226）砂岩製の摺り石で中央に摺り面が残る。
6SK105（Fig.32　Pla.34）
弥生土器（227 ～ 229）227 は壷片で外面に幅 2㎜程度のミガキが全面に入り、上から線刻で文様を描く。内面には横方向のミガキを施す。228 は甕片で断面三角形の突帯を貼り付けキザミ目を施す。229 は甕片で口唇部にキザミ目を施す。
溝
6SD041（Fig.32　Pla.34）
磁器（230）竜泉窯系青磁碗で外面に鎬連弁が見られる。
井戸
6SE065（Fig.32・33　Pla.34・35）
弥生土器（231 ～ 247）231 は壷片で頸部下に断面三角形の突帯を貼り、内外面には横・斜方向のミガキを施す。232 ～ 239 は断面三角形の突帯を貼り付けキザミ目を施す甕片である。234 は突帯下に爪型のような文様をキザミ目下に連続して施す。237 は内面調整にハケ目とミガキを併用している。240 ～ 242 は甕口縁片で 240・242 は内外面にミガキを施す。243 ～ 247 は甕底部片で 243・244 は外面に斜方向にミガキを施す。245 ～ 247 は底部片で外面に縦方向のハケ目を施す。
石製品（248 ～ 250）248 は扁平片刃石斧、249 は安山岩製の摺り石、250 は安山岩製砥石である。
木製品（251）板状の木製品で短軸は面取りを行い、材質は杉と考えられる。
遺構検出包含層（Fig.33　Pla.35）
弥生土器（252）ミニュチュアの鉢片で手づくねによる指頭痕が残る。調整はナデ。

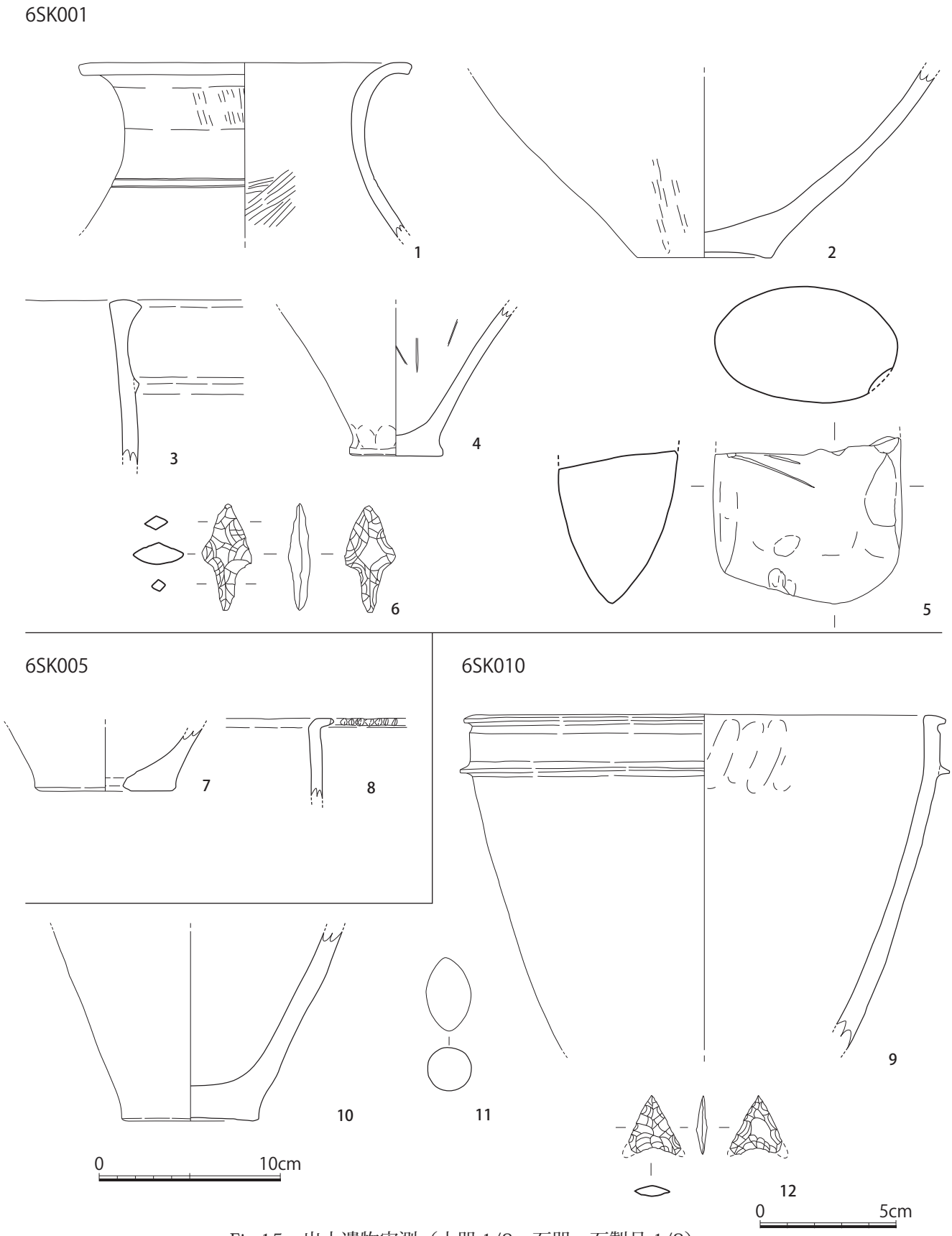


Fig.15　出土遺物実測（土器 1/3、石器・石製品 1/2）

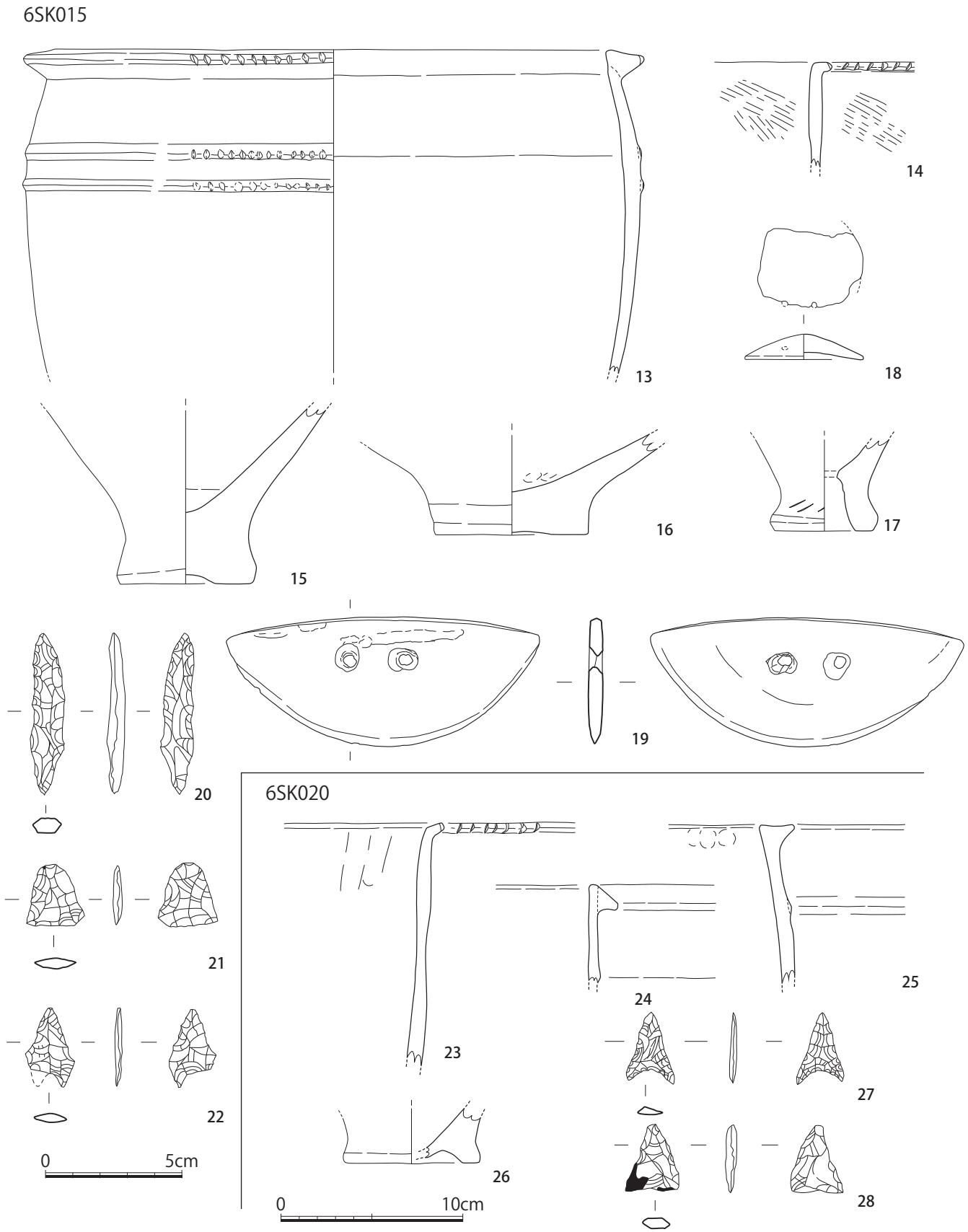


Fig.16　出土遺物実測（土器 1/3、石器・石製品 1/2）

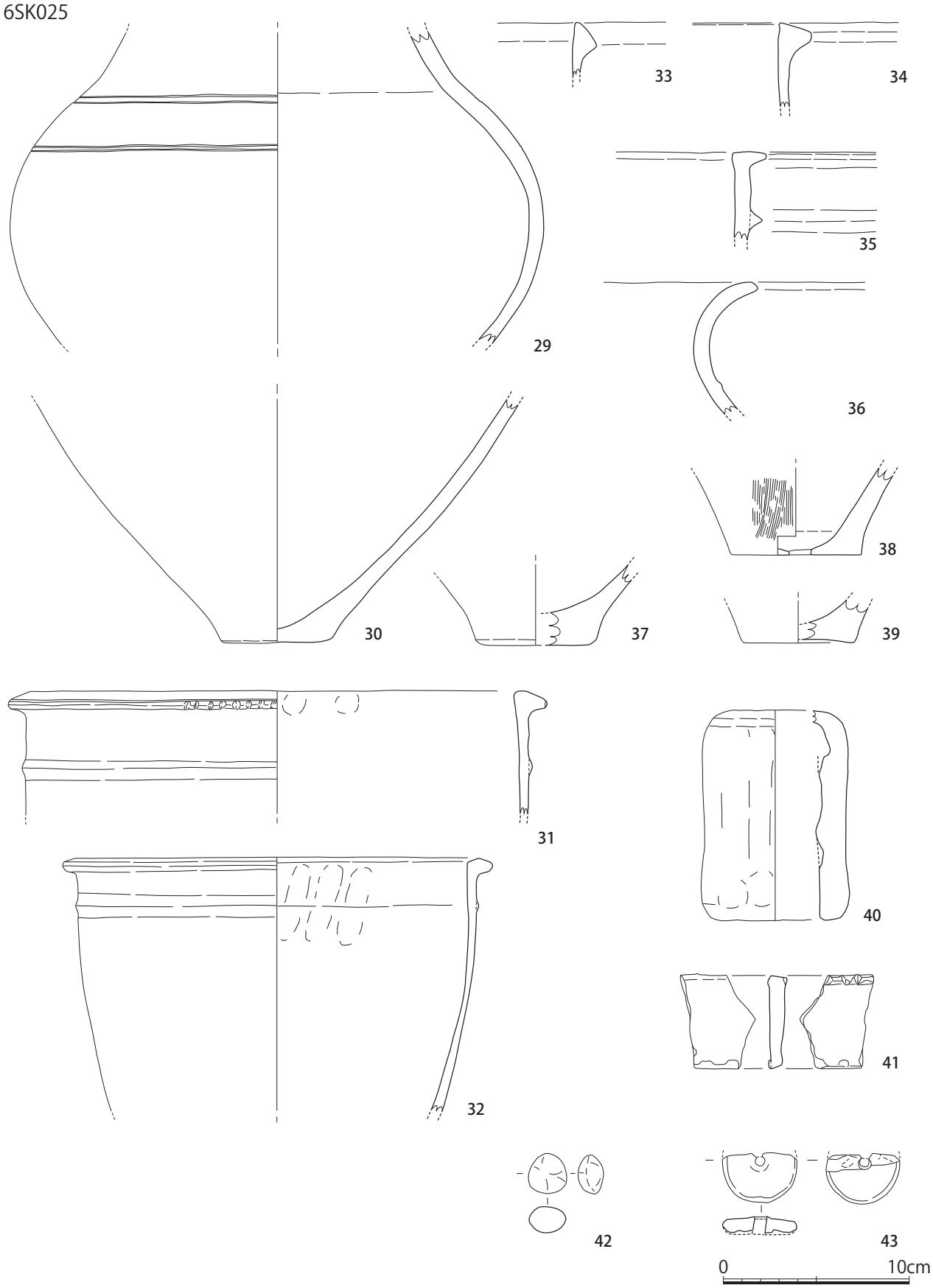


Fig.17　出土遺物実測（1/3）

6SK025

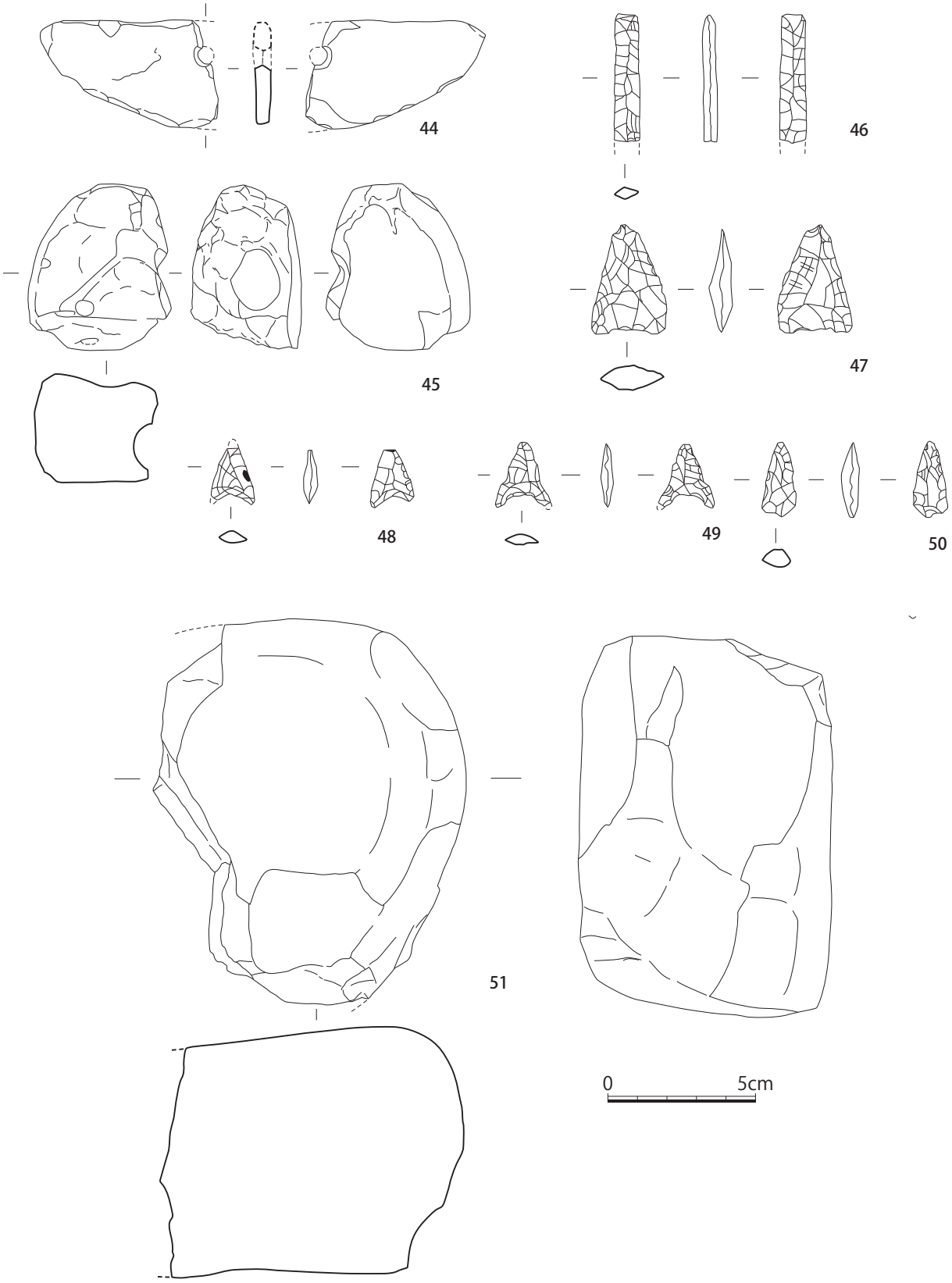
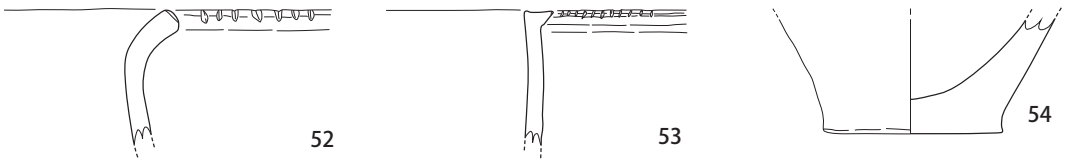
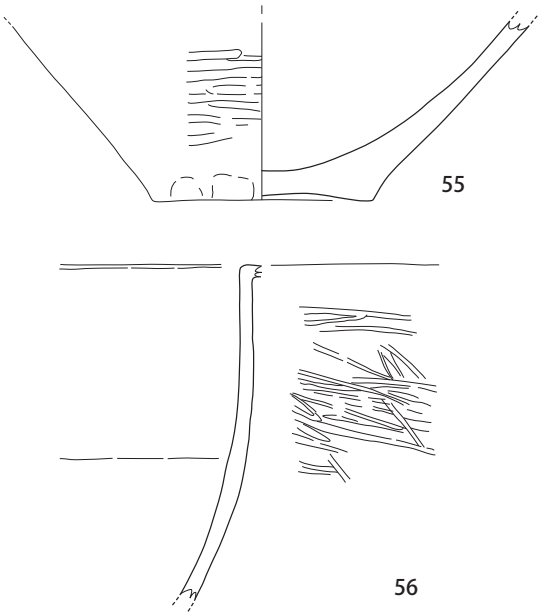


Fig.18　出土遺物実測（1/2）

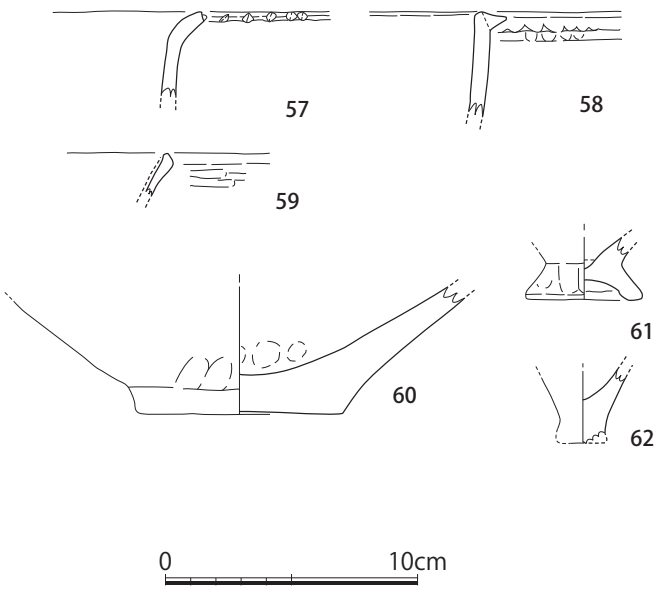
6SK030



6SK037



6SK045



6SK049

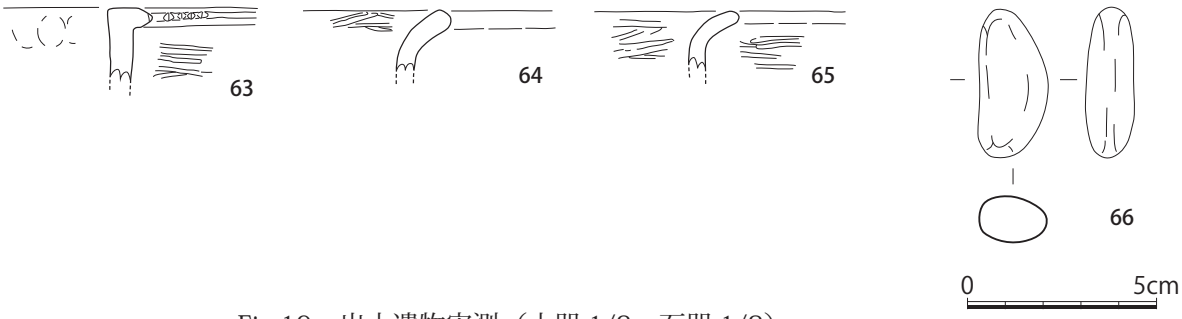


Fig.19　出土遺物実測（土器 1/3、石器 1/2）

6SK050

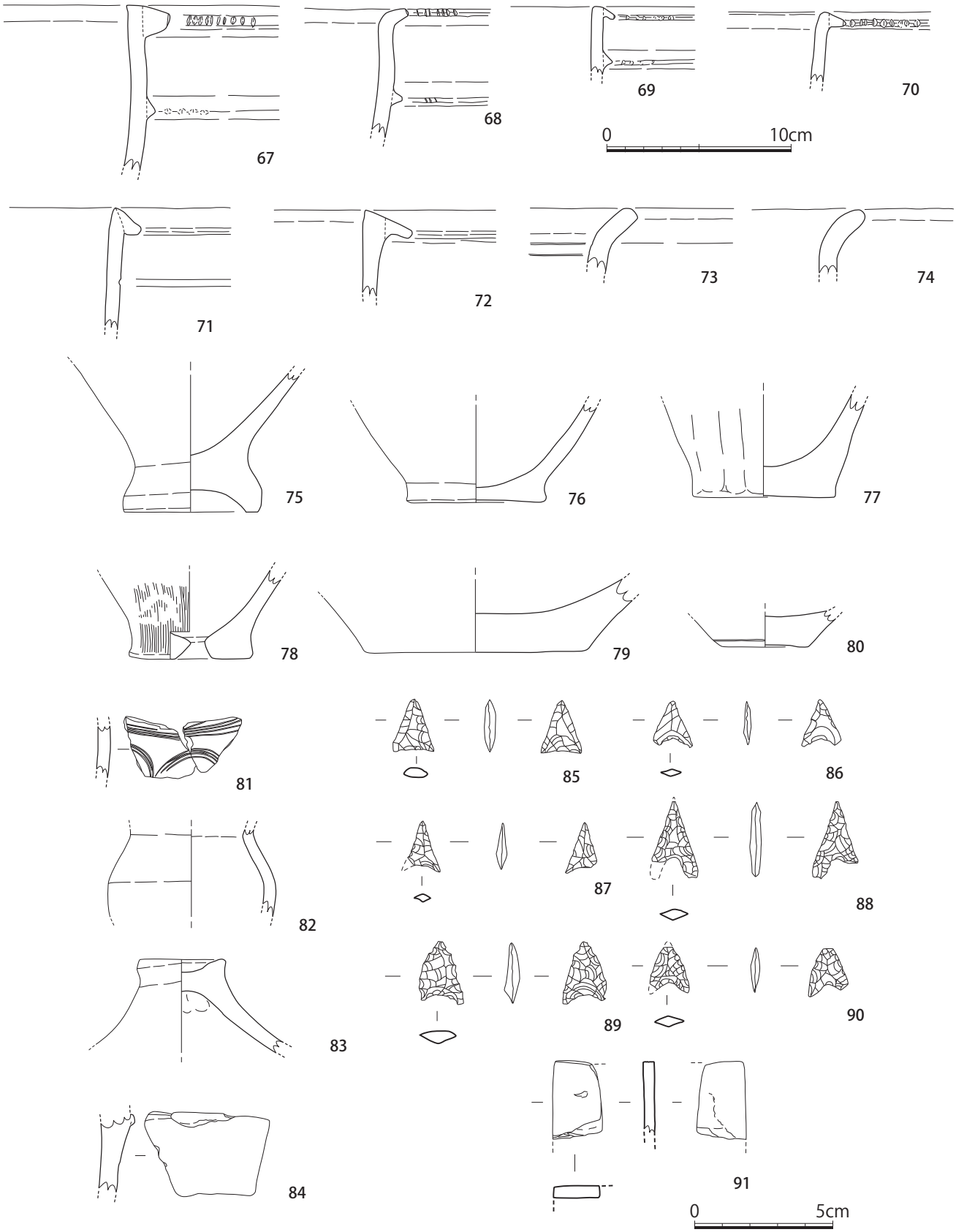


Fig.20　出土遺物実測（土器 1/3・石器 1/2）

6SK050

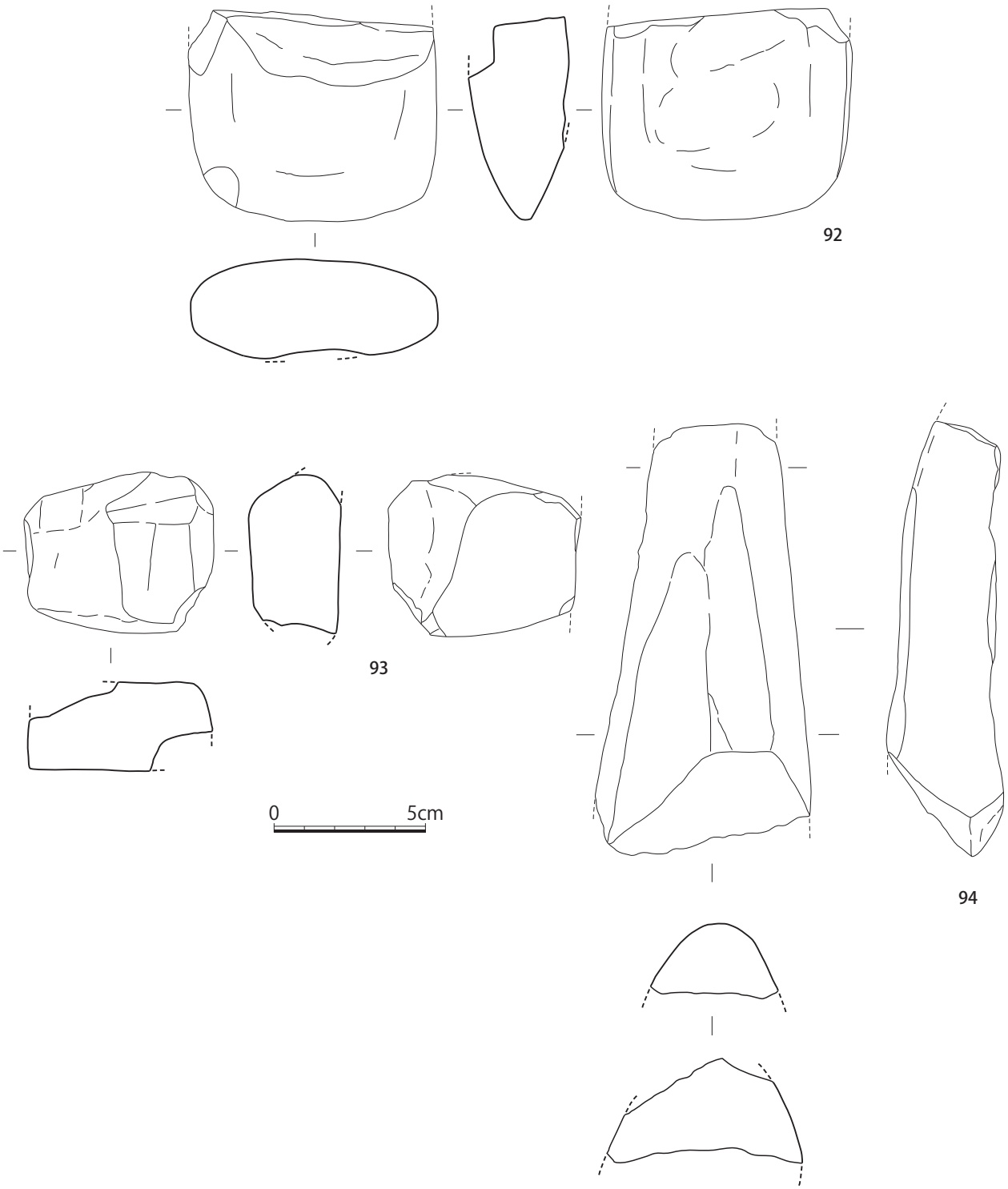


Fig.21　出土遺物実測（1/2）

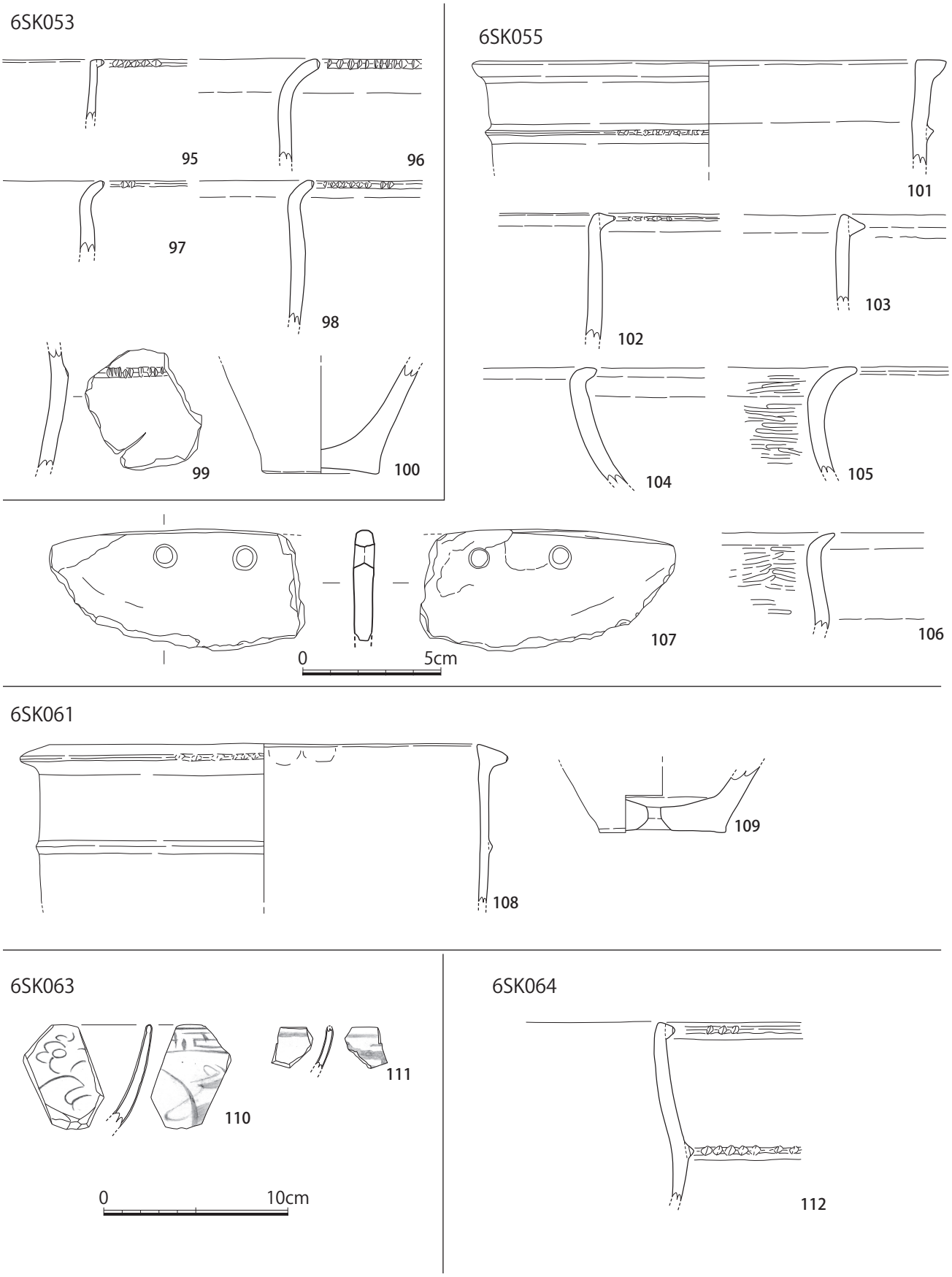
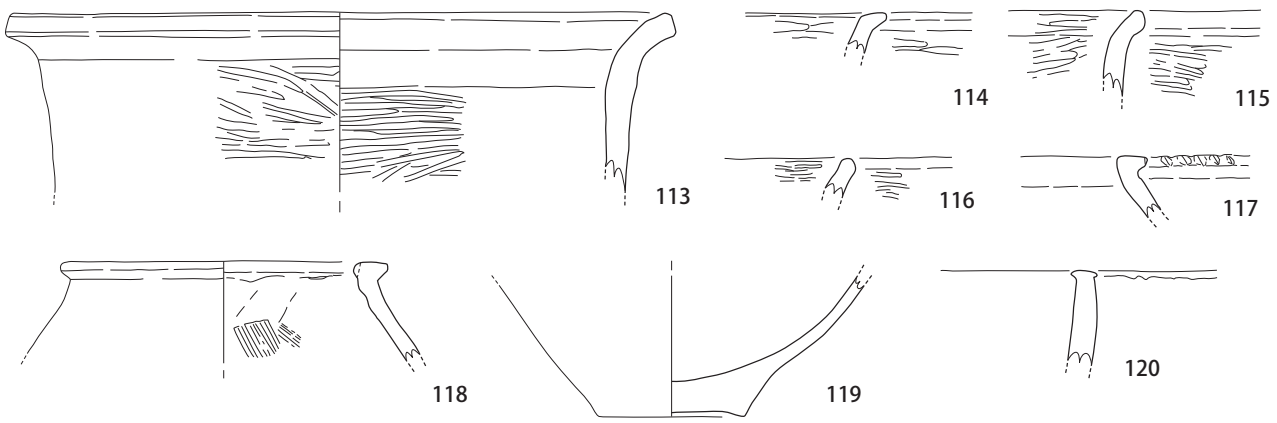


Fig.22　出土遺物実測（土器 1/3・石器 1/2）

6SK070



6SK071

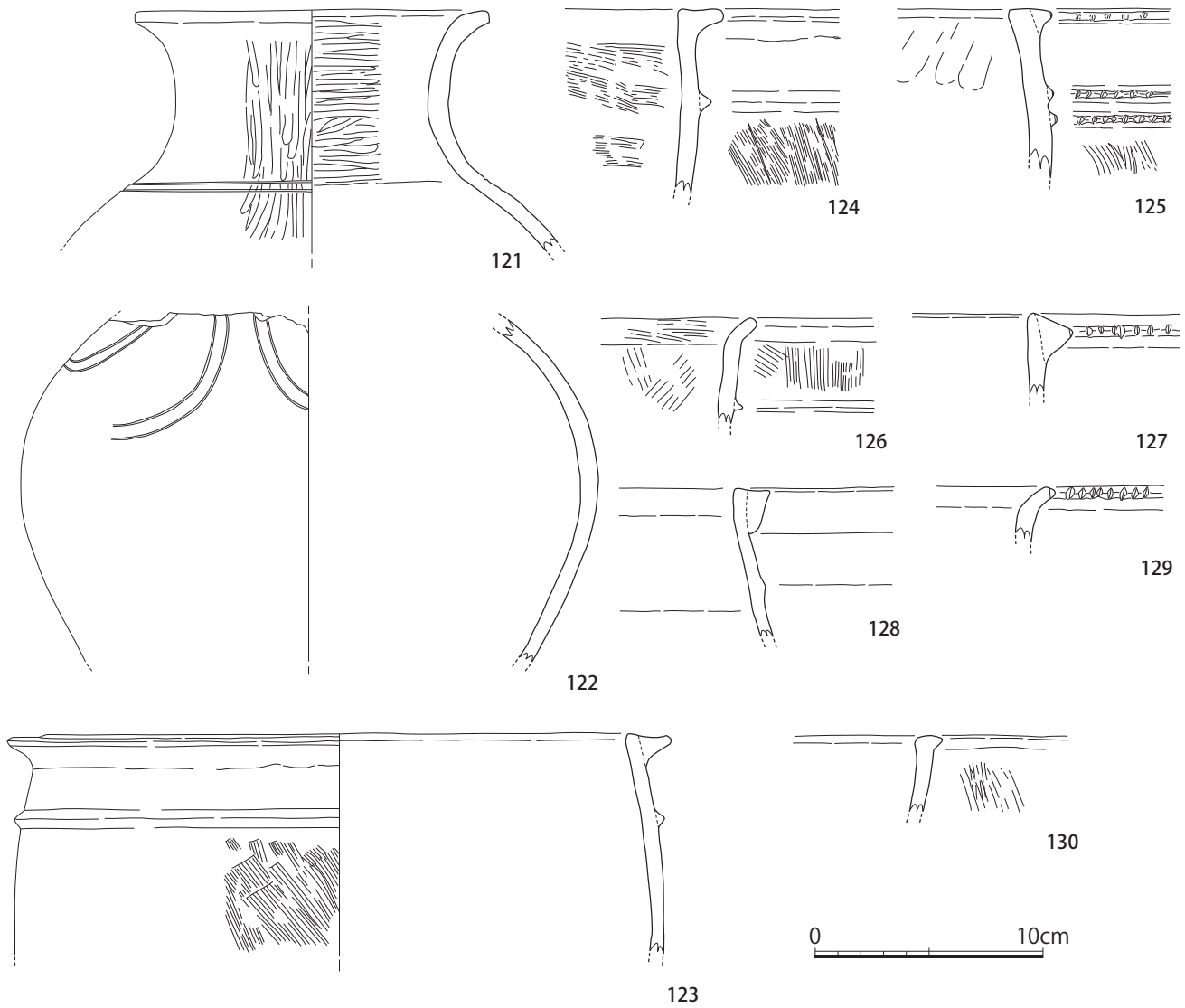


Fig.23　出土遺物実測（1/3）

6SK071

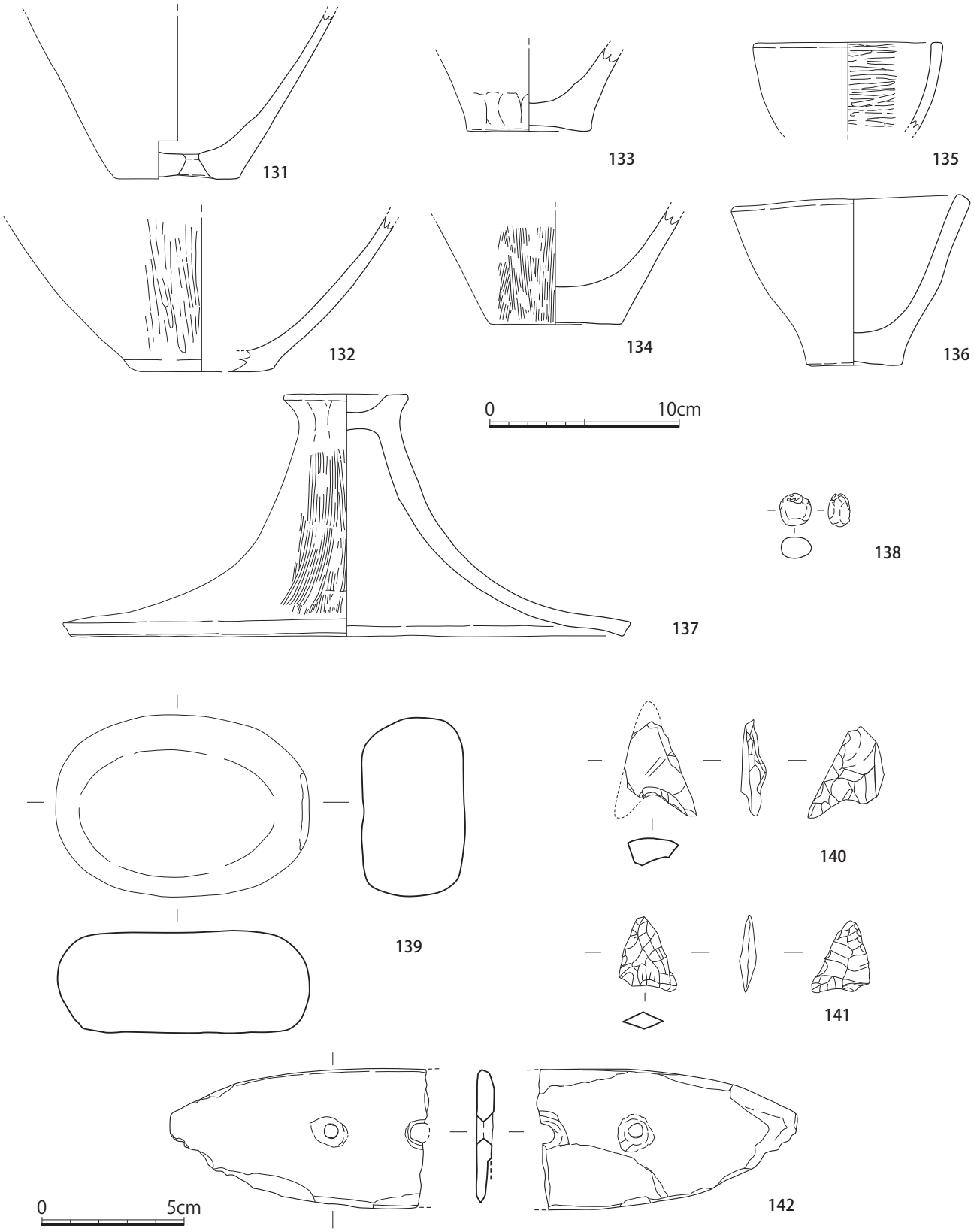


Fig.24　出土遺物実測（土器 1/3・土製品、石器 1/2）

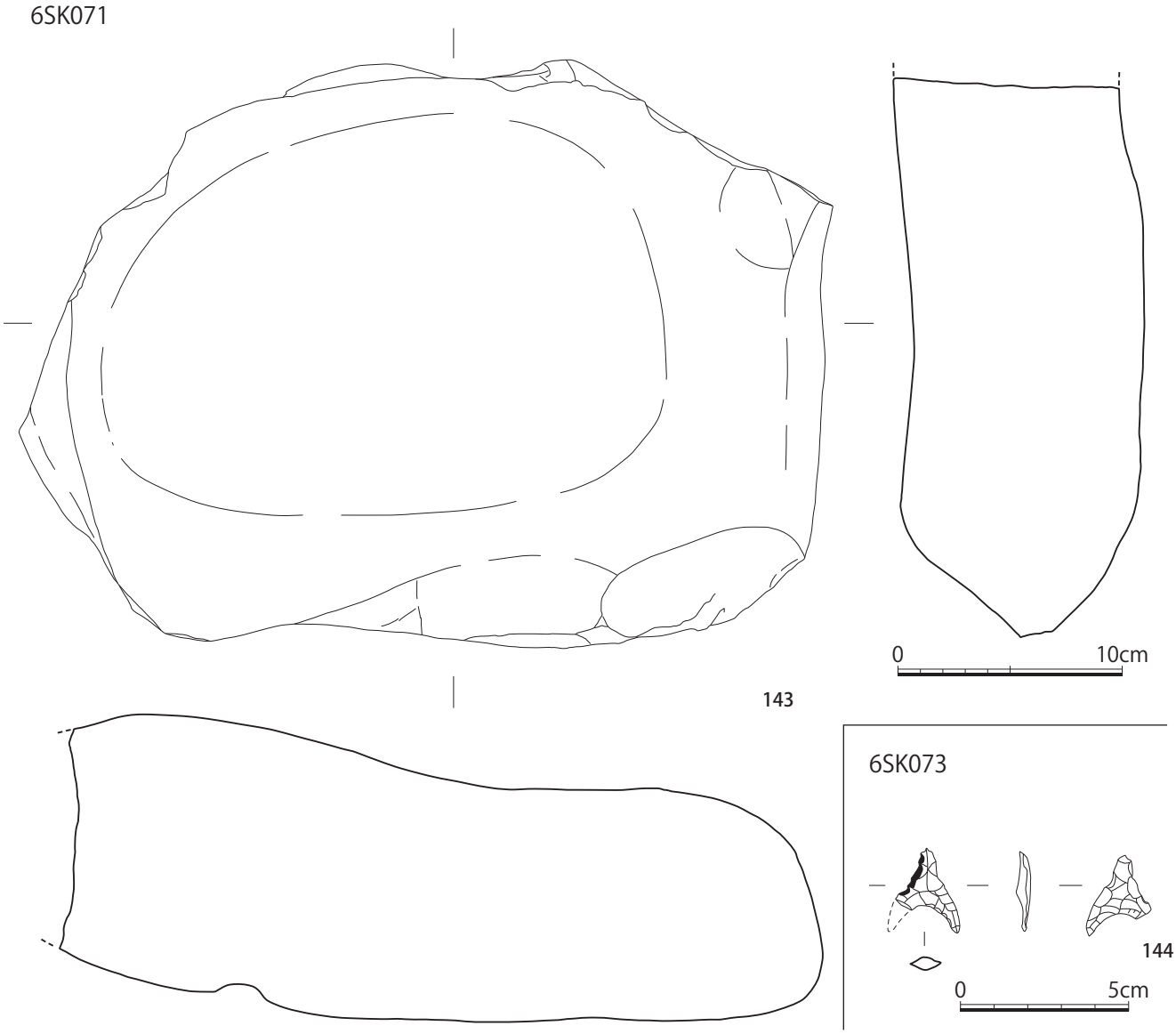
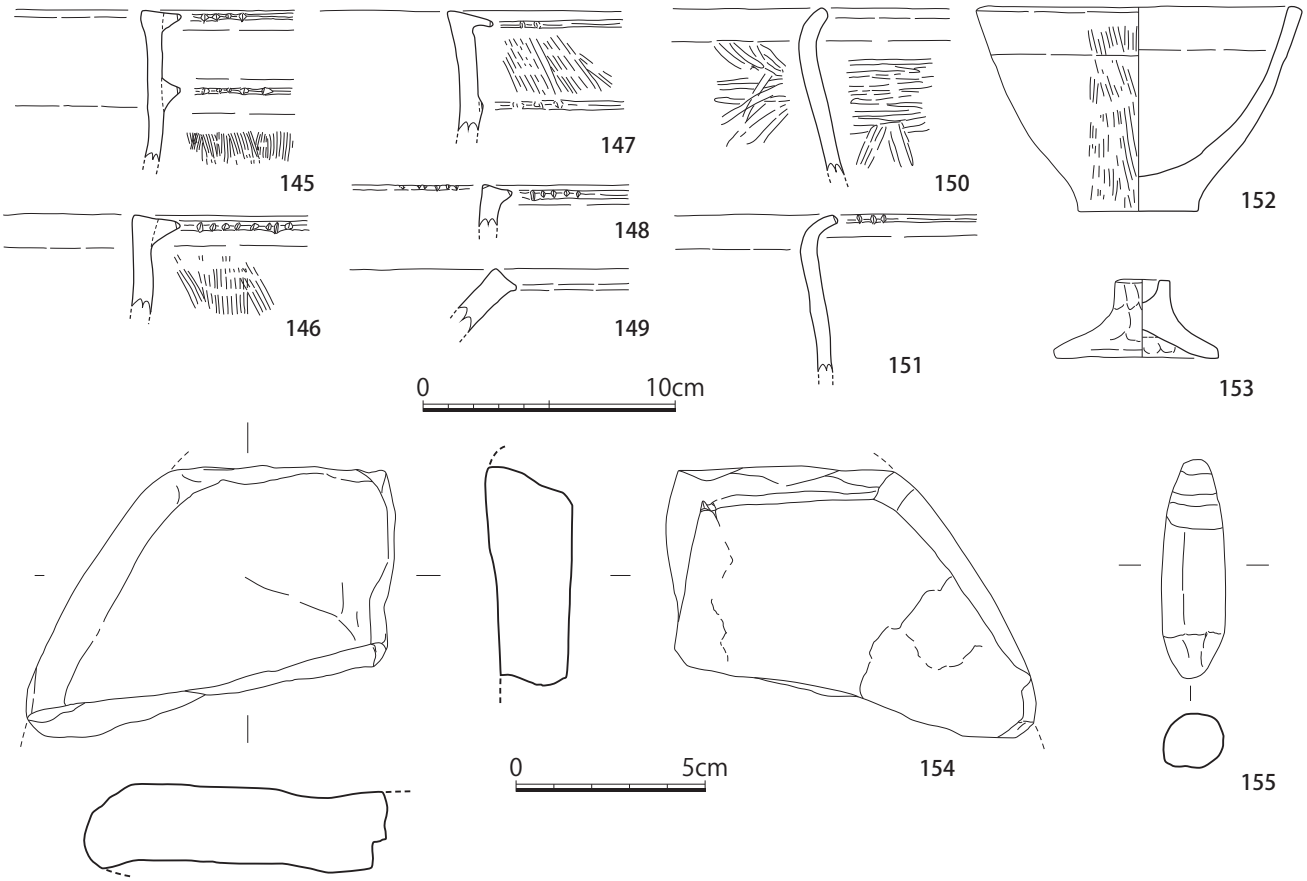


Fig.25　出土遺物実測（石皿 1/3・他の石器 1/2）

6SK075



6SK076

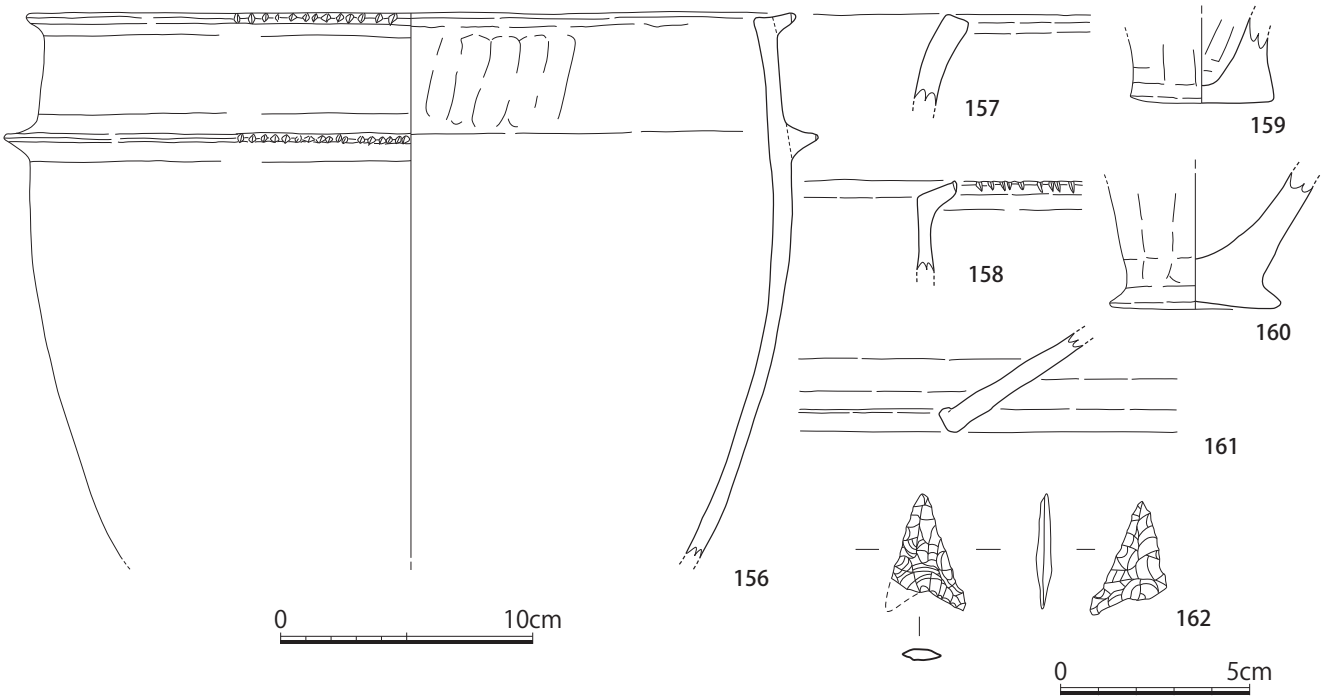
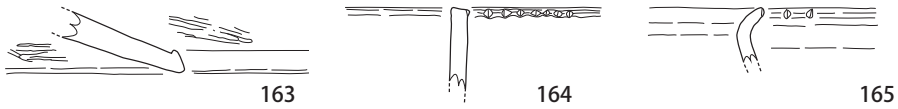
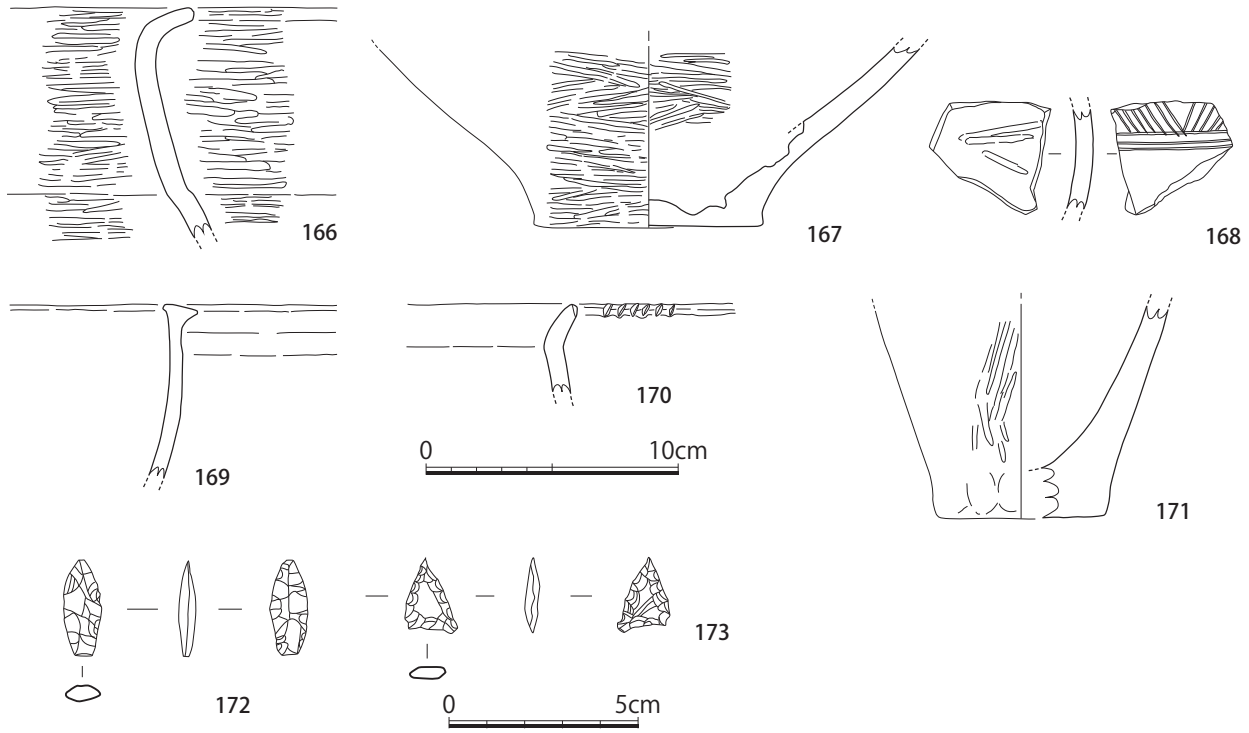


Fig.26　出土遺物実測（土器 1/3・土製品・石器 1/2）

6SK077



6SK080



6SK082

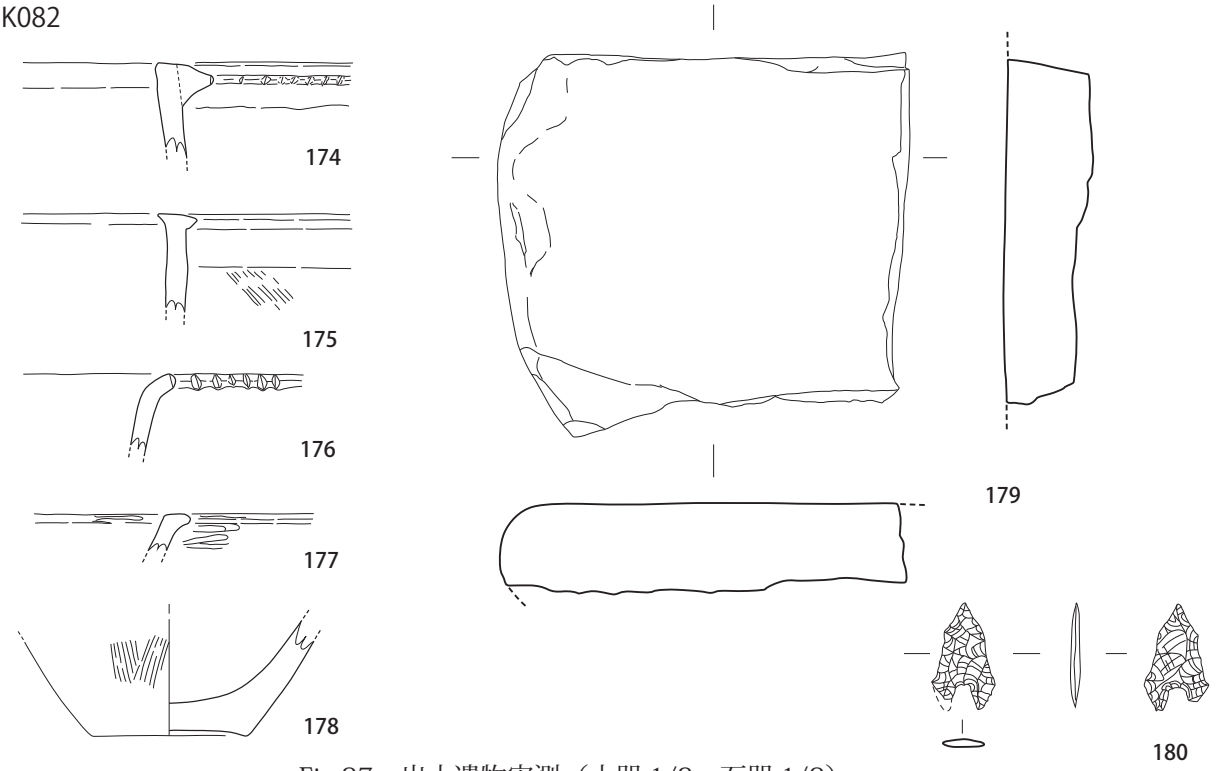


Fig.27　出土遺物実測（土器 1/3・石器 1/2）

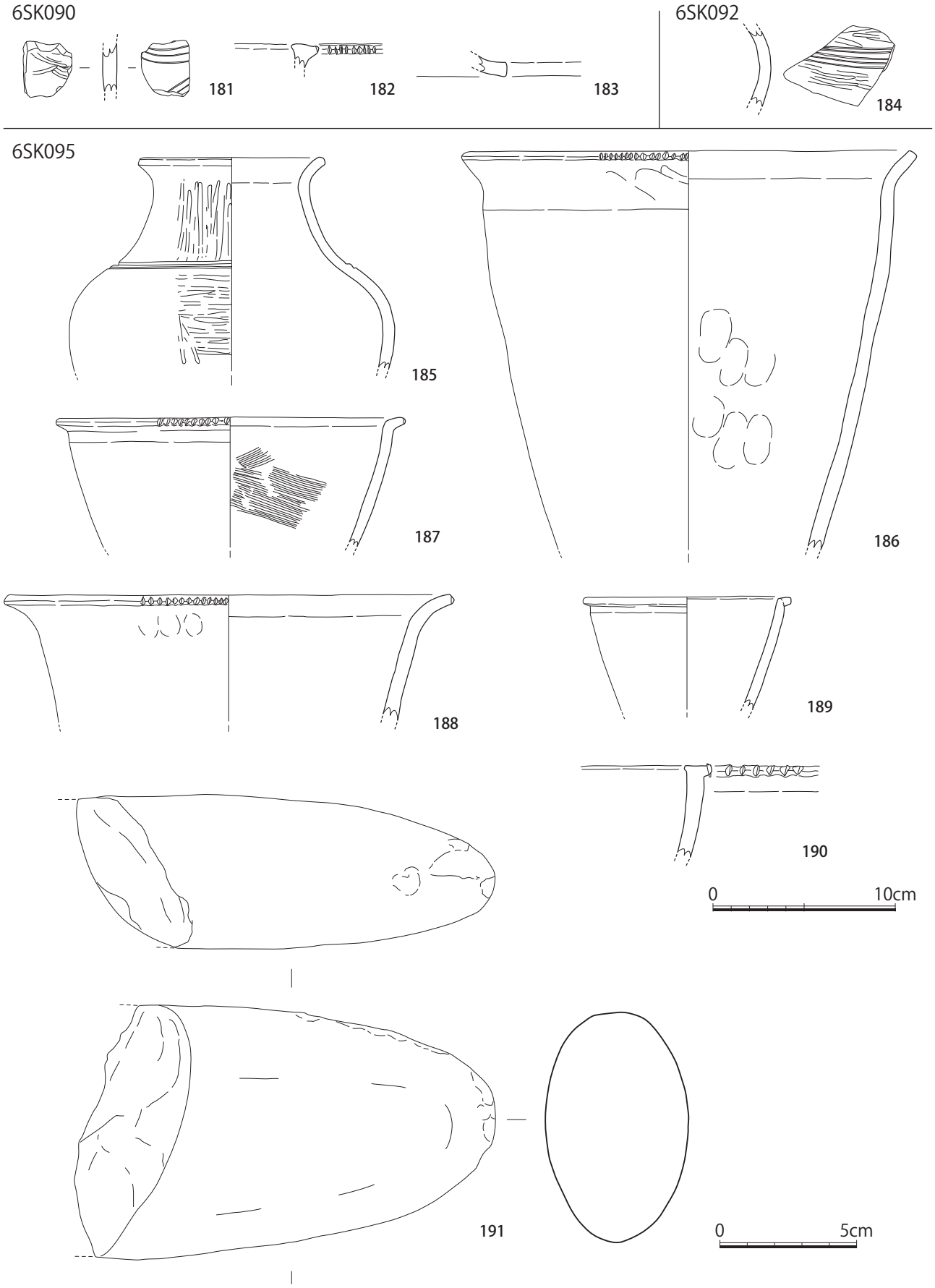
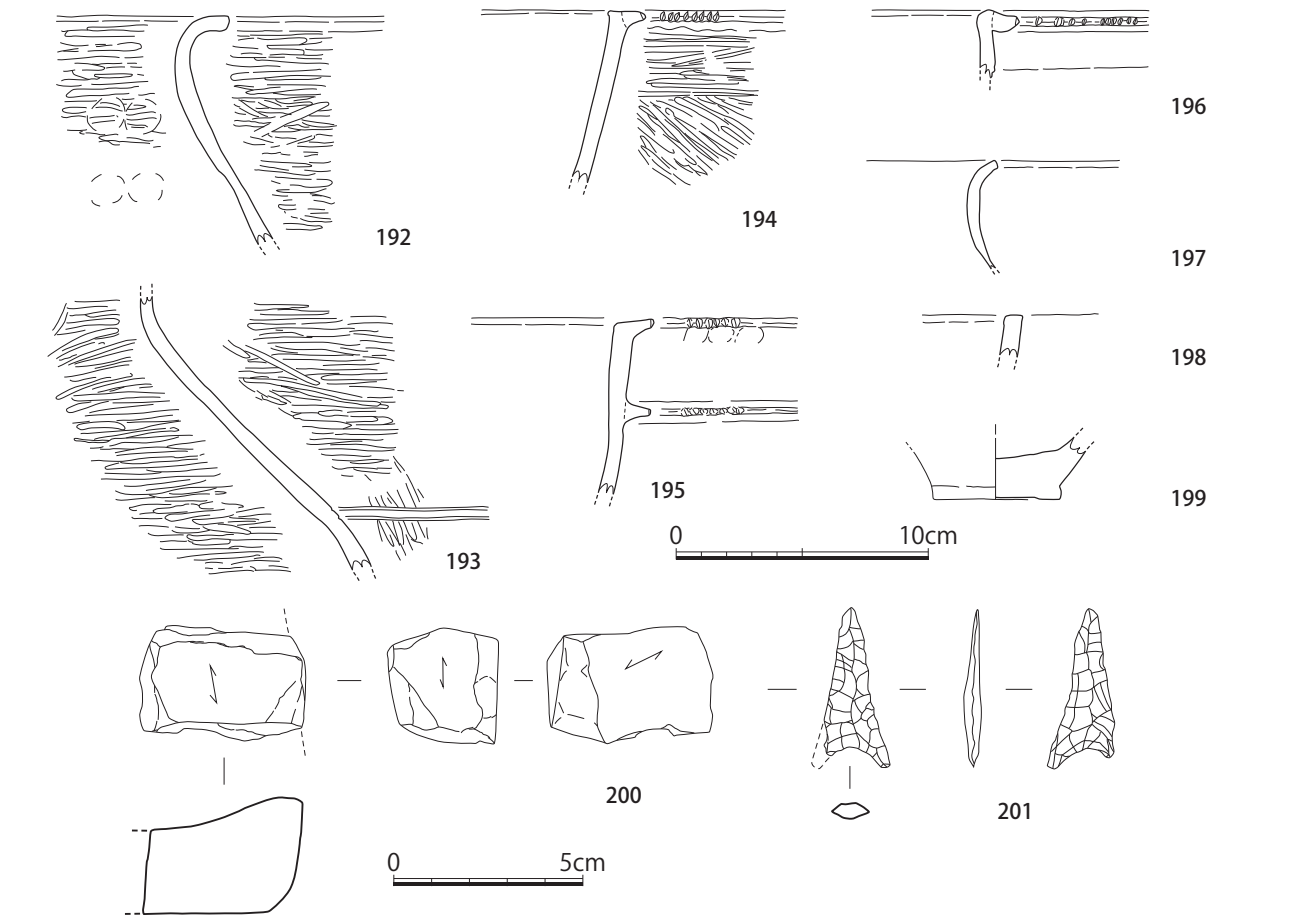


Fig.28　出土遺物実測（土器 1/3・石器 1/2）

6SK099



6SK100

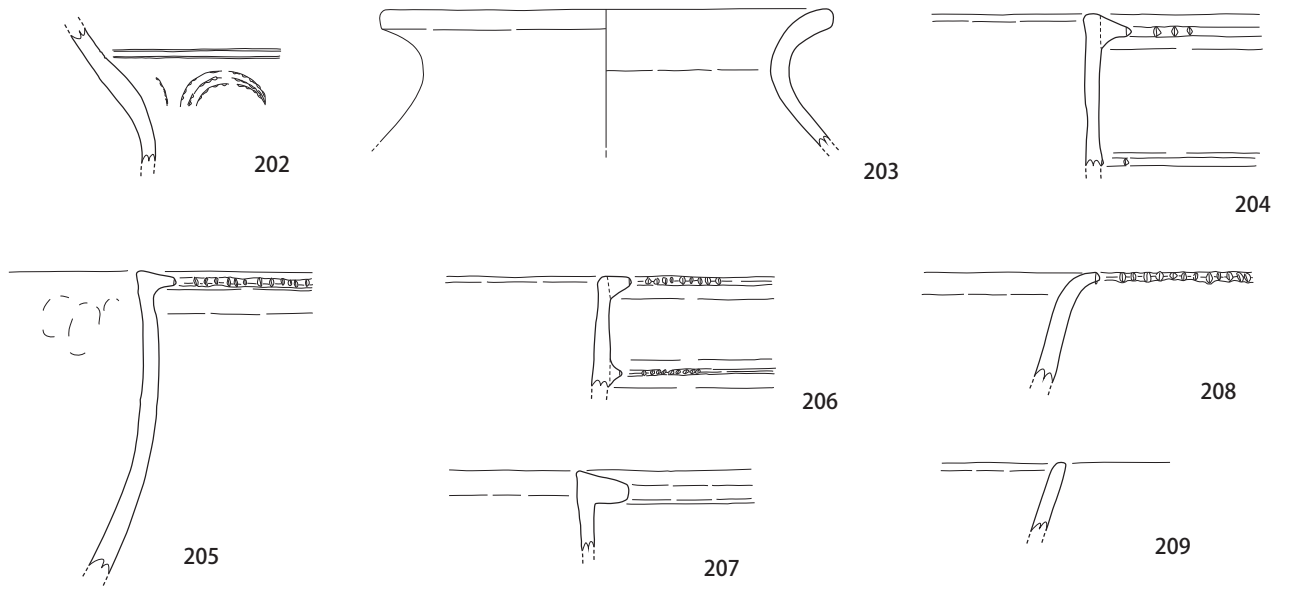
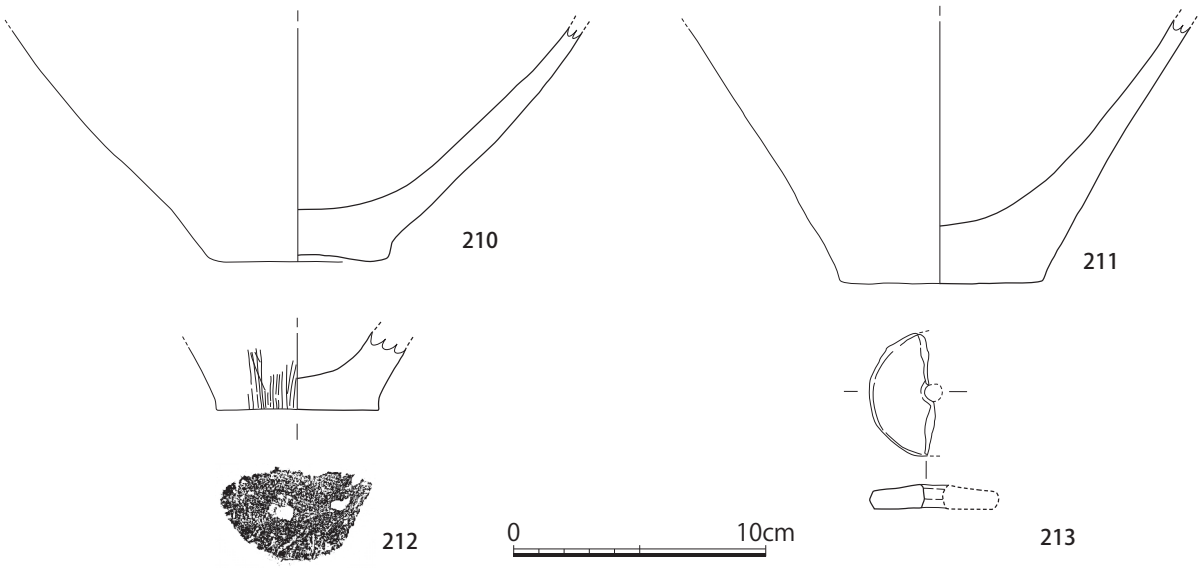


Fig.29　出土遺物実測（土器 1/3・石器 1/2）

6SK100



6SK102

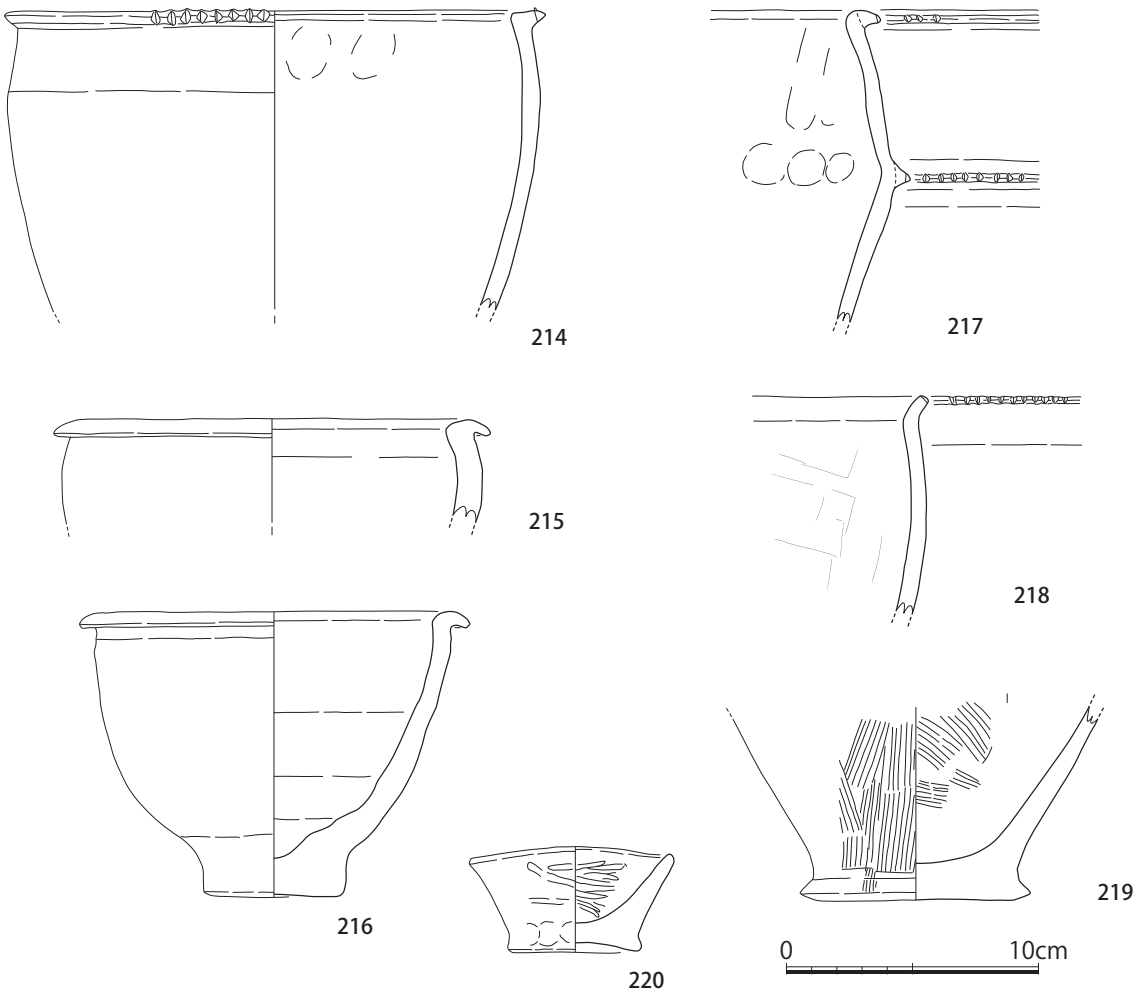


Fig.30　出土遺物実測（1/3）

6SK103

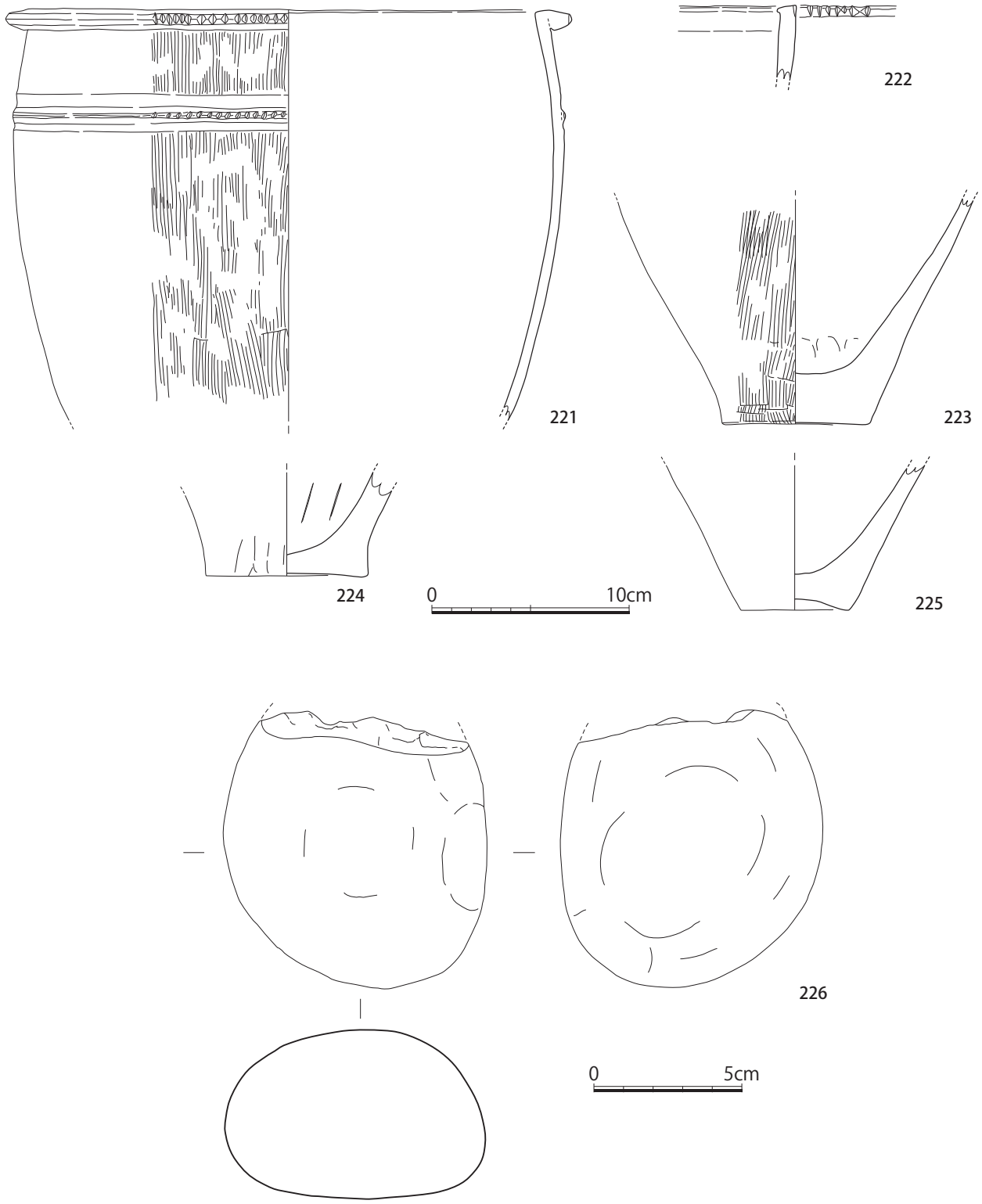


Fig.31　出土遺物実測（土器 1/3・石器 1/2）

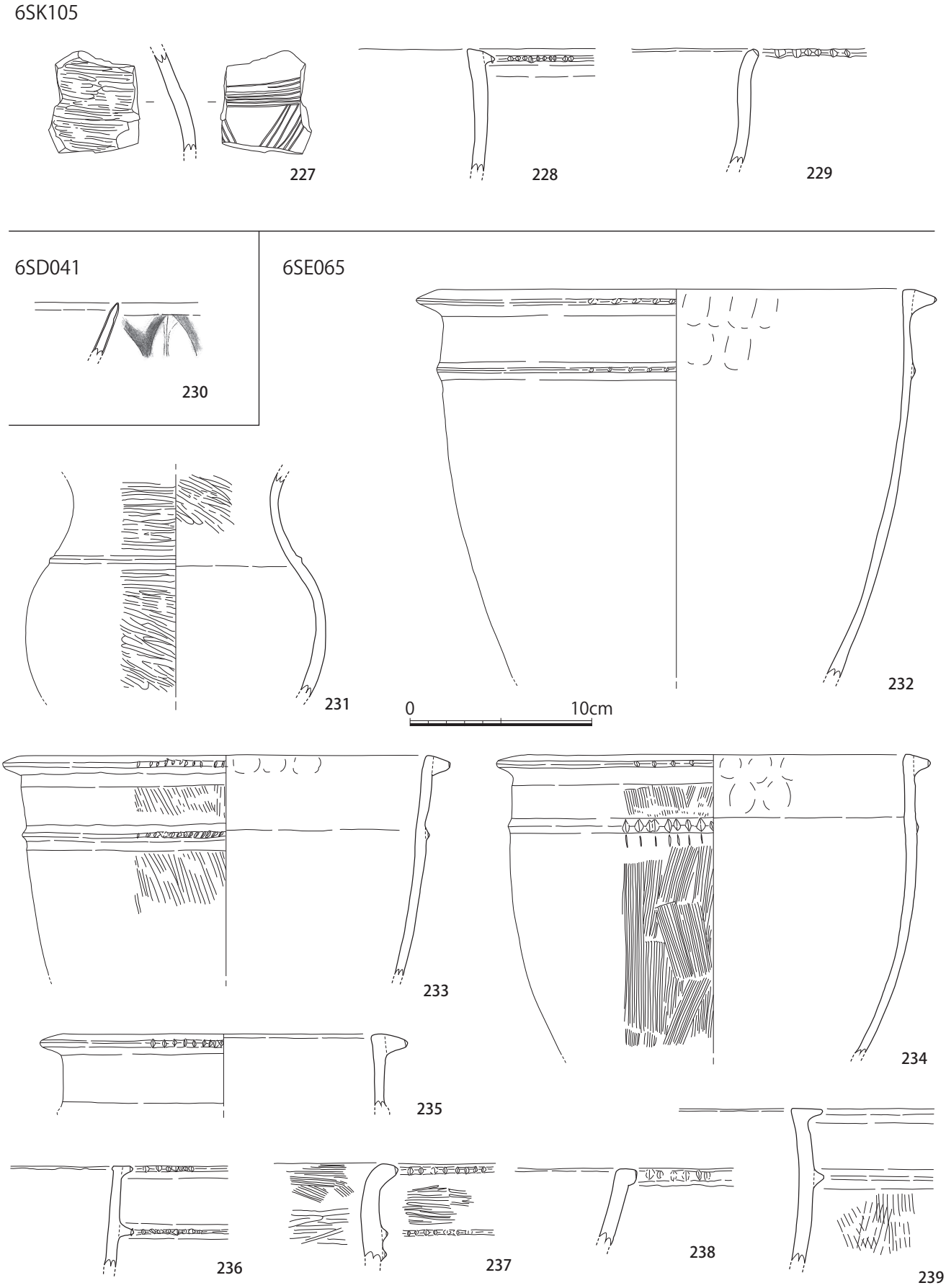


Fig.32　出土遺物実測（土器 1/3）

6SE065

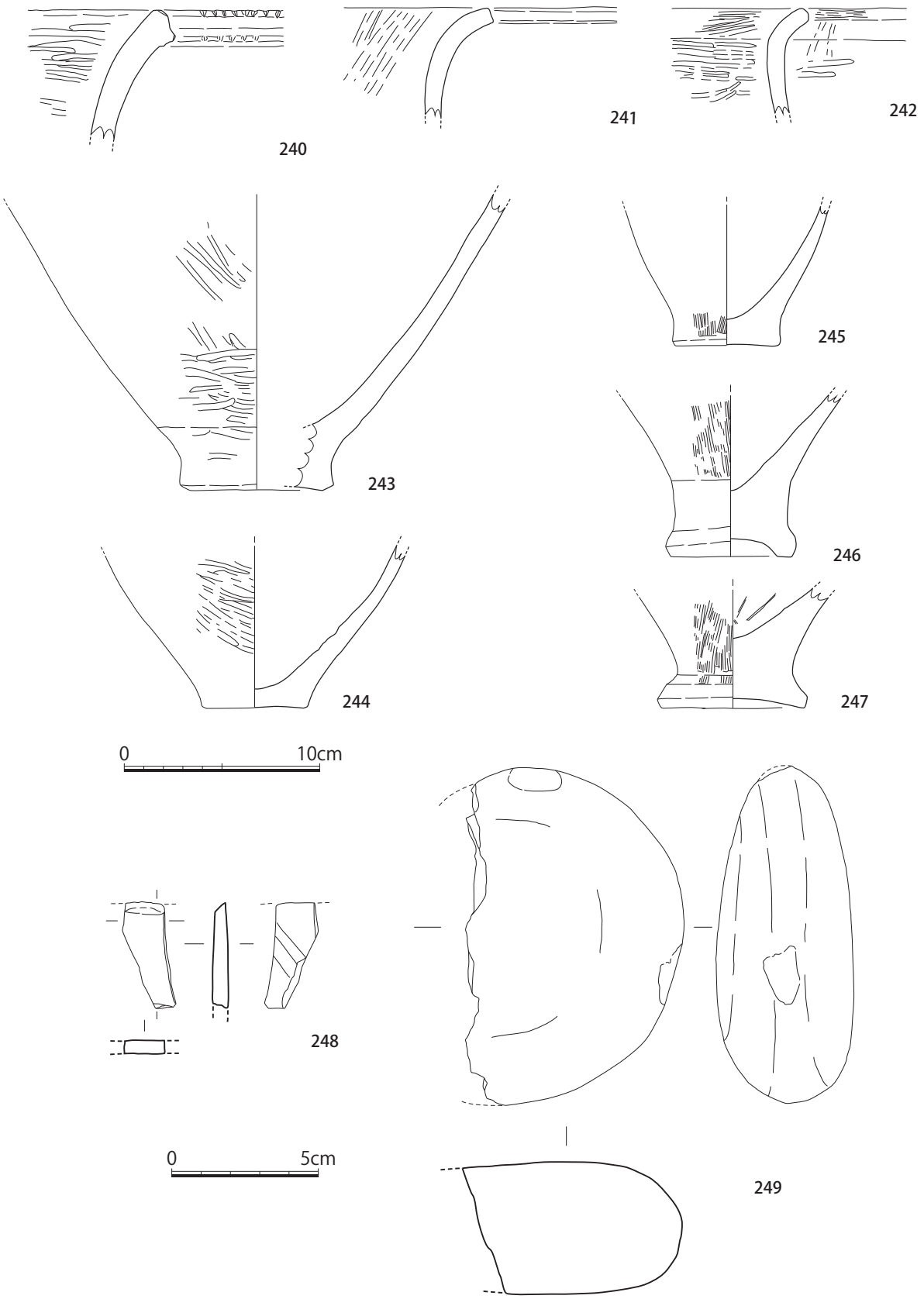


Fig.33　出土遺物実測（土器 1/3・石器 1/2）

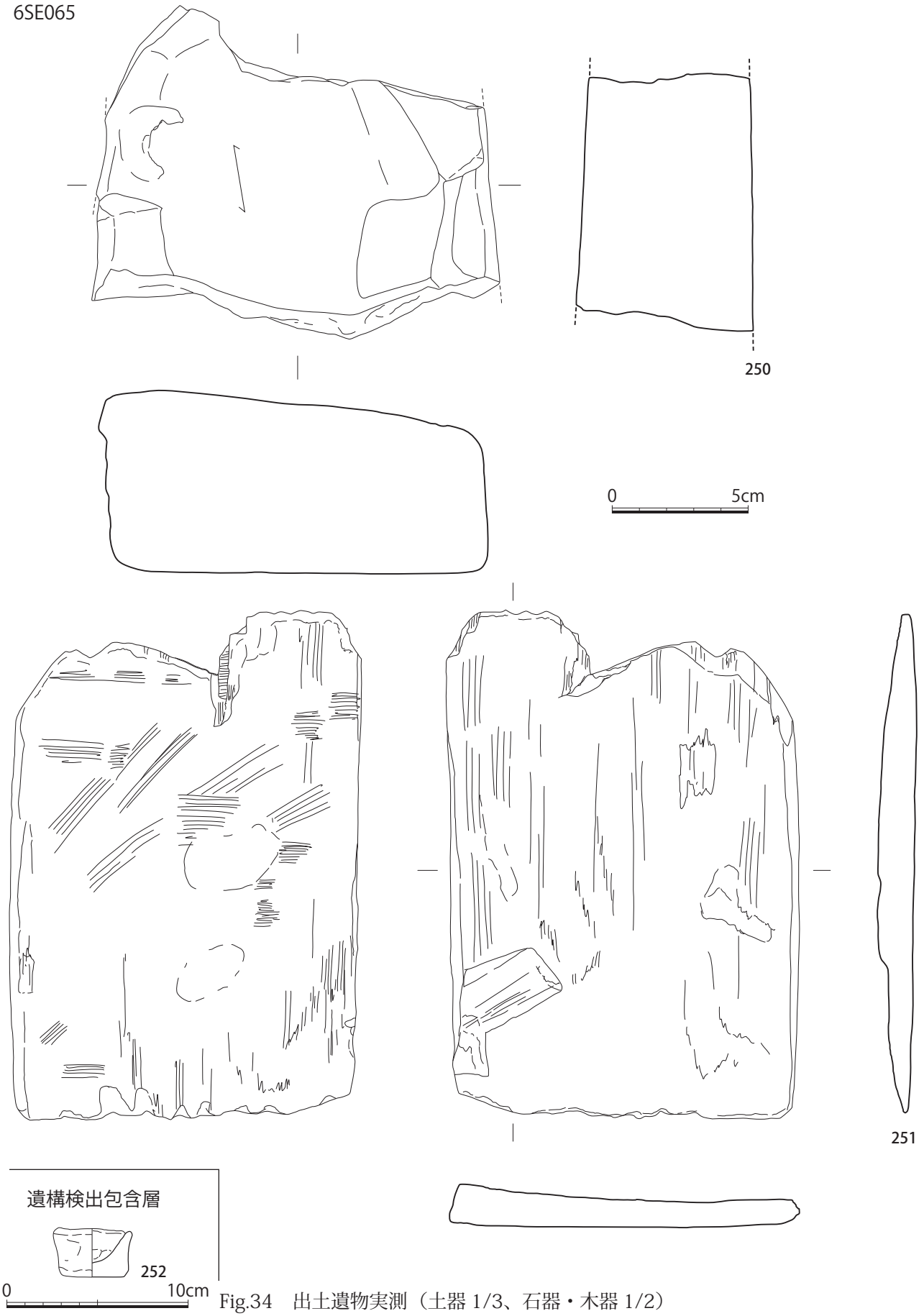


Fig.34　出土遺物実測（土器 1/3、石器・木器 1/2）

Tab.1　遺物観察表

遺構	S-番号	Fig.	番号	R番号	種類	器種	口径（長さ）	器高（幅）	底径（厚・径）	残存	備考
SK001	1	15	1	R-3	弥生土器	壺	(18.2)	9.7	—	口縁1/4	重量3g　サヌカイト
SK001	1	15	2	R-1	弥生土器	甕	—	10.0	7.4	底部のみ	
SK001	1	15	3	R-5	弥生土器	甕	—	9.1	—	口縁部片	
SK001	1	15	4	R-6	弥生土器	甕	—	8.2	(5.2)	底部1/2	
SK001	1	15	5	R-2	石器	磨製石斧	6.2	6.9	4.2	先端のみ	重量268g
SK001	1	15	6	R-4	石器	石鏃	4.0	1.9	0.7	完存	
SK005	5	15	7	R-1	弥生土器	甕	—	3.5	(7.4)	底部1/2	
SK005	5	15	8	R-2	弥生土器	甕	—	4.4	—	口縁部片	
SK010	10	15	9	R-2	弥生土器	甕	(26.6)	18.5	—	口縁1/4	
SK010	10	15	10	R-1	弥生土器	甕	—	10.5	7.6	底部完存	
SK010	10	15	11	R-3	土製品	土錘	4.1	2.5	2.5	完存	
SK010	10	15	12	R-4	石器	石鏃	2.2	1.9	0.4	一部欠損	重量1g　サヌカイト
SK015	15	16	13	R-6	弥生土器	甕	(34.2)	17.8	—	口縁～体部2/3	
SK015	15	16	14	R-1	弥生土器	甕	—	5.8	—	口縁部片	
SK015	15	16	15	R-3	弥生土器	甕	—	9.6	7.3	底部～体部	
SK015	15	16	16	R-4	弥生土器	壺	—	5.5	8.4	底部のみ	
SK015	15	16	17	R-2	弥生土器	甕	—	5.0	5.4	底部のみ	
SK015	15	16	18	R-5	弥生土器	蓋	(6.5)	1.4	—	2/3	
SK015	15	16	19	R-10	石器	石庖丁	17.4	7.2	0.8	完存	重量138g　結晶片岩
SK015	15	16	20	R-7	石器	石鏃	5.9	1.3	0.5	完存	重量5g　サヌカイト
SK015	15	16	21	R-8	石器	石鏃	2.3	2.1	0.4	ほぼ完存	重量1g　サヌカイト
SK015	15	16	22	R-9	石器	石鏃	2.9	1.8	0.3	一部欠損	重量1g　サヌカイト
SK20	20	16	23	R-6	弥生土器	甕	—	13.4	—	口縁～体部	
SK20	20	16	24	R-3	弥生土器	甕	—	3.0	(7.4)	底部1/2	
SK20	20	16	25	R-1	弥生土器	甕	—	8.7	—	口縁部片	
SK20	20	16	26	R-2	弥生土器	甕	—	5.4	—	口縁部片	
SK20	20	16	27	R-5	石器	石鏃	2.7	1.8	0.2	完存	重量1g　黒曜石
SK20	20	16	28	R-4	石器	石鏃	2.5	2.0	0.4	ほぼ完存	重量2g　サヌカイト
SK025	25	17	29	R-5	弥生土器	壺	—	16.8	—	体部1/3	30同一個体の可能性あり
SK025	25	17	30	R-6	弥生土器	壺	—	13.1	6.0	底部～体部1/2	29同一個体の可能性あり
SK025	25	17	31	R-12	弥生土器	甕	(29.0)	6.6	—	口縁1/8	
SK025	25	17	32	R-8	弥生土器	甕	(23.1)	13.6	—	口縁2/3	
SK025	25	17	33	R-1	弥生土器	甕	—	3.0	—	口縁部片	
SK025	25	17	34	R-2	弥生土器	甕	—	4.5	—	口縁部片	
SK025	25	17	35	R-14	弥生土器	甕	—	4.7	—	口縁破片	
SK025	25	17	36	R-13	弥生土器	壺	—	7.1	—	口縁破片	
SK025	25	17	37	R-3	弥生土器	甕	—	4.4	(5.8)	底部1/2	
SK025	25	17	38	R-7	弥生土器	甑	—	4.7	7.0	底部のみ	
SK025	25	17	39	R-4	弥生土器	甕	—	2.3	(6.0)	底部1/3	
SK025	25	17	40	R-11	弥生土器	器台	(6.5)	11.3	(7.0)	1/2	
SK025	25	17	41	R-16	弥生土器	不明	5.1	4.1	1.0	破片	
SK025	25	17	42	R-17	土製品	土玉	2.2	2.1	1.4	完存	重量6g
SK025	25	17	43	R-9	土製品	紡錘車	4.0	2.7	1.0	1/2	重量11g
SK025	25	18	44	R-10	石器	石庖丁	6.0	3.6	0.6	1/2	重量15g　結晶片岩
SK025	25	18	45	R-15	石製品	不明	5.6	4.9	3.7		
SK025	25	18	46	R-22	石器	石カンナ	4.4	0.9	0.4		重量2g　サヌカイト
SK025	25	18	47	R-18	石器	石鏃	3.7	2.6	0.8	完存	重量5g　サヌカイト
SK025	25	18	48	R-21	石器	石鏃	1.9	1.5	0.4	一部欠損	重量1g　サヌカイト
SK025	25	18	49	R-19	石器	石鏃	2.3	1.8	0.4	ほぼ完形	重量1g　サヌカイト
SK025	25	18	50	R-20	石器	石鏃	2.6	1.2	0.6	完存	重量2g　サヌカイト
SK025	25	18	51	R-23	石製品	すり石	13.0	10.6	8.5	1/2	安山岩
SK030	30	19	52	R-1	弥生土器	甕	—	5.4	—	口縁破片	
SK037	37	19	55	R-1	弥生土器	甕	—	7.1	8.2	底部のみ	
SK030	30	19	53	R-2	弥生土器	甕	—	5.4	—	口縁破片	
SK030	30	19	54	R-3	弥生土器	甕	—	4.6	7.2	底部のみ	
SK037	37	19	56	R-2	弥生土器	甕	—	13.3	—	口縁～体部片	
SK045	45	19	57	R-1	弥生土器	甕	—	3.4	—	口縁破片	
SK045	45	19	58	R-2	弥生土器	甕	—	4.2	—	口縁破片	
SK045	45	19	59	R-5	不明	不明	—	1.7	—	口縁破片	
SK045	45	19	60	R-4	弥生土器	壺	—	5.1	8.2	底部のみ	
SK045	45	19	61	R-3	弥生土器	甕	—	2.5	(4.6)	底部1/2	
SK045	45　Ⅰ層黒色土	19	62	R-6	弥生土器	ミニチュア土器	—	2.9	—		

Tab.1　遺物観察表

遺構	S-番号	Fig.	番号	R番号	種類	器種	口径(長さ)	器高(幅)	底径(厚・径)	残存	備考
SK049	49	19	63	R-1	弥生土器	甕	—	3.0	—	口縁破片	
SK049	49	19	64	R-2	弥生土器	壺	—	2.4	—	口縁破片	
SK049	49	19	65	R-3	弥生土器	壺	—	2.4	—	口縁破片	
SK049	49	19	66	R-4	石製品	不明	4.0	1.3	1.2	完存	重量13g　凝灰岩か？
SK050	50	20	67	R-7	弥生土器	甕	—	9.0	—	口縁破片	
SK050	50	20	68	R-13	弥生土器	甕	—	7.0	—	口縁～体部片	
SK050	50	20	69	R-18	弥生土器	甕	—	3.7	—	口縁部片	
SK050	50	20	70	R-16	弥生土器	甕	—	3.8	—	口縁部片	
SK050	50	20	71	R-9	弥生土器	甕	—	6.7	—	口縁破片	
SK050	50	20	72	R-10	弥生土器	甕	—	4.7	—	口縁破片	
SK050	50	20	73	R-11	弥生土器	甕	—	3.6	—	口縁破片	
SK050	50	20	74	R-15	弥生土器	甕	—	3.5	—	口縁部片	
SK050	50	20	75	R-1	弥生土器	甕	—	7.4	7.2	底部のみ	
SK050	50	20	76	R-2	弥生土器	壺	—	5.3	7.5	底部のみ	
SK050	50	20	77	R-3	弥生土器	甕	—	5.6	7.7	底部のみ	
SK050	50	20	78	R-4	弥生土器	甕	—	4.8	6.7	底部のみ	
SK050	50	20	79	R-6	弥生土器	甕	—	4.0	12.1	底部のみ	
SK050	50	20	80	R-5	弥生土器	壺	—	1.7	4.8	底部のみ	
SK050	50	20	81	R-17	弥生土器	壺	—	2.8	—	破片	
SK050	50	20	82	R-12	弥生土器	壺	—	4.8	—	体部1/3	
SK050	50	20	83	R-8	弥生土器	蓋	—	5.1	4.5	底部のみ	
SK050	50	20	84	R-14	弥生土器	不明	—	4.3	—	体部片	
SK050	50	20	85	R-19	石器	石鏃	1.9	1.5	0.4	完存	サヌカイト
SK050	50	20	86	R-20	石器	石鏃	1.6	1.5	0.25	一部欠損	サヌカイト
SK050	50	20	87	R-23	石器	石鏃	1.9	1.2	0.3	一部欠損	サヌカイト
SK050	50	20	88	R-24	石器	石鏃	2.8	1.7	0.4	一部欠損	黒曜石
SK050	50	20	89	R-21	石器	石鏃	2.3	1.65	0.45	完存	黒曜石
SK050	50	20	90	R-22	石器	石鏃	1.7	1.5	0.4	一部欠損	黒曜石
SK050	50	20	91	R-25	石製品	扁平片刀	2.7	1.8	0.5		凝灰岩？　4ｇ
SK050	50	21	92	R-27	石器	磨製石斧	7.0	8.3	3.3	先端部のみ	安山岩　303ｇ
SK050	50	21	93	R-26	石製品	砥石	6.3	5.3	3.0	2/3	砂岩　124ｇ
SK050	50	21	94	R-28	石器	磨製石斧	14.3	7.1	3.9	2/5	安山岩　374ｇ
SK053	53	22	95	R-1	弥生土器	甕	—	3.3	—	口縁部片	
SK053	53	22	96	R-4	弥生土器	甕	—	5.5	—	口縁破片	
SK053	53	22	97	R-2	弥生土器	甕	—	3.9	—	口縁部片	
SK053	53	22	98	R-5	弥生土器	甕	—	7.8	—	口縁～体部片	
SK053	53	22	99	R-3	弥生土器	甕	—	6.3	—	破片	
SK053	53	22	100	R-6	弥生土器	甕	—	5.9	6.4	底部のみ	
SK055	55	22	101	R-4	弥生土器	甕	(25.8)	5.7	—	口縁1/8	
SK055	55	22	102	R-3	弥生土器	甕	—	6.9	—	口縁部片	
SK055	55	22	103	R-6	弥生土器	甕	—	4.7	—	口縁部片	
SK055	55	22	104	R-1	弥生土器	壺	—	6.3	—	口縁～口頸部片	
SK055	55	22	105	R-2	弥生土器	壺	—	5.7	—	口縁～口頸部片	
SK055	55	22	106	R-7	石器	石庖丁	9.3	4.4	0.8	2/3	重量47g　結晶片岩
SK055	55	22	107	R-5	弥生土器	壺	—	5.3	—	口縁～体部片	
SK061	61	22	108	R-1	弥生土器	甕	(26.4)	8.6	—	口縁1/8	
SK061	61	22	109	R-2	弥生土器	甕	—	3.6	6.8	底部のみ	
SK063	63	22	110	R-1	龍泉窯系青磁	碗	—	5.6	—	口縁部片	
SK063	63	22	111	R-2	磁器	染付碗	—	2.3	—	破片	
SP064	64	22	112	R-1	弥生土器	壺	—	9.7	—	口縁～体部片	
SK070	70	23	113	R-4	弥生土器	甕	(26.0)	7.2	—	口縁1/6	
SK070	70	23	114	R-7	弥生土器	鉢	—	1.6	—	口縁部片	
SK070	70	23	115	R-8	弥生土器	壺	—	3.4	—	口縁部片	
SK070	70	23	116	R-6	弥生土器	甕	—	1.6	—	口縁部片	
SK070	70	23	117	R-5	弥生土器	甕	—	2.5	—	口縁部片	
SK070	70	23	118	R-2	弥生土器	壺	(13.0)	4.0	—	口縁1/4	
SK070	70	23	119	R-1	弥生土器	壺	—	5.6	5.8	底部3/4	
SK070	70	23	120	R-3	弥生土器	甕	—	3.8	—	口縁部片	
SK071	71	23	121	R-4	弥生土器	壺	(15.5)	10.6	—	口縁2/3	
SK071	71	23	122	R-2	弥生土器	壺	—	15.0	—	体部1/3	24同一個体
SK071	71	23	123	R-10	弥生土器	甕	(29.2)	9.7	—	口縁1/4	
SK071	71	23	124	R-12	弥生土器	甕	—	8.1	—	口縁部片	

Tab.1　遺物観察表

遺構	S-番号	Fig.	番号	R番号	種類	器種	口径 (長さ)	器高 (幅)	底径 (厚・径)	残存	備考
SK071	71	23	125	R-11	弥生土器	甕	—	7.4	—	口縁部片	
SK071	71	23	126	R-14	弥生土器	甕	—	4.6	—	口縁部片	
SK071	71	23	127	R-16	弥生土器	甕	—	3.5	—	口縁部片	
SK071	71	23	128	R-13	弥生土器	甕	—	6.5	—	口縁部片	
SK071	71	23	129	R-18	弥生土器	甕	—	2.5	—	口縁部片	
SK071	71	23	130	R-15	弥生土器	甕	—	3.3	—	口縁部片	
SK071	71	24	131	R-8	弥生土器	甕	—	8.6	6.6	底部のみ	
SK071	71	24	132	R-3	弥生土器	壺	—	8.2	(7.6)	底部2/3	23同一個体
SK071	71	24	133	R-7	弥生土器	甕	—	4.4	6.6	底部のみ	
SK071	71	24	134	R-6	弥生土器	壺	—	6.0	7.0	底部のみ	
SK071	71	24	135	R-17	弥生土器	鉢	(10.0)	4.7	—	口縁部片	
SK071	71	24	136	R-5	弥生土器	鉢	12.6	8.1～9.0	5.1	一部欠損	
SK071	71	24	137	R-9	弥生土器	蓋	(29.1)	12.8	6.5	3/4	
SK071	71	24	138	R-23	土製品	土玉	1.7	1.7	1.1	一部欠損	重量3g
SK071	71	24	139	R-19	石製品	すり石か砥石	9.0	6.4	3.6	一部欠損	重量372g　安山岩
SK071	71	24	140	R-21	石器	石鏃	3.5	2.5	0.9	2/3	重量5g
SK071	71	24	141	R-22	石器	石鏃	2.8	2.0	0.6	4/5	重量2g
SK071	71	24	142	R-20	石製品	石庖丁	9.2	5.0	0.6	2/3	重量39g
SK071	71	25	143	R-1	石製品	石皿	35.5	25.7	10.0	不明	砂岩
SK073	73	25	144	R-1	石器	石鏃	2.4	1.9	0.4	4/5	重量1g サヌカイト
SK075	75	26	145	R-2	弥生土器	甕	—	6.0	—	口縁部片	
SK075	75	26	146	R-5	弥生土器	甕	—	3.8	—	口縁部片	
SK075	75	26	147	R-6	弥生土器	甕	—	4.8	—	口縁部片	
SK075	75	26	148	R-7	弥生土器	甕	—	1.7	—	口縁部片	
SK075	75	26	149	R-8	弥生土器	甕	—	2.5	—	口縁部片	
SK075	75	26	150	R-3	弥生土器	甕	—	6.6	—	口縁部片	
SK075	75	26	151	R-4	弥生土器	甕	—	6.3	—	口縁部片	
SK075	75	26	152	R-1	弥生土器	鉢	(12.9)	8.1	4.8	2/3	
SK075	75	26	153	R-9	土師器	ミニュチュア蓋	6.4	3.2	2.2	2/3	
SK075	75	26	154	R-10	石製品	砥石	9.7	7.1	2.3		重量239g　安山岩
SK075	75	26	155	R-11	石製品	石錘	5.8	1.7	1.4	完存品	重量23g
SK076	76	26	156	R-1	弥生土器	甕	(30.6)	21.6	—	口縁2/3	
SK076	76	26	157	R-6	弥生土器	甕	—	3.6	—	口縁部片	
SK076	76	26	158	R-5	弥生土器	甕	—	3.7	—	口縁部片	
SK076	76	26	159	R-3	弥生土器	壺	—	3.4	5.8	底部3/4	
SK076	76	26	160	R-4	弥生土器	甕	—	5.4	6.8	底部3/5	
SK076	76	26	161	R-2	弥生土器	蓋	—	4.0	—	口縁部片	
SK076	76	26	162	R-7	石器	石鏃	3.1	2.0	0.3	一部欠損	重量1g　黒曜石
SK077	77	27	163	R-1	弥生土器	蓋	—	2.5	—	口縁部片	
SK077	77	27	164	R-2	弥生土器	鉢	—	3.3	—	口縁部片	
SK077	77	27	165	R-3	弥生土器	甕	—	2.2	—	口縁部片	
SK080	80	27	166	R-1	弥生土器	壺	—	9.2	—	口縁～口頸1/3	
SK080	80	27	167	R-6	弥生土器	壺	—	7.2	(9.1)	底部3/4	
SK080	80	27	168	R-4	土師器	?	—	4.0	—	破片	
SK080	80	27	169	R-2	弥生土器	甕	—	7.9	—	口縁～体部片	
SK080	80	27	170	R-3	弥生土器	甕	—	3.6	—	口縁部片	
SK080	80	27	171	R-5	弥生土器	甕	—	8.5	(6.8)	底部1/2	
SK080	80	27	172	R-7	石器	石鏃	2.5	1.0	0.45	完存	重量1g未満　サヌカイト
SK080	80	27	173	R-8	石器	石鏃	2.05	1.4	0.3	一部欠損	重量1g　黒曜石
SK082	82	27	174	R-2	弥生土器	甕	—	3.8	—	口縁部片	
SK082	82	27	175	R-3	弥生土器	甕	—	3.9	—	口縁部片	
SK082	82	27	176	R-4	弥生土器	甕	—	3.1	—	口縁部片	
SK082	82	27	177	R-5	弥生土器	鉢	—	1.5	—	口縁部片	
SK082	82	27	178	R-1	弥生土器	甕	—	4.6	6.2	底部のみ	
SK082	82	27	179	R-7	石製品	石皿	10.9	10.1	2.5		重量443g　安山岩
SK082	82	27	180	R-6	石器	石鏃	2.9	1.7	0.2	一部欠損	重量1g　黒曜石
SK090	90	28	181	R-3	弥生土器	壺	—	2.6	—	破片	
SK090	90	28	182	R-2	弥生土器	甕	—	1.3	—	口縁部片	
SK090	90	28	183	R-1	弥生土器	高坏	—	1.2	—	底部片	
SP092	92	28	184	R-1	弥生土器	壺	—	4.2	—	破片	
SK095	95	28	185	R-1	弥生土器	壺	(10.2)	11.7	—	口縁～体部1/2	
SK095	95	28	186	R-4	弥生土器	甕	(25.0)	21.8	—	1/8	

Tab.1　遺物観察表

遺構	S-番号	Fig.	番号	R番号	種類	器種	口径（長さ）	器高（幅）	底径（厚・径）	残存	備考
SK095	95	28	187	R-2	弥生土器	鉢	(19.2)	7.1	—	口縁1/6	
SK095	95	28	188	R-3	弥生土器	甕	(24.7)	6.9	—	口縁1/6	
SK095	95	28	189	R-5	弥生土器	鉢	(11.3)	6.2	—	口縁1/3	
SK095	95	28	190	R-6	弥生土器	甕	—	5.0	—	口縁部片	
SK095	95	28	191	R-7	石器	石斧	15.5	9.3	5.2	1/2	重量1061g
SK099	99	29	192	R-3	弥生土器	壺	—	9.1	—	口縁部片	
SK099	99	29	193	R-1	弥生土器	壺	—	10.8	—	体部片	
SK099	99	29	194	R-2	弥生土器	甕	—	6.8	—	口縁部片	
SK099	99	29	195	R-4	弥生土器	甕	—	7.0	—	口縁部片	
SK099	99	29	196	R-7	弥生土器	甕	—	2.7	—	口縁部片	
SK099	99	29	197	R-6	弥生土器	壺	—	4.3	—	口縁部片	
SK099	99	29	198	R-5	弥生土器	鉢	—	1.7	—	破片	
SK099	99	29	199	R-8	弥生土器	甕	—	2.5	5.0	底部のみ	
SK099	99	29	200	R-9	石製品	砥石	3.0	4.4	3.1		重量55g　砂岩
SK099	99	29	201	R-10	石器	石鏃	4.3	1.8	0.4	一部欠損	重量2g　サヌカイト
SK100	100	29	202	R-8	弥生土器	壺	—	5.4	—	体部片	
SK100	100	29	203	R-1	弥生土器	壺	(18.0)	5.5	—	口縁1/6	
SK100	100	29	204	R-4	弥生土器	甕	—	6.0	—	口縁部片	
SK100	100	29	205	R-2	弥生土器	甕	—	12.0	—	口縁～体部片	
SK100	100	29	206	R-5	弥生土器	甕	—	4.4	—	口縁部片	
SK100	100	29	207	R-6	弥生土器	甕	—	3.2	—	口縁部片	
SK100	100	29	208	R-3	弥生土器	甕	—	4.4	—	口縁部片	
SK100	100	29	209	R-7	弥生土器	鉢	—	2.7	—	口縁部片	
SK100	100	30	210	R-9	弥生土器	甕	—	9.3	7.1	底部のみ	
SK100	100	30	211	R-10	弥生土器	甕	—	10.4	8.1	底部のみ	
SK100	100	30	212	R-11	弥生土器	甕	—	3.1	(6.4)	底部1/4	底部　モミ痕
SK100	100	30	213	R-12	土製品	紡錘車	4.9	0.9	—	1/2	重量11g
SK102	102	30	214	R-7	弥生土器	甕	(21.4)	11.8	—	口縁1/3	
SK102	102	30	215	R-3	弥生土器	甕	(17.4)	4.1	—	口縁1/6	
SK102	102	30	216	R-1	弥生土器	鉢	(15.0)	11.3	5.5	3/4	
SK102	102	30	217	R-5	弥生土器	甕	—	12.4	—	口縁～体部片	
SK102	102	30	218	R-4	弥生土器	甕	—	8.7	—	口縁～体部片	
SK102	102	30	219	R-2	弥生土器	甕	—	7.7	(9.2)	底部1/4	
SK102	102	30	220	R-6	弥生土器	鉢	8.1	4.2	5.2	4/5	
SK103	103	31	221	R-5	弥生土器	甕	(28.7)	20.9	—	1/2	
SK103	103	31	222	R-2	弥生土器	鉢	—	3.8	—	口縁部片	
SK103	103	31	223	R-4	弥生土器	甕	—	11.4	7.5	1/3	
SK103	103	31	224	R-1	弥生土器	甕	—	5.3	8.2	底部のみ	
SK103	103	31	225	R-3	弥生土器	甕	—	7.4	5.5	底部のみ	
SK103	103	31	226	R-6	石製品	すり石	9.3	9.0	5.7	2/3	重量702g　砂岩
DK105	105	32	227	R-3	弥生土器	壺	—	5.6	—	破片	
SK105	105	32	228	R-1	弥生土器	甕	—	6.8	—	口縁部片	
SK105	105	32	229	R-2	弥生土器	甕	—	6.3	—	口縁部片	
SD041	41	32	230	R-1	青磁	碗	—	2.9	—	口径破片	竜泉窯系青磁
SE065	65	32	231	R-4	弥生土器	壺	—	12.4	—	体部1/3	
SE065	65	32	232	R-2	弥生土器	甕	28.6	21.4	—	3/4	
SE065	65	32	233	R-3	弥生土器	甕	(24.6)	12.1	—	口縁～体部1/2	
SE065	65	32	234	R-1	弥生土器	甕	23.8	16.4	—	2/3	
SE065	65	32	235	R-8	弥生土器	甕	(20.2)	3.8	—	口縁1/8	
SE065	65	32	236	R-12	弥生土器	甕	—	5.6	—	口縁部片	
SE065	65	32	237	R-6	弥生土器	甕	—	5.4	—	口縁部片	
SE065	65	32	238	R-11	弥生土器	甕	—	4.2	—	口縁部片	
SE065	65	32	239	R-9	弥生土器	甕	—	8.5	—	口縁～体部片	
SE065	65	33	240	R-7	弥生土器	甕	—	6.7	—	口縁部片	
SE065	65	33	241	R-10	弥生土器	甕	—	5.6	—	口縁部片	
SE065	65	33	242	R-18	弥生土器	甕	—	5.4	—	口縁破片	
SE065	65	33	243	R-5	弥生土器	甕	—	15.2	(7.8)	体部～底部1/3	
SE065	65	33	244	R-16	弥生土器	甕	—	8.3	(5.4)	底部1/2	
SE065	65	33	245	R-13	弥生土器	壺	—	7.2	(5.3)	底部1/3	
SE065	65	33	246	R-15	弥生土器	甕	—	8.3	6.2	底部2/3	
SE065	65	33	247	R-14	弥生土器	甕	—	6.1	7.3	底部2/3	
SE065	65	33	248	R-17	石製品	扁平片刃石斧	3.6	1.4	0.5		砂岩　5g

Tab.1　遺物観察表

遺構	S-番号	Fig.	番号	R番号	種類	器種	口径 (長さ)	器高 (幅)	底径 (厚・径)	残存	備考
SE065	65	33	249	R-19	石製品	すり石	11.4	7.4	4.5	1/2	
SE065	65	34	250	R-20	石製品	砥石	12.2	14.8	6.8	不明	
SE065	65	34	251	R-21	木製品	不明	18.7	13.0	1.4	不明	
遺構検出包含層		34	252	R-1	土師器	ミニュチュア壺	3.9	2.7	3.4	3/4	

Ⅳ. 考察

1. 調査の概要

今次調査は弥生時代の遺構を中心とし、中世の遺構を若干含む遺跡である。遺構の構成は土壙61基、井戸1基、溝1条、ピット群であり、これらの遺構からは主に弥生時代前期末から中期初頭、中近世にかけての遺物が出土している。

上記した土壙のうち6SK015、020、025、050については流路底部の遺構と捉えることも可能であり、特に6SK025については市内では類例のない遺構であり、不明遺構としてSXとした方が妥当なのかもしれない。他の遺構を含めても今次調査のみで判断でき得ない部分が多々存在する。また、土壙や井戸等の生活関連遺構群に付随するはずの住居跡が今次調査では見られない。

したがって、常用遺跡群の集落を考える上では過去の周辺遺跡の調査事例を含めて今次調査の成果と問題点について考察する。

2. 今次調査から得られた成果と問題点

・6SK015、020、025、050の性格について

調査区北辺から6SK015が南へ延び、一端途切れたあと6SK020、025へと続く。検出面での埋土はいずれも同様で、遺構底部はかなりの凹凸が見られる。6SK025は下層に灰色系粘土が一面に平らに堆積しており、人為的行為による埋没及び埋立を示唆するものであり、遺構立ち上り部分に斜方向のピットを穿っているのは、何らかの施設を想定させるものである。また、6SK050についても底部は凹凸が激しく、全体的な形状が溝状を呈しており、短辺両サイドに土壙が連結されるものである。

いずれの遺構も溝状を呈するものの、6SK050を除けば遺構は途切れ、不定形土壙の様を呈するため、溝とは想定することは困難である。しかし、位置と環境で記したとおり、昭和43年に行われた狐塚遺跡の発掘調査時に小田富士雄氏により今次調査の至近距離に位置する畑の地下げ時の写真及び採集遺物が報告されており、溝として捉えられる可能性を示唆している。以下に抜粋し考察する。

狐塚遺跡の南方1.2kmばかりのところにある低台地の南端を一昨年から地下げしている。多くの弥生土器が出土している。偶々狐塚遺跡の調査中に甕棺が発見されたとの報に接し現場を踏査した。畑地を約20mの幅にわたって地下げを行っており、切通し面に板付Ⅱb期に相当する壷棺が斜めに埋葬されている状態が観察された。地表下20～80cmの黒色土の中に含まれている。そのうち露出していたものでは壷棺を鉢で覆うたものがみられた。付近で表採される土器には後述するように夜臼式の新しい形態のものから中期（須玖式）に及ぶ資料があり、住居跡と墳墓が重複する遺跡であることが知られた。計画的な調査が望まれる。『狐塚遺跡』1970　筑後市教育委員会（69頁抜粋）

筑後市常用遺跡
地下げ工事断面にあらわれた
壷棺埋没状況『狐塚遺跡』

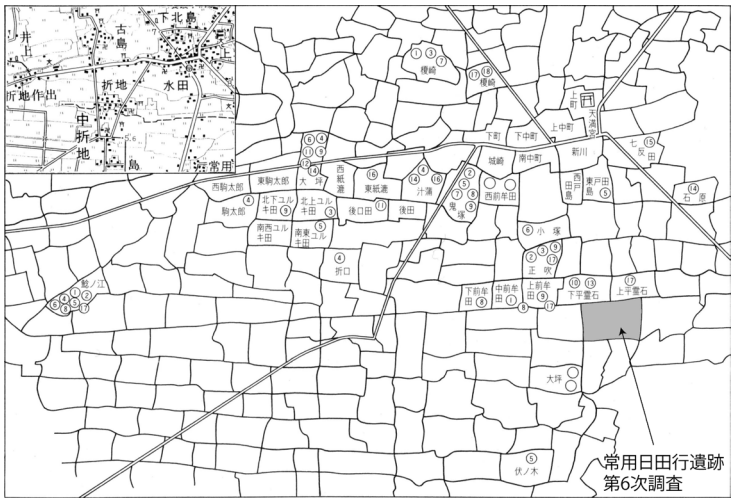
この報告では地表下約 20cm ほどの位置で甕（壷）棺を出土しており、埋土は黒色土である。写真で見る限り、表土直下で壷棺を検出しており、今次調査の基本土層模式図と比べると、現況はかなりの削平を受けていると考えられる。昭和 30 年代以降、市内各地は耕地整理による畑から水田への変更で地下げ（削平及び掘削）が進んでおり、今次調査についても大規模な削平後の検出であると考えられる。したがって、6SK015、020、025、050 を含めた遺構群は残存状況が非常に悪い中での確認であったことがうかがえ、流路跡若しくは溝状遺構の底部の検出であった可能性が指摘できる。しかし、6SK025 の南側には土壙群が展開することから、調査区南側は溝状遺構が完全に削平を受けた、若しくは流路・溝であった場合でも途切れる遺構であると推定される。

・6SK050 内に付随する土壙について

検出段階では平面は不定形な形状をとる遺構であったが、掘削後土壙が連結する様子が明らかとなった。連結する土壙と遺構本体との土層観察を行っていないため断言できないが、平面検出段階での切り合い関係が認められなかったことから 6SK050 との埋没時の同時性がうかがえる。この遺構に類似するものに今次調査から北東 200 mに位置する水田上平霊石遺跡第 1 次調査 1SD001 が挙げられる。調査担当者はこの溝を「区画溝」と「水利施設」、溝に連結する 7 つの土壙について「堅果類のアク抜き」のための施設と推測しているが、実際に土壙からの堅果類の出土及び埋土等の分析による裏付けが必要であり、検討を要するものである。今次調査では遺構の存在以外の判断根拠が全くないため不明であると言わざるを得ない。

・6SD041 の性格について

調査区東端で検出した東西の溝である。西で完全に途切れる遺構である。常用日田行遺跡第 2 次調査 2SD1032 と常用日田行遺跡第 3 次調査 3SD01 という溝が検出されているが、この西延長上に 6SD041 が存在する。溝断面がやや異なるものの埋土及び出土遺物の時期については常用日田行遺跡第 2 次調査 2SD1032 と同様である。常用日田行遺跡第 2 次調査担当者は用排水路や区画溝の性格を推測しており、現在の字図の地割がどの時点で引かれたかは不明であるが、常用地区や水田地区等の地割がほぼ東西南北に拠っていることから、少なくとも近世までには埋没した区画溝及び用排水路と考えられる。



『筑後市史』第 1 巻　均等名田の分布図を一部改変

・検出された土壙群について

先に述べたとおり、今次調査では 61 基の土壙が検出され、常用日田行遺跡第 1 次調査で 47 基、2 次調査で 34 基、常用長田遺跡を含めると数百基の土壙が検出されている。常用日田行遺跡第 1・2 次調査の報告で土壙のタイプ分類を行っている。このタイプ分類について一部改変し、今次調査の土壙群について方位及び構造について分類を行い、調査区内（約 1000㎡）の配置に関して考察する。

今次調査検出土壙の内、遺物が出土していないものの、埋土状況から弥生時代と考えられる土壙を含めて 32 基を対象とした（埋土が弥生時代の遺構と著しく違い、別の時代の遺構と考えられるもの及び切り合い関係が激しいもの等、対象から除外している土壙もあるため、調査時の主観が含まれる可能性がある）。

〈方位による分類から土壙形状の分類を見た場合〉

土壙の主軸（基本的には長軸）の座標北からの振れの少ないものから順番に並べ、振れが東西で違うものについても分けた。方位の違いによる 4 グループに分別し、更に平面及び断面、底部状況の 3 種類の構造について各遺構にタイプを付した結果が Tab.2 である。

各グループ毎に観察すると、①グループは主軸をほぼ座標北にとり、平面形状に特徴のある B 類を除く 3 形状が分布し、断面形状Ⅳ類が多くを占める。②グループは主軸が 11°～ 36°東へ振れ、①グループと土壙形状は同様であるが、断面形状が袋状を呈するⅡ類が 1 基存在する。③グループは主軸が 45°以上東へ振れ、平面形状 C 類、断面形状は Ⅰ 類が多数を占める。④グループは主軸が唯一西へ振れるグループで平面形状は全ての形状、断面形状も Ⅰ 類が多いが全ての形状を備えている。また、1 事例であるため断定できないが、④グループの 6SK080 は 105 を切っており、③グループより④グループが新しくなると考えられる。方位によるグルーピングの結果、土壙構造による偏りが③グループの C 類が主体を成す以外、大きな変化や傾向は見られない。

〈土壙形状による分類から方位による分類を見た場合〉

平面形状を大分類として、断面形状、底部形状について分類したものが Tab.3 である。平面形状分類による断面・底部形状分類に偏りは見られず、逆にⅡ類の袋状断面形状が 3 例であるが ABC に分かれた。また、平面形状と方位によるグループとの相関関係は A 類には②グループ 46％、B 類には④グループ 60％、C 類には③グループ 56％、D 類には①グループが 43％を占め、大きな偏りは見られないが傾向として捉えることができる。

〈方位による分類から見た土壙配置について〉

方位による 4 つのグループを今次調査遺構全体図に反映し、それらの遺構が 3 基以上並ぶと考えられる遺構について帯状の線で表したものが Fig.36 である（調査区内限定であるため、不確定な要素を含む）。①グループは遺構長軸を軸として縦方向の配置で北東－南西に計 2 条、②グループは遺構長軸を軸として横方向の配置で北西－南東に 1 条、遺構長軸を軸として縦方向の配置で南北に 1 条、遺構長軸を軸として縦方向の配置で北東－南西に 1 条の計 3 条、③グループは遺構長軸を軸として縦方向の配置で北東－南西に 1 条、④グループは遺構長軸を軸として横方向の配置で北東－南西に計 3 条、遺構長軸を軸として縦方向の配置で北西－南東に 2 条を示す（一部重複するものも存在する）。これらについて②グループの南北 1 条を除いて土壙主軸が座標北に比して東西に振れていることが分かる。これは 6SK015、050 等を流路及び溝と認識した場合、当時の集落形成による意図的な配置若しくは当時の地形による制約と考えられ、土壙軸が北東－南西及びそれに直交する北西－南東という現象が見られる。この現象は常用日田行遺跡や常用長田遺跡、水田上平霊石遺跡でも確認でき、今次調査を含め比較的広範に面的に捉えられる現象である。

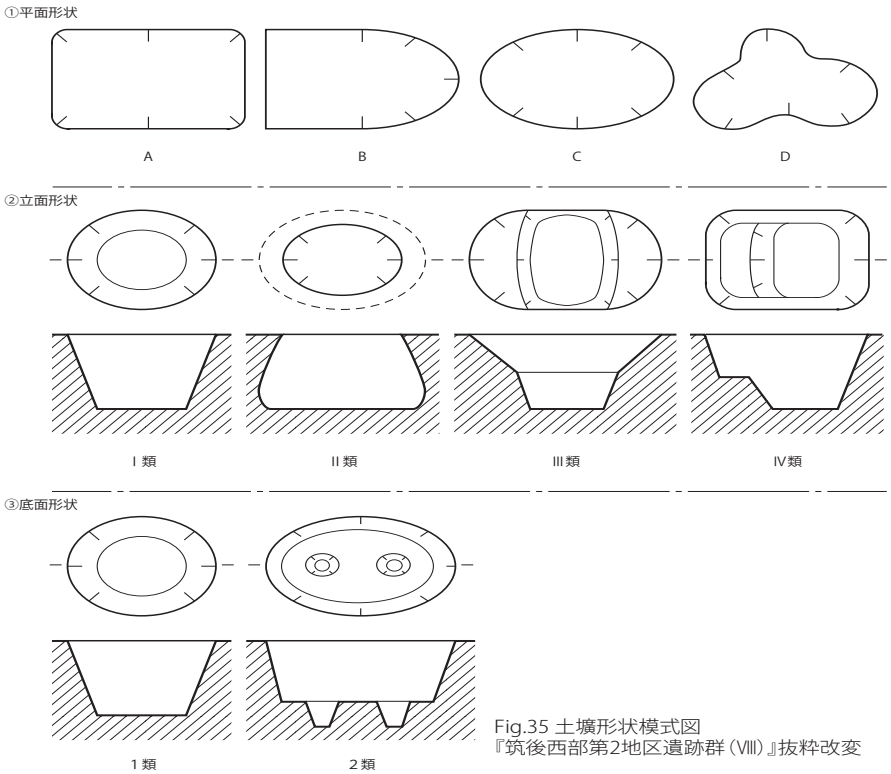


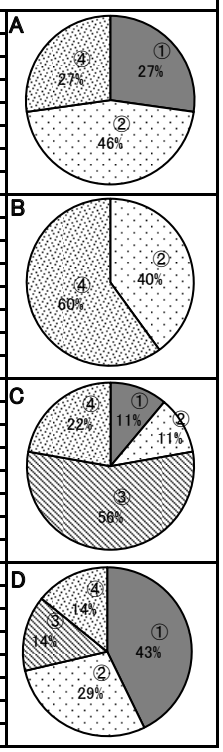
Fig.35 土壙形状模式図
『筑後西部第2地区遺跡群（Ⅷ）』抜粋改変

Tab.2 土壙方位による分類

遺構名	方位	グループ	（筑後市文化財調査報告書第57集）での分類	Fig.35での分類
6SK030	座標北	①	B-Ⅲ-1	C-Ⅲ-1
6SK049	座標北		B-Ⅳ-1	D-Ⅳ-1
6SK070	座標北		A-Ⅰ-1	A-Ⅰ-1
6SK076	座標北		A-Ⅳ-1	A-Ⅳ-1
6SK077	座標北		A-Ⅳ-1	A-Ⅳ-1
66SK095	座標北		C-Ⅳ-1	D-Ⅳ-1
6SK100	座標北		C-Ⅲ-1	D-Ⅲ-1
6SK053	N 11°02'27'' E	②	A-Ⅰ-1	A-Ⅰ-1
6SK090	N 15°20'00'' E		A-Ⅰ-1	A-Ⅰ-1
6SK061	N 19°26'24'' E		A-Ⅳ-1	A-Ⅳ-1
6SK037	N 22°28'46'' E		A-Ⅳ-1	A-Ⅳ-1
6SK045	N 23°29'55'' E		C-Ⅳ-1	D-Ⅳ-1
6SK075	N 25°20'46'' E		A-Ⅱ-1	A-Ⅱ-1
6SK055	N 27°28'28'' E		B-Ⅰ-1	B-Ⅰ-1
6SK082	N 29°21'28'' E		B-Ⅳ-2	B-Ⅳ-2
6SK040	N 32°00'19'' E		B-Ⅰ-1	C-Ⅰ-1
6SK001	N 36°01'39'' E		C-Ⅳ-1	D-Ⅳ-1
6SK034	N 45°00'00'' E	③	B-Ⅰ-1	C-Ⅰ-1
6SK060	N 47°54'39'' E		B-Ⅰ-1	C-Ⅰ-1
6SK039	N 53°28'16'' E		B-Ⅱ-1	C-Ⅱ-1
6SK073	N 59°32'04'' E		B-Ⅰ-2	C-Ⅰ-2
6SK105	N 60°15'18'' E		B-Ⅳ-1	C-Ⅳ-1
6SK005	N 72°10'52'' E		C-Ⅰ-1	D-Ⅰ-1
6SK079	N 42°38'48'' W	④	B-Ⅰ-1	C-Ⅰ-1
6SK080	N 50°31'39'' W		C-Ⅲ-1	D-Ⅲ-1
6SK028	N 51°20'25'' W		B-Ⅳ-1	C-Ⅳ-1
6SK010	N 54°46'57'' W		A-Ⅰ-1	A-Ⅰ-1
6SK023	N 56°18'36'' W		A-Ⅰ-1	A-Ⅰ-1
6SK035	N 57°15'53'' W		A-Ⅳ-1	A-Ⅳ-1
6SK071	N 61°11'21'' W		C-Ⅳ-1	B-Ⅱ-1
6SK024	N 61°11'21'' W		B-Ⅰ-1	B-Ⅰ-1
6SK099	N 73°00'33'' W		C-Ⅰ-1	B-Ⅰ-1

Tab.3　土壙形状による分類

遺構名	Fig.35での分類	平面形状	断面形状	底部形状	方位	方位によるグループ
6SK070	A-Ⅰ-1	A（11）	Ⅰ（5）	1（11）	座標北	①
6SK053	A-Ⅰ-1				N 11°02'27'' E	②
6SK090	A-Ⅰ-1				N 15°20'00'' E	②
6SK010	A-Ⅰ-1				N 54°46'57'' W	④
6SK023	A-Ⅰ-1				N 56°18'36'' W	④
6SK075	A-Ⅱ-1		Ⅱ（1）		N 25°20'46'' E	②
6SK076	A-Ⅳ-1		Ⅳ（5）		座標北	①
6SK077	A-Ⅳ-1				座標北	①
6SK061	A-Ⅳ-1				N 19°26'24'' E	②
6SK037	A-Ⅳ-1				N 22°28'46'' E	②
6SK035	A-Ⅳ-1				N 57°15'53'' W	④
6SK055	B-Ⅰ-1	B（5）	Ⅰ（3）	1（4）	N 27°28'28'' E	②
6SK024	B-Ⅰ-1				N 61°11'21'' W	④
6SK099	B-Ⅰ-1				N 73°00'33'' W	④
6SK071	B-Ⅱ-1		Ⅱ（1）		N 61°11'21'' W	④
6SK082	B-Ⅳ-2		Ⅳ（1）	2（1）	N 29°21'28'' E	②
6SK040	C-Ⅰ-1	C（9）	Ⅰ（5）	1（4）	N 32°00'19'' E	②
6SK034	C-Ⅰ-1				N 45°00'00'' E	③
6SK060	C-Ⅰ-1				N 47°54'39'' E	③
6SK079	C-Ⅰ-1				N 42°38'48'' W	④
6SK073	C-Ⅰ-2			2（1）	N 59°32'04'' E	③
6SK039	C-Ⅱ-1		Ⅱ（1）	1（4）	N 53°28'16'' E	③
6SK030	C-Ⅲ-1		Ⅲ（1）		座標北	①
6SK105	C-Ⅳ-1		Ⅳ（2）		N 60°15'18'' E	③
6SK028	C-Ⅳ-1				N 51°20'25'' W	④
6SK005	D-Ⅰ-1	D（7）	Ⅰ（1）	1（7）	N 72°10'52'' E	③
6SK100	D-Ⅲ-1		Ⅲ（2）		座標北	①
6SK080	D-Ⅲ-1				N 50°31'39'' W	④
6SK049	D-Ⅳ-1		Ⅳ（4）		座標北	①
66SK095	D-Ⅳ-1				座標北	①
6SK045	D-Ⅳ-1				N 23°29'55'' E	②
6SK001	D-Ⅳ-1				N 36°01'39'' E	②



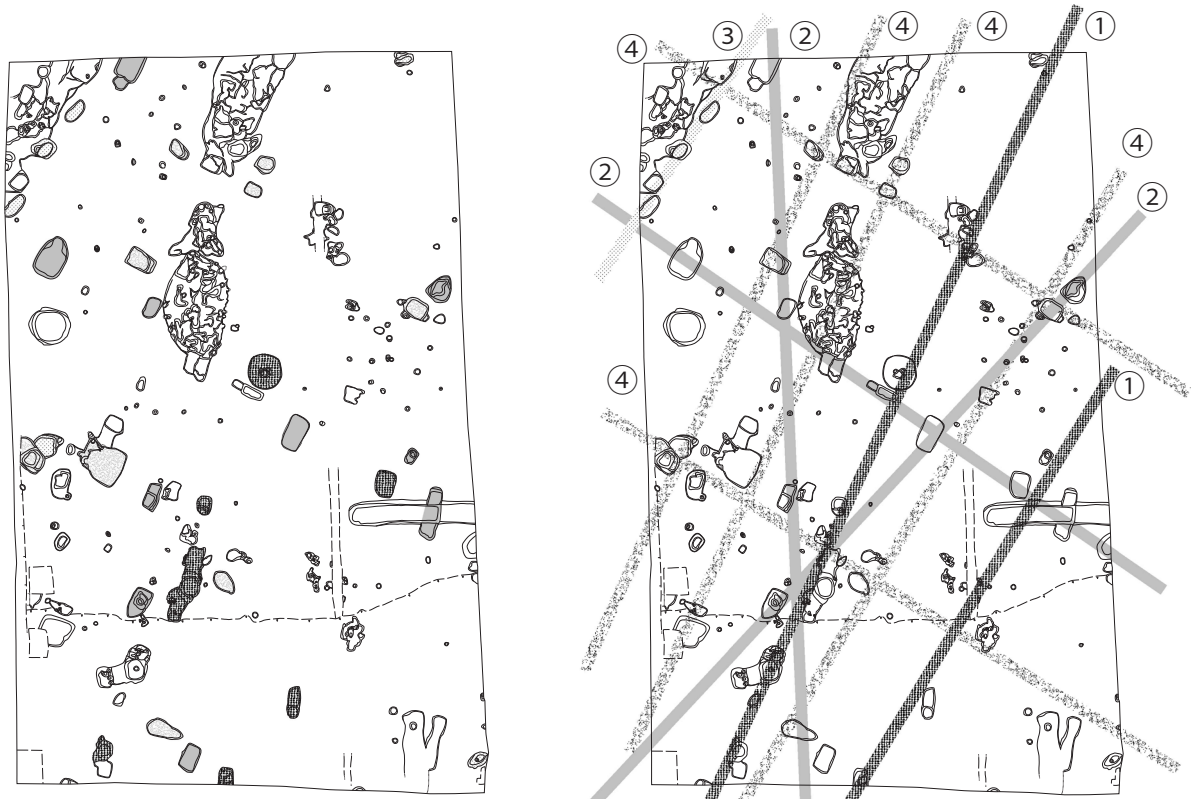


Fig.36　グループ別遺構配置図（1/400）

〈貯蔵穴と廃棄土壙〉

当市の弥生時代の土壙について「貯蔵穴」「廃棄土壙」という報告が多く見られるが、その定義について詳細な記述が見られない。いわゆる土壙断面が袋状を呈する土壙等について「貯蔵穴」等と称し、土層観察及び出土遺物から「貯蔵穴」使用後の「廃棄土壙」と報告される例が多数ある。今次調査においても断面袋状を呈する土壙が 3 基確認されている。特に市内における当該期の集落様相がはっきりと見えない中で、常用遺跡群全体では数百基以上確認されている土壙について「貯蔵穴」「廃棄土壙」として捉えて良いのだろうか。水田杉ノ元遺跡の調査担当者は墓壙の可能性を視野に調査を行ったが結果的には墓壙ではないという認識を示している。今次調査では「貯蔵」「廃棄」にかかわらず「土壙」と表記した。性格に関しては調査時に「穿つ段階」「使用された段階」「埋没する段階」を認識しつつ詳細な記録を取った上での判断が必要である。

・集落遺跡であるが住居跡が確認できない問題

当市の弥生時代後期以降の住居を伴う集落遺跡は蔵数遺跡群や若菜遺跡群など他市事例と同様に大規模で住居数も多く見られる。しかし、今次調査も含めた弥生時代前期から中期にかけての住居（円形竪穴住居）を伴う集落遺跡は激減する。しかも住居検出は少ないにも拘わらず土壙など遺構や遺物は膨大な数が出土している。常用遺跡群を取り巻く周辺遺跡でも住居が確認されているものは 3 遺跡（10 棟）に過ぎない（Tab.4）。

この現象の原因としては、先に述べた現代の耕地整理や古代以降の整地等による削平が挙げられる。周辺遺跡についても円形竪穴住居は 10 棟程度、方形竪穴住居（当該期のものか不明）7 棟、掘立柱建物も中期の 29 棟程度であり、調査された面積や遺物数から見ても極端に少ない。また、確認された円形住居についても痕跡は一様に浅く残存状況は悪い。一部の報告では低湿地に対して掘り方を浅くしても問題はないとの考え方も示されているが、基本的には上部構造の削平が第一の原因と考えられる。また、市南部で検出される当該期の遺跡に関して、後期集落をモデルに低地での竪穴住居は環境的に掘立柱建物の方が利便性に長け、凡そ標高を基準として竪穴住居と掘立柱建物の区別があったとされる論述もあるが、当市内における掘立柱建物自体の検出例が少なく、低地で湧水環境であるにも拘わらず高床ではなく地下の貯蔵穴と考えられる土壙が膨大な数を示すことと矛盾する。また、常用遺跡から南の津島地区等の低湿地遺跡の環境として当該期に仮小屋程度の作業場所と生産場所であるという「集落ではない」といった考え方も提示されているが、やはり遺構数と出土遺物数を考える仮説の域を出ない。

弥生時代前期末から中期にかけて大量に出土する遺物を生み出す常用遺跡群の集落（住居跡）はどこにあったのであろうか。消極的判断であるが、常用日田行遺跡第 1 次調査及び常用長田遺跡第 2 次調査で円形住居が若干確認されており、また掘立柱建物も確認されていない状況から、常用地区では既報告にあるように標高の低い低地での掘立柱建物住居論には前期末から中期初頭に限っては否定的にならざるを得ない。したがって、削平による消滅若しくは現集落は未調査が多いことから未だ確認されていないという結論しか導くことはできない。

既報告によると、市南部の弥生時代の集落に関して、空間的な認識として集落内の「住居」「作業場（生産活動場）」「墓地」等が分かれていたと論じられている。例えば「貯蔵穴」についても収蔵庫として集落内でも区別されていたと推論されている。しかし、現に常用長田遺跡等で円形住居と土壙群等が並存（同時性は不明）している状況であるため一概には言えない。先に見た常用遺跡や周辺の遺跡に関しても弥生時代前期末から中期初頭にかけての「住居」がほとんど確認されていない中での空間認

Tab.4　常用遺跡群周辺　弥生時代集落遺跡一覧

地区	年度	遺跡名	主な遺物の時代	土壙数	円形住居	方形住居	掘立柱建物	調査面積（㎡）	備考
常用地区	2	梅島遺跡第1次調査	中期前半～後期末	25		1		370	調査地は大字常用字梅島
	3	梅島遺跡第2次調査	中期～後期末	3				3,500	
	7	常用ビンセ田遺跡		3				183	削平著しいため遺構希薄
	8	常用日田行遺跡第1次調査	前期後半～中期前半	47	2			4,185	
	8	常用日田行遺跡第2次調査	前期後半～中期前半	34				2,990	
	8	常用長田遺跡第1次調査	前期後半～中期前半	15				1,225	
	9	常用長田遺跡第2次調査	前期末～中期初	157	5	6		3,500	
	9	常用ニラバ遺跡第1次調査	中期初～	2				360	
	9	常用相割遺跡第1次調査						276	
	9	常用野々下遺跡第1次調査						66	
	11	常用日田行遺跡第3次調査	前期末～中期初	2				1,200	
水田地区	4	水田山伏遺跡第1次調査	中期	1			1	300	
	6	水田山伏遺跡第2次調査	中期前半	1				44	
	8	水田下桜町遺跡第1次調査	中世以降					350	中世以降の削平を示唆
	8	水田杉ノ元遺跡第1次調査	中期初～中期中	100			18	600	土壙配置の規則性を示唆
	8	水田杉ノ元遺跡第2次調査	中期初～中期中	49				1,800	
	8	水田正吹遺跡第1次調査	後期	1				4,340	遺構削平を示唆
	9	水田伊勢ノ脇遺跡第1次調査	後期～後期末	3				696	
	10	水田上仁良葉遺跡第2次調査						160	
	10	水田上平霊石遺跡第1次調査	前期後半～中期前半	16				2,300	溝に連結する土壙有
	10	水田上平霊石遺跡第2次調査	前期後半～中期初	13				265	
	10	水田上平霊石遺跡第3次調査	中期						
	10	水田下平霊石遺跡第1次調査	前期後半	1				135	
上北島地区	3	上北島平塚遺跡第1次調査	中期前半～中期初頭		3			3,500	
下北島地区	3	下北島久清遺跡第1次調査	前期末～古墳	27			9	2,000	
津島地区	9	津島皿ヶ町遺跡第1次調査	中期中～古墳初	25				491	
	12	津島九反坪遺跡第1次調査	前期末～後期末	62			1	10,000	溜井2基
合計				587	10	7	29	44,836	

識は危険であり、調査事例の積み上げと詳細な「現場」でのデータの蓄積がなければ仮説を肯定することはできない。

・出土遺物について

今次調査からは弥生時代前期の夜臼系と考えられる刻目突帯文系土器から中期初頭の城ノ越式までの土器が出土している。その中でも八女地方特有の亀ノ甲タイプと言われる刻目突帯文土器が多数を占める状況である。この出土傾向は既報告で論じられている出土傾向と全く同様で、今次調査に限っての特異な遺物や傾向は見られない。ただし、注視したいのは図示は行っていないが Pla.25 に掲載した参考資料の凝灰岩や安山岩の小礫群である。ほぼどの遺構からも出土しており、明確な加工及び使用痕跡は確認できないが規格がほぼ同じであり意図的な行為や使用を示唆するものである。また、Fig.17-41 の弥生土器片についても上下に面取りを行っており、下方が接合離れの可能性も考えられるが不明な土器片である。また、井戸底部で木枝等に混じって板材が出土しており、当該期の木製品の資料として注目できる。

3. 常用日田行遺跡第 6 次調査

今次調査では面的な調査を行うことで、周辺遺跡を含めた常用遺跡群の様相を提示した。考察では成果について問題点を指摘するに留まったが、平成 2 年の梅島遺跡調査から 22 年が経過する中で大字常用地区では 20,000㎡近い発掘調査を行ってきた。その殆どが圃場整備事業によるもので、調査地は現代の田畑であり、地下に弥生時代の遺構が膨大に存在するとは、最初に遺跡分布図を作成した

昭和 40 年代には考えられなかった事象である。現在、圃場整備による発掘調査は終了し、市内で大規模な面的調査を行う事例は減少した。したがって、今後常用地区及び市南部の考古学的な成果については既報告を含めた文化財調査報告書からの復元が必須となってくる。また、調査成果についても基本は事実報告であり、客観的事実の積み上げが文化財調査報告書の役割と考える。それに付随する遺構の解釈や遺物の年代論など細かい分析も重要であるが、行政における緊急発掘調査では時間的、費用的な負担が大きいのが現状である。今後、これらの資料を研究材料として活用、若しくは地域史の編纂などに活用いただき、常用地区の弥生時代の復元を願うものである。

参考文献

『狐塚遺跡』1966　筑後市教育委員会

『蔵数遺跡群』筑後市文化財調査報告書第 6 集　1990　筑後市教育委員会

『梅島遺跡』1992　筑後市教育委員会

『筑後西部第 2 地区遺跡群（Ⅰ）』筑後市文化財調査報告書第 21 集　1999　筑後市教育委員会

『筑後西部第 2 地区遺跡群（Ⅱ）』筑後市文化財調査報告書第 26 集　2000　筑後市教育委員会

『筑後西部地区遺跡群Ⅱ』筑後市文化財調査報告書第 29 集　2000　筑後市教育委員会

『筑後市内遺跡群Ⅱ』筑後市文化財調査報告書第 33 集 2001　筑後市教育委員会

『筑後西部第 2 地区遺跡群（Ⅳ）』筑後市文化財調査報告書第 34 集　筑後市教育委員会

『津島九反坪遺跡』筑後市文化財調査報告書第 42 集　2002　筑後市教育委員会

『筑後市内遺跡群Ⅲ』筑後市文化財調査報告書第 44 集　2002　筑後市教育委員会

『筑後西部第 2 地区遺跡群（Ⅵ）』 筑後市文化財調査報告書第 50 集　2003　筑後市教育委員会

『筑後西部第 2 地区遺跡群（Ⅶ）』 筑後市文化財調査報告書第 51 集　2003　筑後市教育委員会

『筑後西部第 2 地区遺跡群（Ⅷ）』 筑後市文化財調査報告書第 57 集　2004　筑後市教育委員会

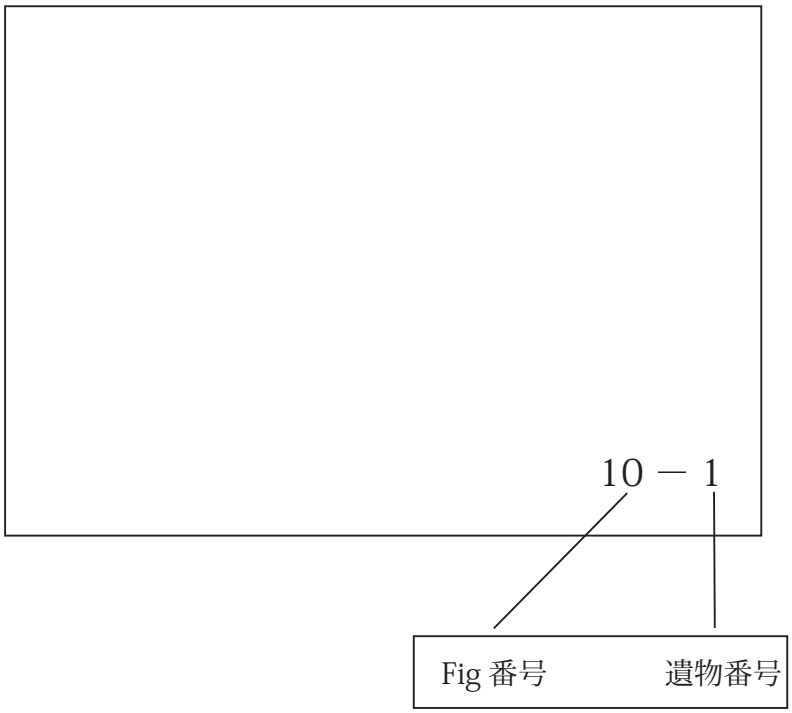
『筑後市内遺跡群Ⅸ』 筑後市文化財調査報告書第 73 集　2006　筑後市教育委員会

『蔵数立野遺跡』 筑後市文化財調査報告書第 81 集　2007　筑後市教育委員会

PLATE

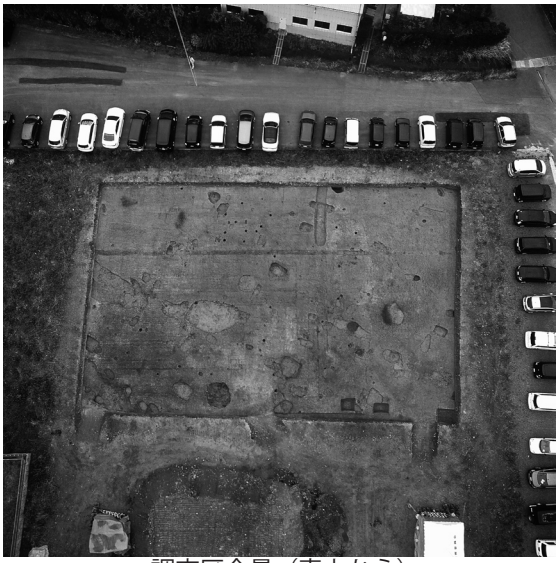
凡　例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。



調査区全景（西から）

調査区全景（南西から）



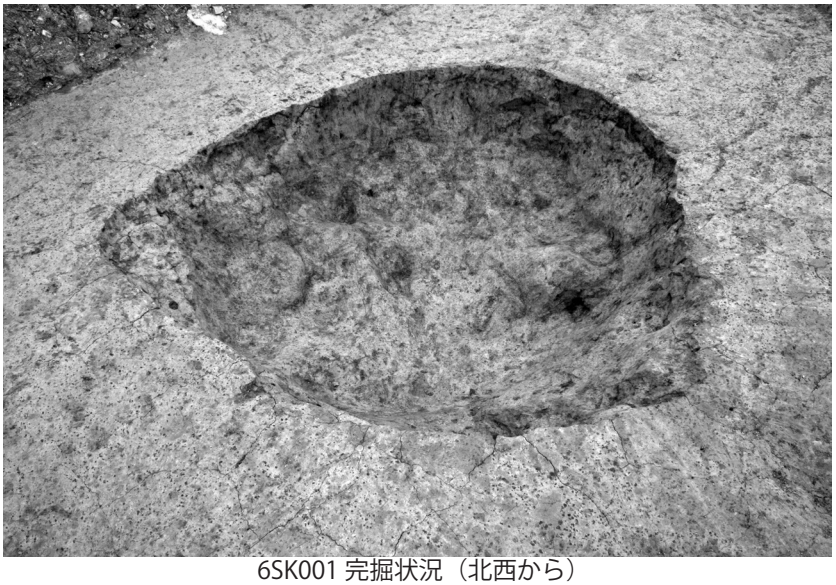
調査区全景（真上から）

Pla.2

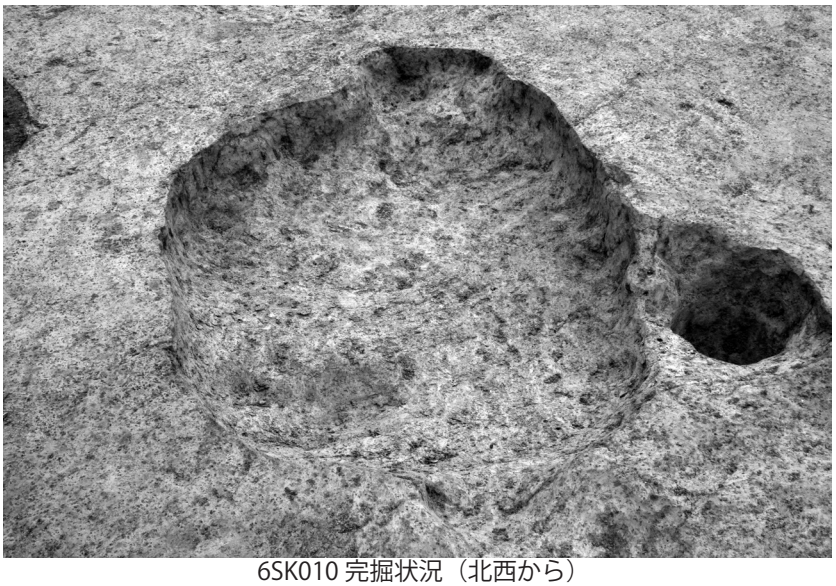
調査前全景（南西から）

道路拡張部分（東から）

6SK001 度土層観察（北西から）



6SK001 完掘状況（北西から）



6SK010 完掘状況（北西から）

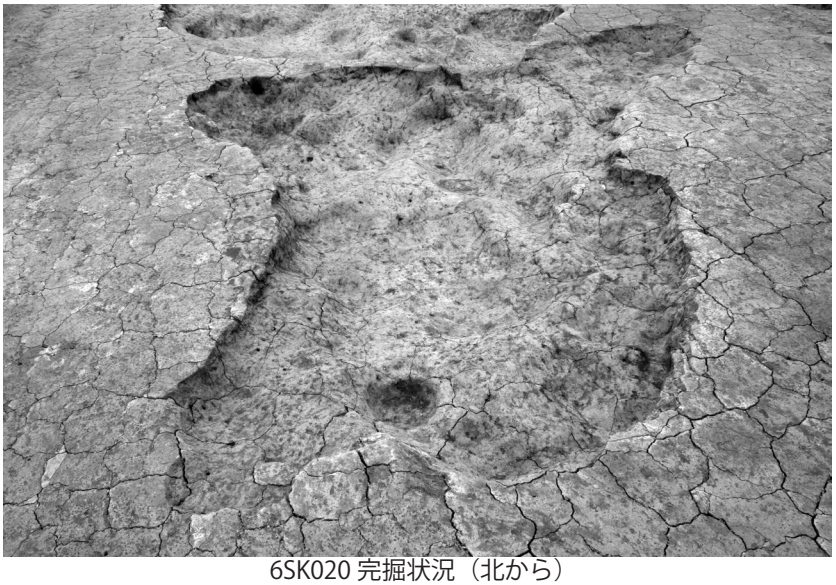
6SK015 検出状況（南西から）

Pla.4

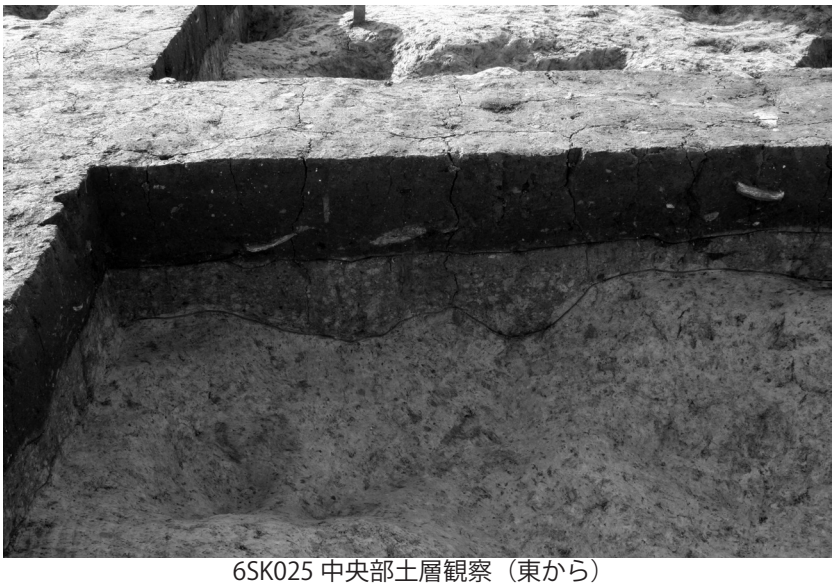
6SK015 土層観察（南西から）

6SK015 完掘状況（北東から）

6SK020・025 完掘状況（南から）



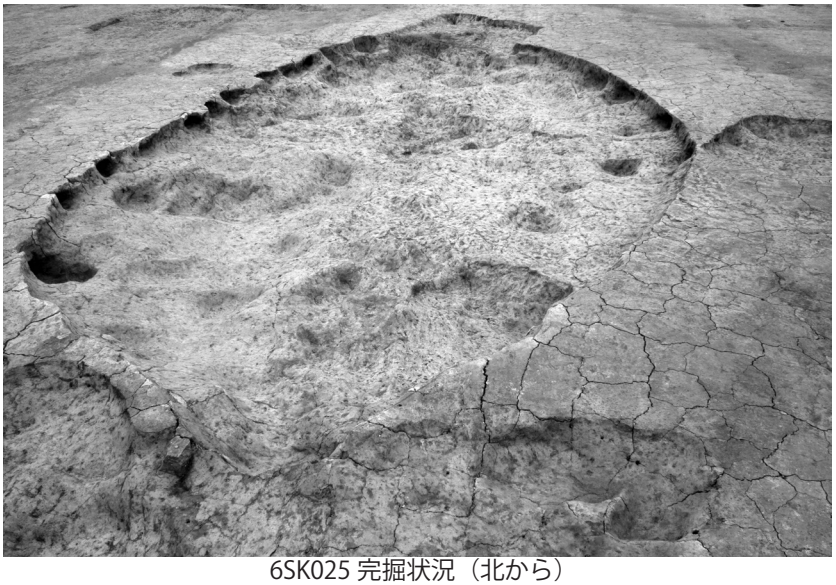
6SK020 完掘状況（北から）



6SK025 中央部土層観察（東から）

6SK025 土層観察（南から）

Pla.6



6SK025 完掘状況（北から）

6SK025 遺構端部小ピット（西から）

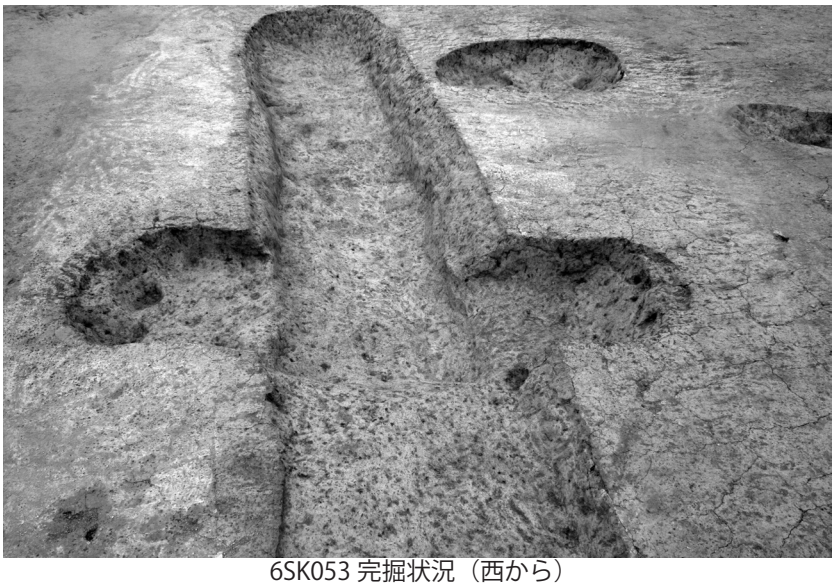
6SK045 土層観察（南東から）

6SK050 検出状況（北東から）

6SK050 完掘状況（北東から）

6SK050 完掘状況（南西から）

6SK050 土層観察（南西から）



6SK053 完掘状況（西から）

6SK055 検出状況（南東から）

6SK055 土層観察（南東から）

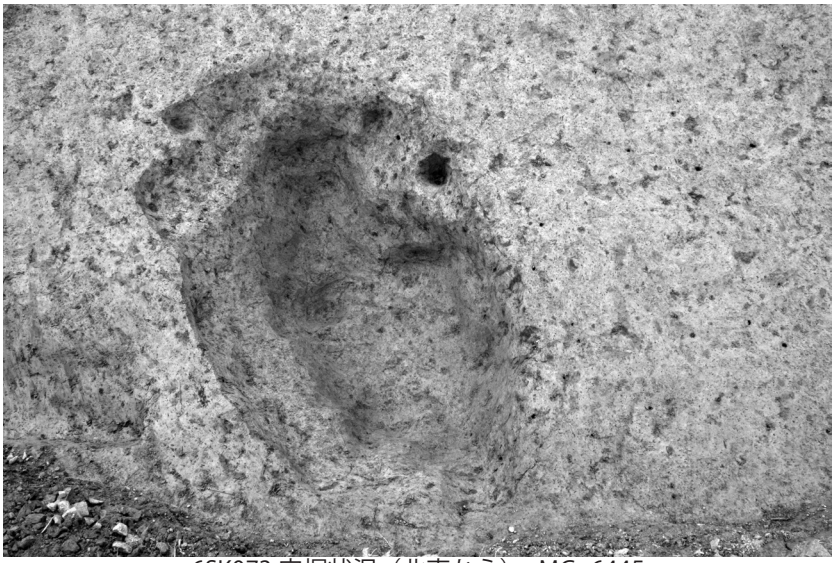
6SK055 完掘状況（南西から）

6SK071 土層観察（北東から）

Pla.10

6SK071 完掘状況（北東から）

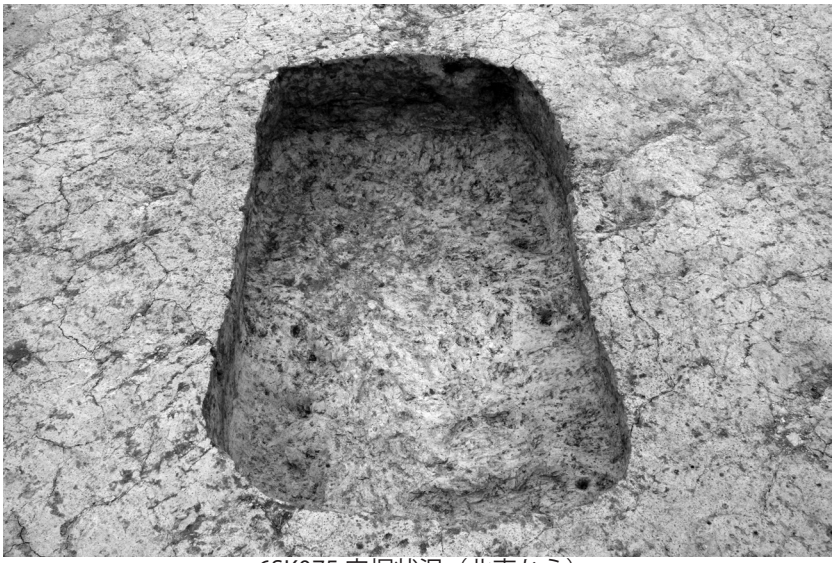
6SK073 土層観察（北西から）



6SK073 完掘状況（北東から）_MG_6445

6SK075 検出状況（南西から）

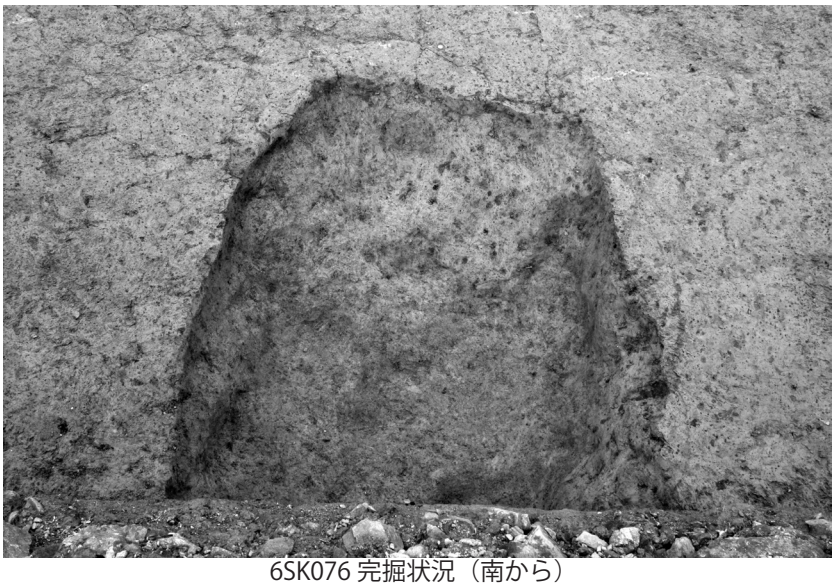
6SK075 土層観察（北西から）



6SK075 完掘状況（北東から）

Pla.12

6SK076 土層観察（東から）



6SK076 完掘状況（南から）

6SK077 土層観察（西から）

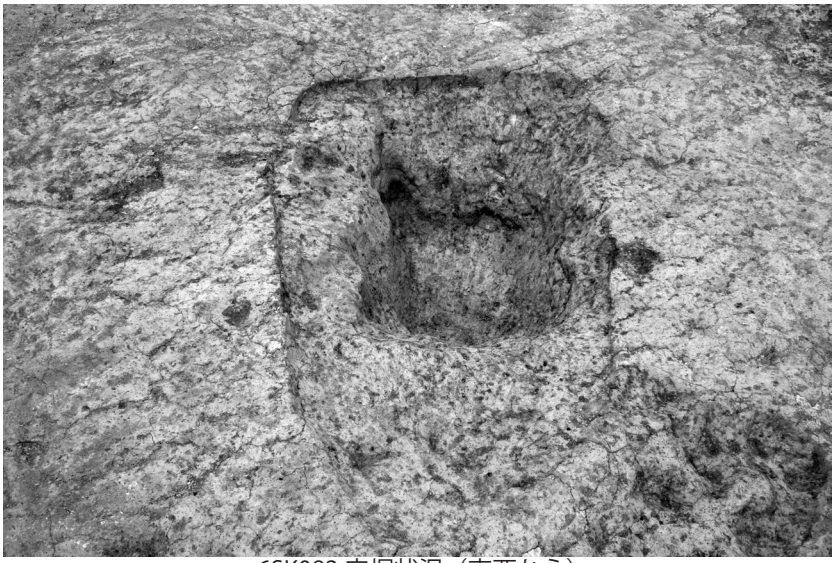
6SK077 完掘状況（南から）

6SK80・105 検出状況（南西から）

6SK080 土層観察（南西から）

6SK080 完掘状況（北西から）

6SK082 土層観察（北西から）



6SK082 完掘状況（南西から）

6SK090 土層観察（北西から）

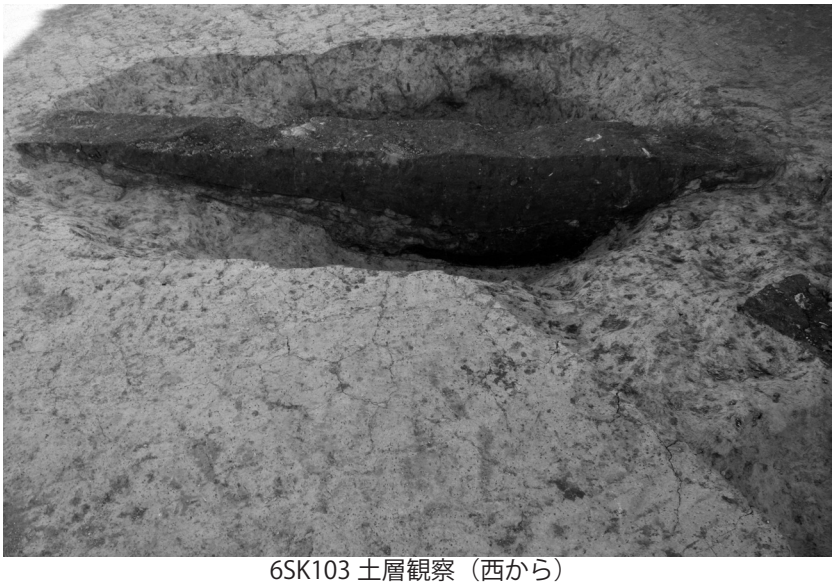
6SK090 完掘状況（南西から）

6SK099 土層観察（北東から）

6SK099 完掘状況（南西から）

6SK100 土層観察（南東から）

6SK102 土層観察（北から）

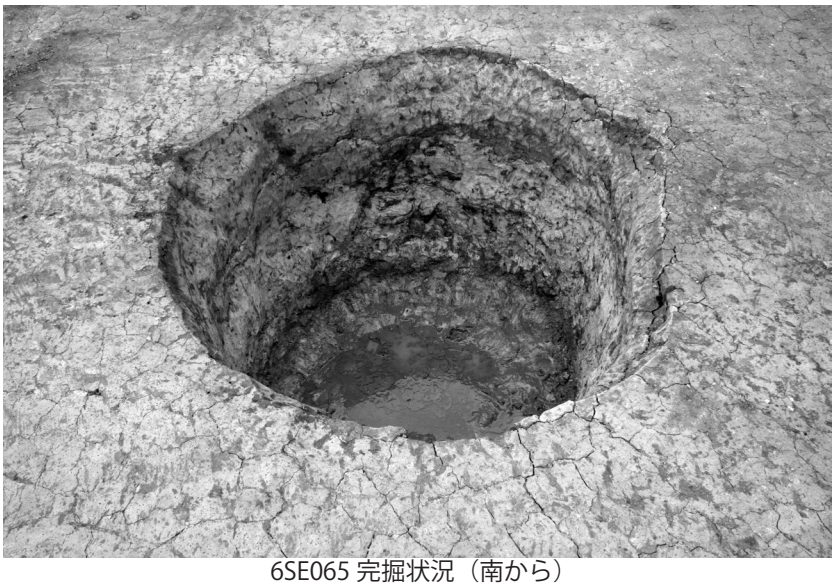


6SK103 土層観察（西から）

6SD041 土層観察（西から）

6SD041 完掘状況（西から）

6SE065 土層観察（南から）



6SE065 完掘状況（南から）

6SE065 完掘底部状況（南から）

15-1

15-2

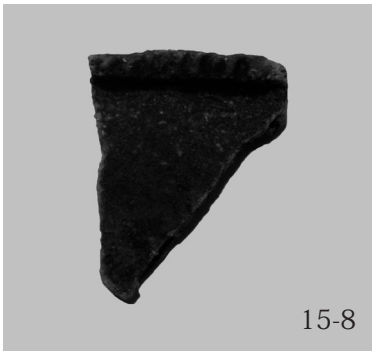
15-3

15-4

15-5

15-6

15-7


15-8

15-9

15-10

15-11

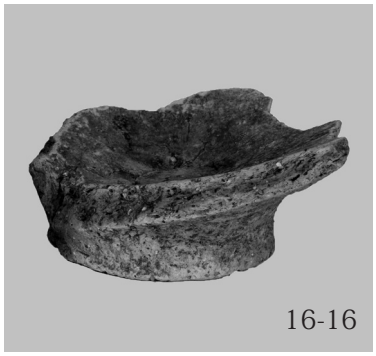
15-12

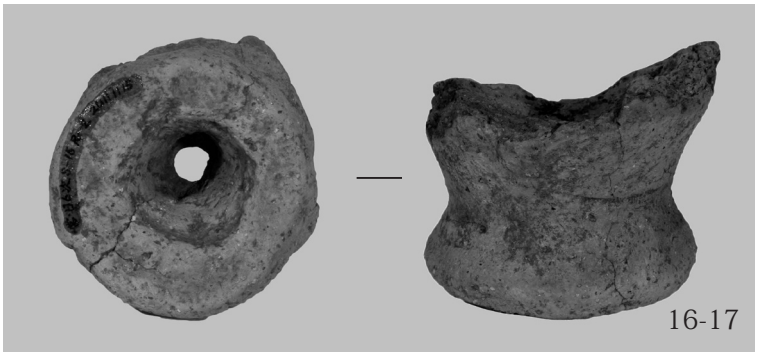
16-13

16-14

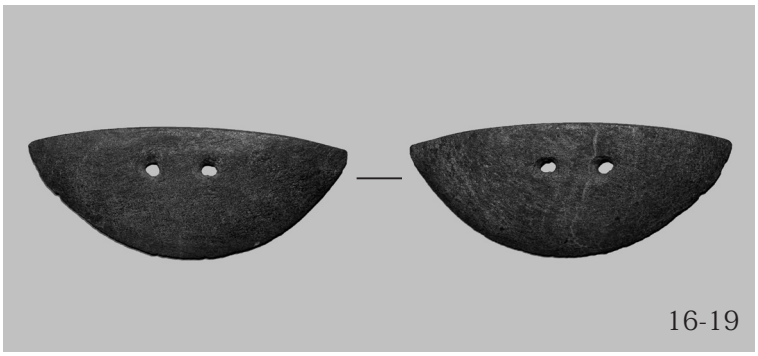
16-15

Pla.20


16-16


16-17

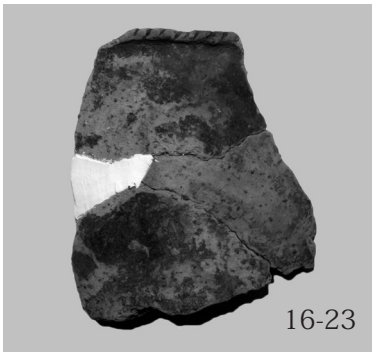
16-18


16-19

16-20

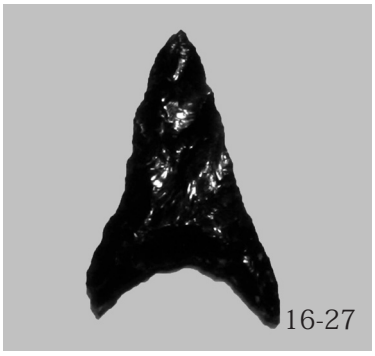
16-21

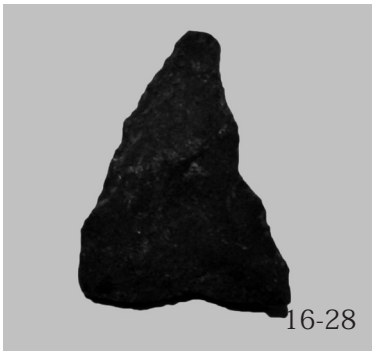
16-22

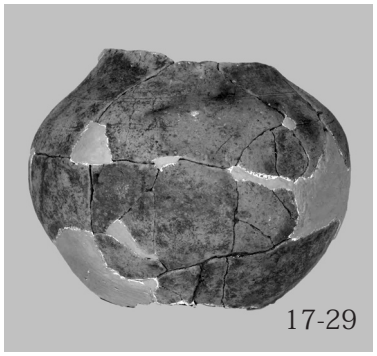

16-23

16-24

16-25


16-27


16-28


17-29

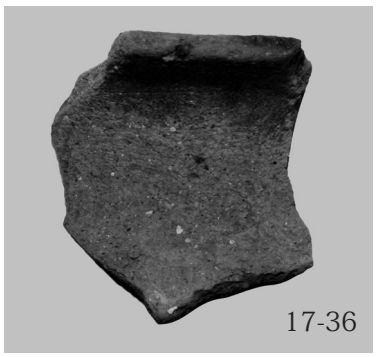
17-30

17-31

17-32

17-34

17-35


17-36

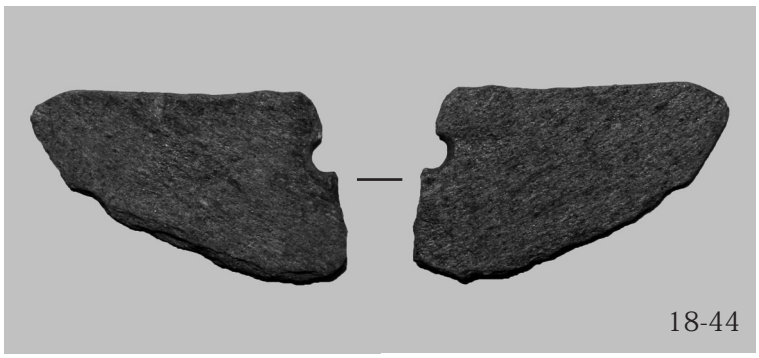
17-40

17-41

17-42

17-43

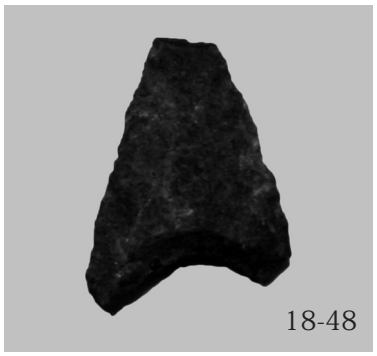
18-45

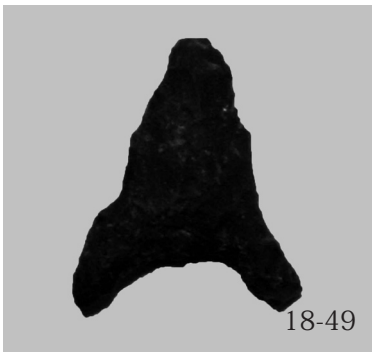

18-44

Pla.22

18-46

18-47


18-48


18-49

18-50

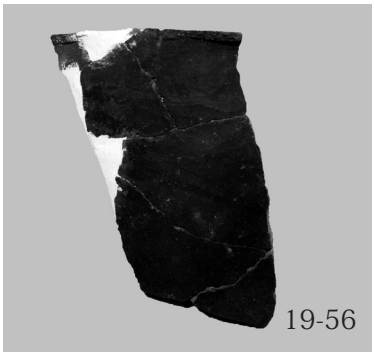
18-51

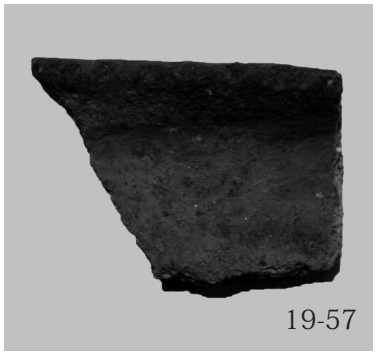
19-52

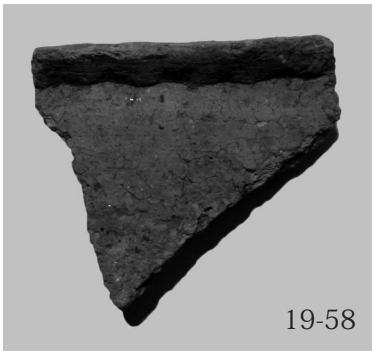
19-53

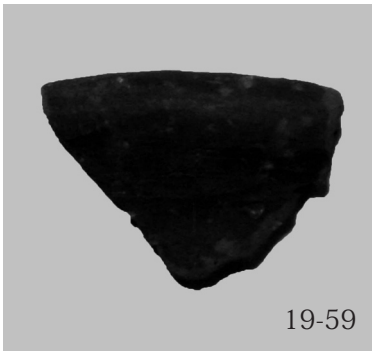
19-54

19-55


19-56


19-57


19-58


19-59

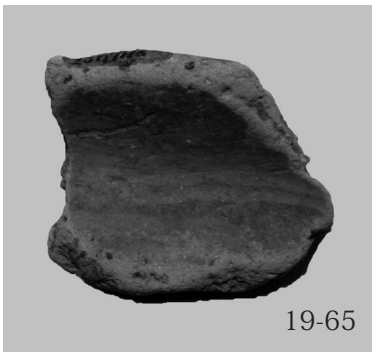
19-60

19-61

19-62

19-63

19-64


19-65

19-66

20-67

20-68

20-69

20-70

20-71

20-72

20-73

20-74

Pla.24

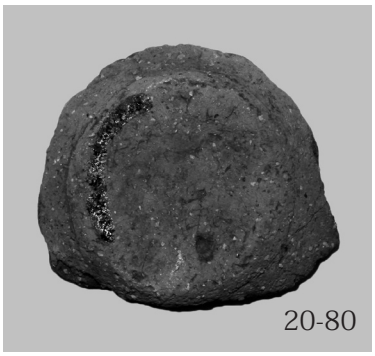
20-75

20-76

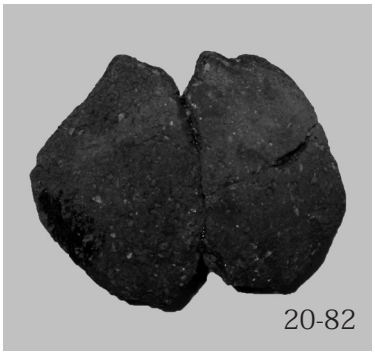
20-77

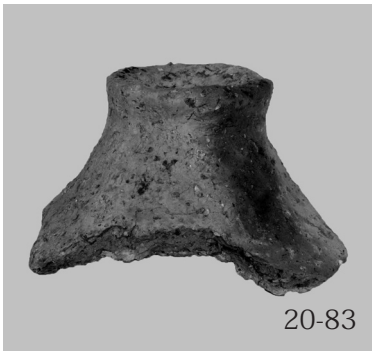
20-78

20-79

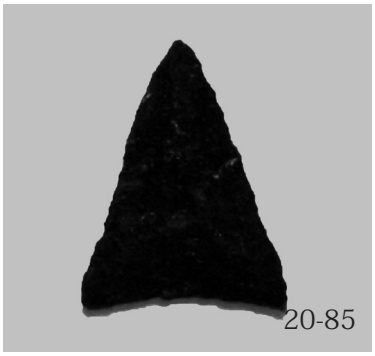

20-80

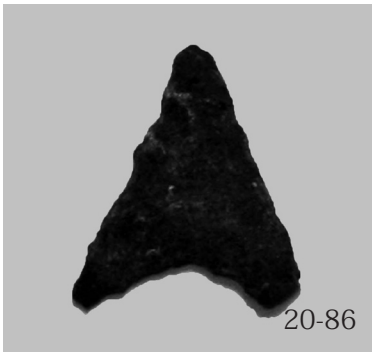
20-81

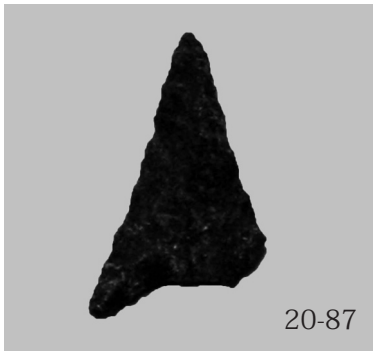

20-82

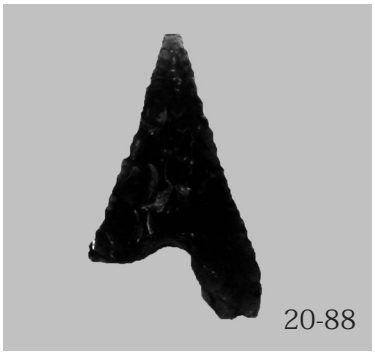

20-83

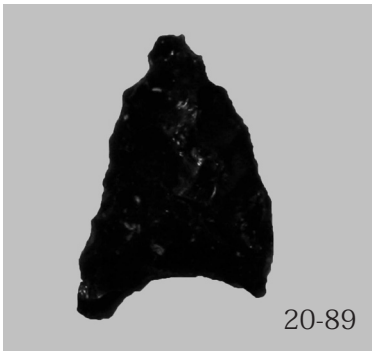
20-84


20-85


20-86


20-87

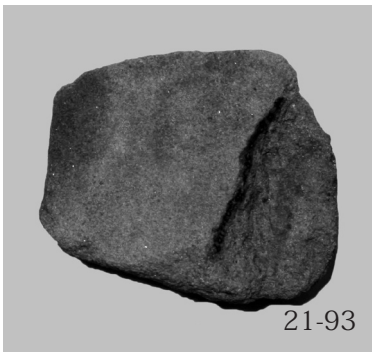

20-88


20-89

20-90

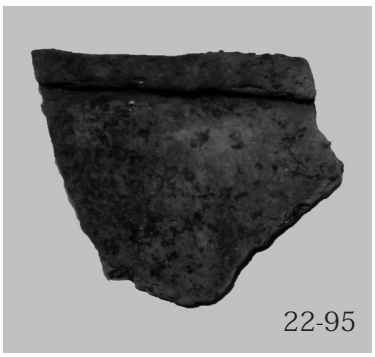
20-91

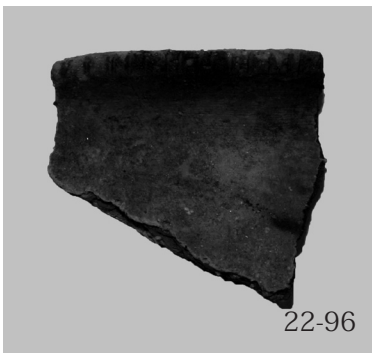
21-92


21-93

21-94

21-94 の後


22-95


22-96

22-97

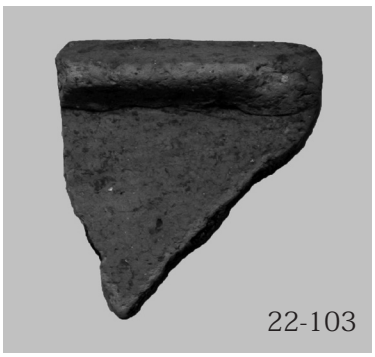
22-98

22-99

22-100

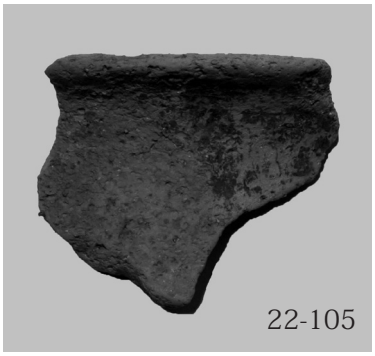
22-101

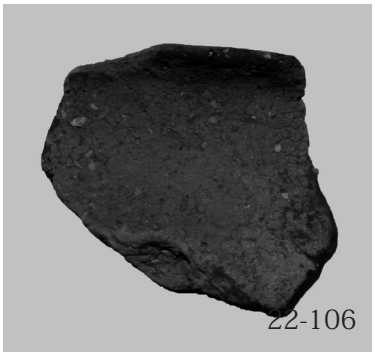
22-102

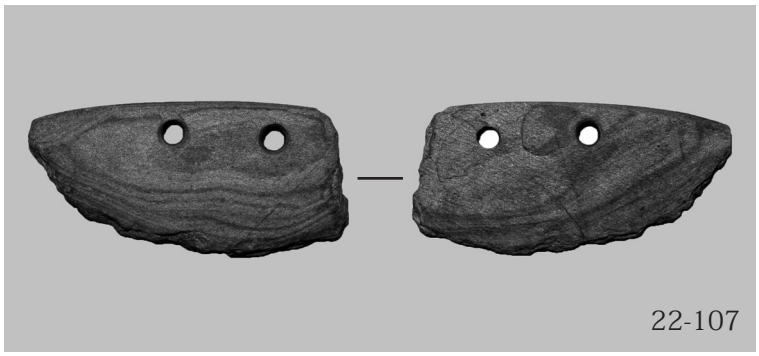

22-103

Pla.26

22-104


22-105

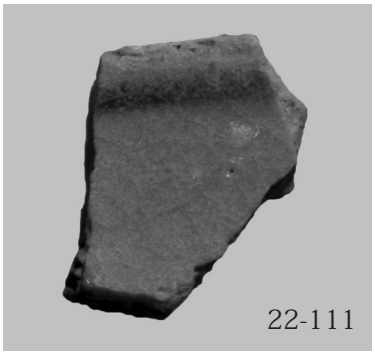

22-106


22-107

22-108

22-109

22-110


22-111

22-112

23-113

23-114

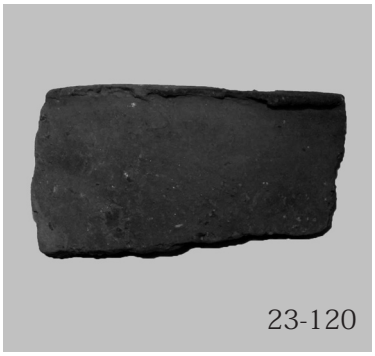
23-115

23-116

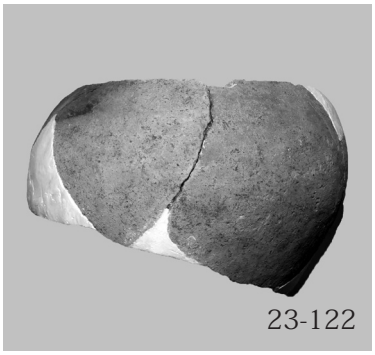
23-117

23-118

23-119


23-120

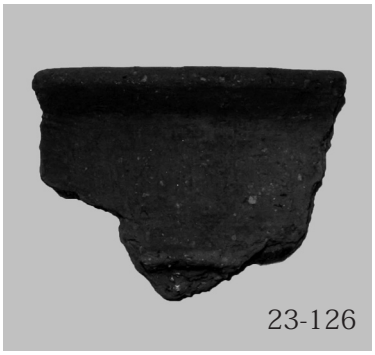
23-121


23-122

23-123

23-124

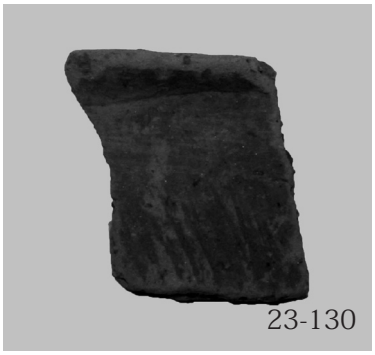
23-125

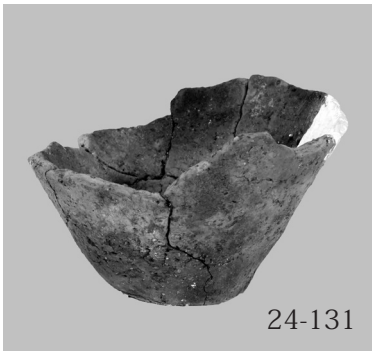

23-126

23-127

23-128

23-129


23-130


24-131

24-133

Pla.28

24-134

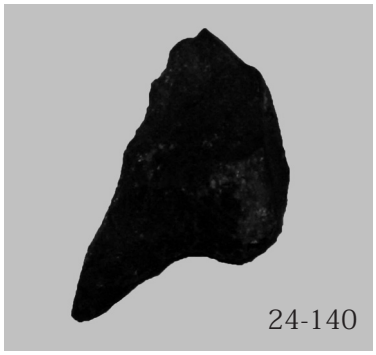
24-135

24-136

24-137

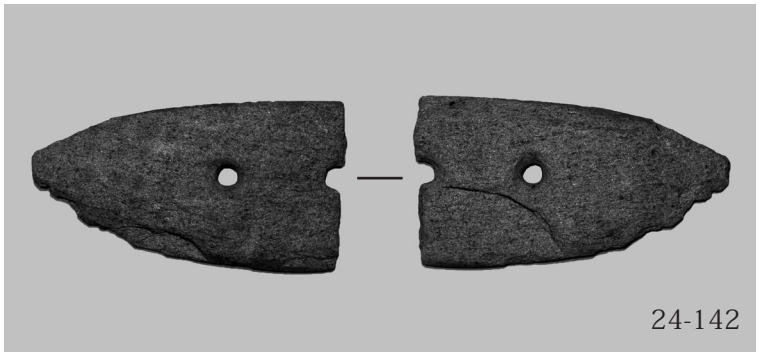
24-138

24-139

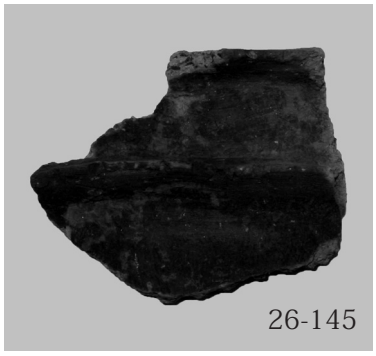

24-140

24-141

25-143


24-142

25-144


26-145

26-146

26-147

26-150

26-151

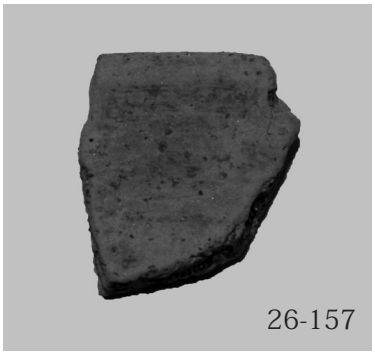
26-152

26-153

26-154

26-155

26-156

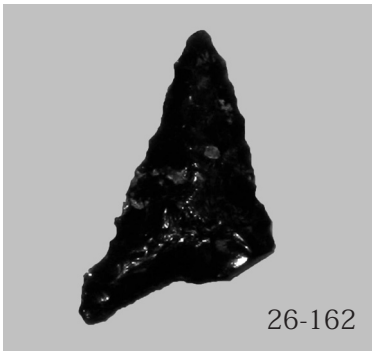

26-157

26-158

26-159

26-160

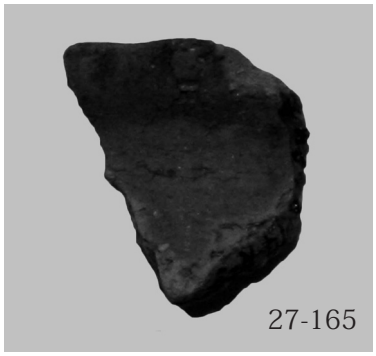
26-161

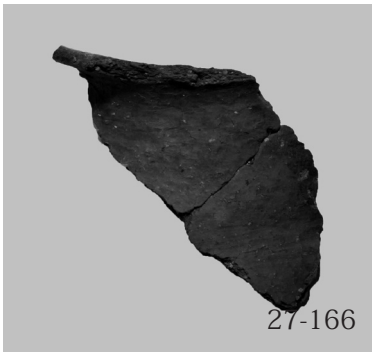

26-162

27-163

27-164

Pla.30


27-165


27-166

27-167

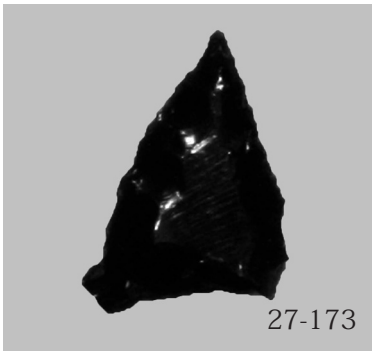
27-168

27-169

27-170

27-171

27-172


27-173

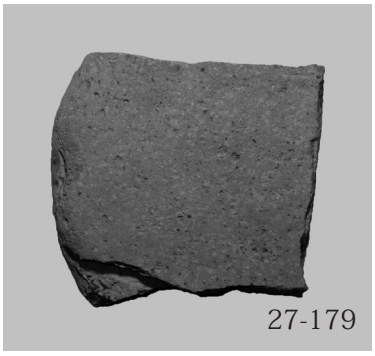
27-174

27-175

27-176

27-177

27-178


27-179

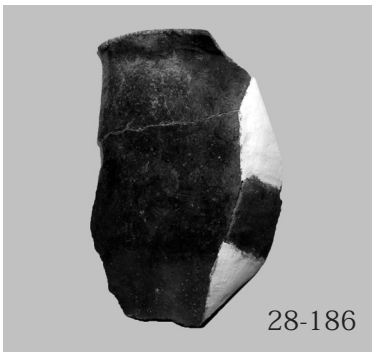
27-180

28-181

28-183

28-184

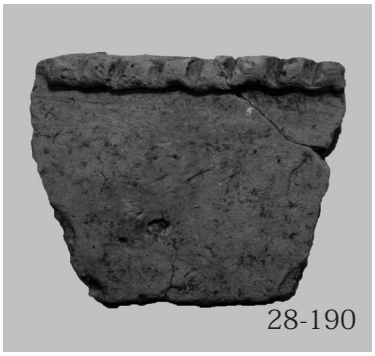
28-185


28-186

28-187

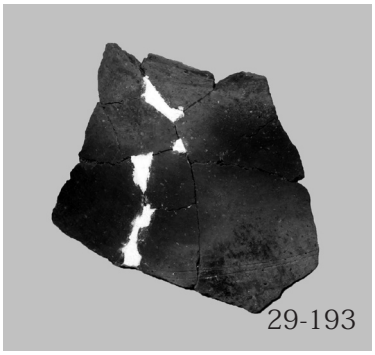
28-188

28-189

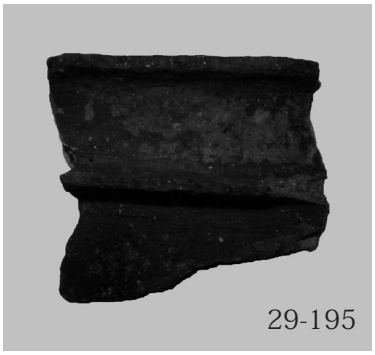

28-190

28-191

29-192


29-193

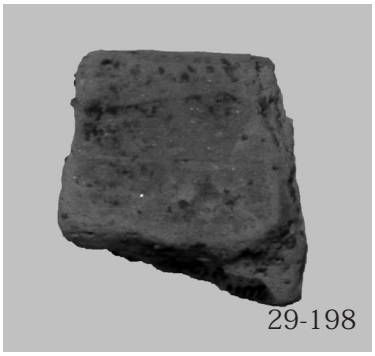
29-194


29-195

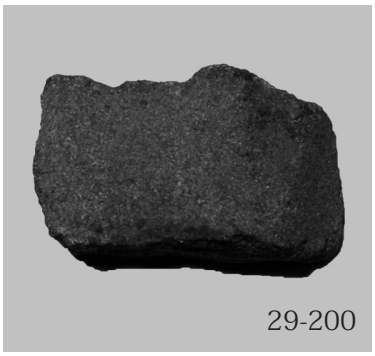
Pla.32

29-196

29-197


29-198

29-199


29-200

29-201

29-202

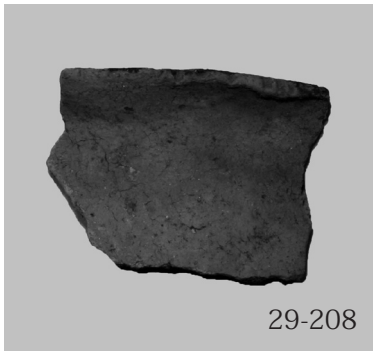
29-203

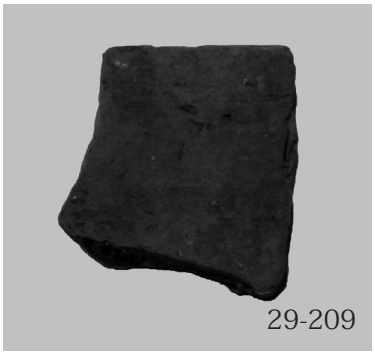
29-204

29-205

29-206

29-207


29-208


29-209

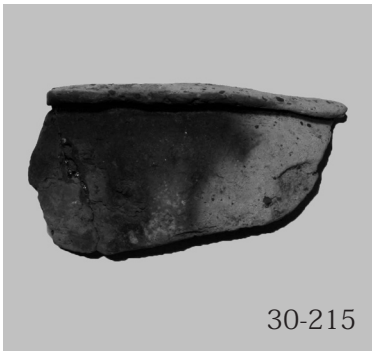
30-210

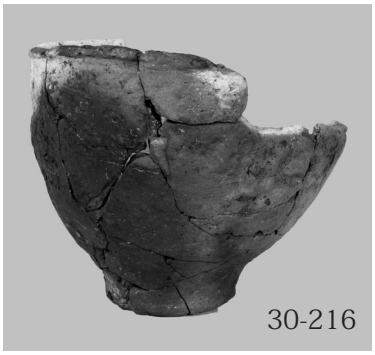
30-211

30-212

30-213

30-214

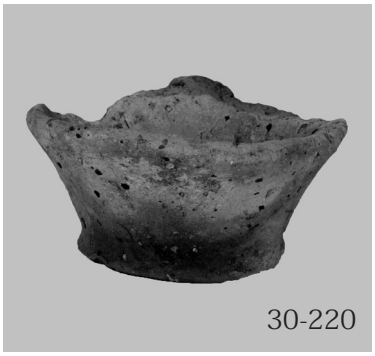

30-215


30-216

30-217

30-218

30-219


30-220

31-221

31-222

31-223

31-224

31-225

Pla.34

31-226

32-227

32-228

32-229

32-230

32-231

32-232

32-233

32-234

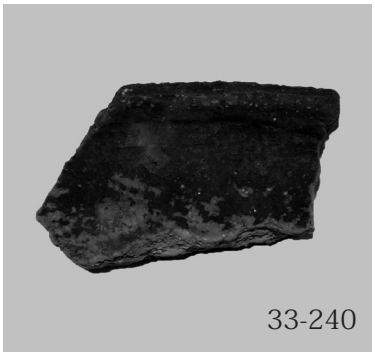
32-235

32-236

32-237

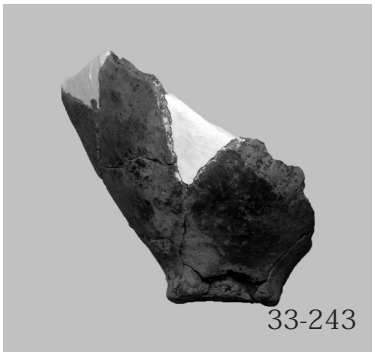
32-238

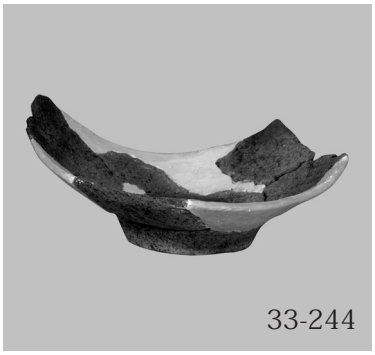
32-239


33-240

33-241

33-242


33-243

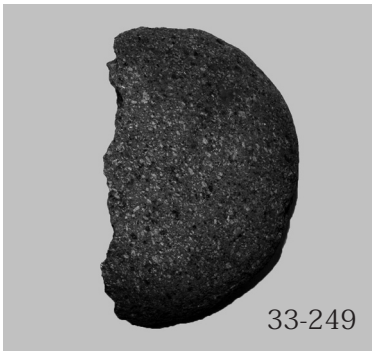

33-244

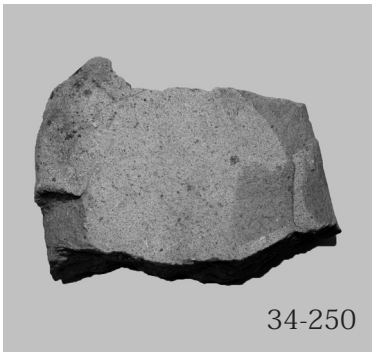
33-245

33-246

33-247

33-248


33-249


34-250

34-251

34-252

筑後市文化財調査報告書　第 107 集

常用日田行遺跡

平成 25 年 3 月

発行　筑後市教育委員会

福岡県筑後市大字山ノ井 898

TEL　0942-65-7072

印刷　大同印刷株式会社

佐賀県佐賀市久保泉町大字上和泉 1848-20

TEL　0952-71-8520